を見よとて淵歩したものであつたが、此中では德輔などは比較的文化の風に吹かれた方であつた。

それから伯林で寫眞を見て感嘆し『若漢ノ時斯術アラバ昭君未ダ必ズシモ胡人ニ嫁セザルベシ』と妙な方面に理窟をつけその他到る處珍談を殘し十二月十日品川に歸着したのである。

それから世運一轉して明治となりては此德輔は宮中の大官として時めき東北御巡幸の際供奉して泊つた宿では今でも『杉孫七郎殿下御旅館』といふ掛札を藏して居る、小使が雇人から殿下に迄出世した譯である始めは實質以下の小使の名を呼ばれたものが後には實質以上の殿下呼ばはりをされたのである、どこ迄も實質と形式とは相副はない男である。

こゝで一寸同人の爲めに辯じて置くのは右の殿下と呼ばれたからとて不敬呼ばりはちと氣の毒であるそれは一體敬稱は下降するのが普通で殿下の號も昔は今と同じく皇族に限られたのであるが、後には關白迄殿下と稱するに至り明治の初年に至つては右大臣さへ殿下と呼ばれたので皇室典範制定迄は制限が無かつたから杉小使も殿下と呼ばれた迄である。

ロンドンの人別二百八十萬

前回前々回に述べた洋行の際の祕書官長ともいふべき柴田貞太郎は其後柴田日向守と任官し慶應三年には横須賀造船所の器械買入れの爲め渡歐した、今度は二度目の洋行だから外の連中の樣な赤毛布とは少し違ふので其隨員岡田攝の日記を見ても中々要領を得たる記事が散見する。

慶應二年閏五月五日横濱港を出帆したので當時のマルセイユ迄の船賃を書いてある。

第一等の船客上等の室に居る者

九百二十一兩三朱一匁七分五厘

第二等の室に居る者

五百五十九兩二朱三匁五分

第二等尋常の室に居る者

四百二十七兩一分二朱二匁五分

第二等の客

二百六十八兩二分二朱餘

西洋物價の高きに比すれば其値下値なりと書いてある。

七月五日マルセイユ港着十月二十一日ロンドン着ランガムホテルに投宿し二十三日は地下トンネル

を見て驚いて居る、『トンネル』は廸讓の義なんて說明の方が今では却て解らない樣な說明がしてある。

十一月二日にはタイムス社を見物して居る。

板摺の器械此中に十二あり一個の器械を以一ミニュート間に二千六百葉平均して每日百五十萬葉を摺る斯く莫大の員數を暫時に成すと雖も皆蒸氣の力のみにて一器械に二人宛器械の手傳を爲すのみ

とてそれから新聞の說明がしてある、舊幕使節で新聞に注意したのは此一行と池田筑後守の一行とである、歸途英蘭銀行を見て

バンクオフイングランド

兩替屋の名

といひ此兩替屋は政府に屬するものにして云々此兩替屋中總人數凡そ三百五十人位なりとある。

瓦斯局を見て

白晝の如く行人提灯を携ふる者なし戸內の瓦斯燈は蠟燭六個の光を放ち街上に照すものは十二個の燭光同樣の光あり

西洋一般蠟燭我蠟燭よりも光よろし

英國の事情を述ぶること詳細であるが其中に

千八百六十三年文久三亥年に龍動府の人別を算したるに二百八十三萬人なりと、而して方今每日平均して府に入る者七萬人にして府を出る者亦七萬人なりといふ。

といふのがある凡て數字の統計的記載は多く

英國中鐵道を敷く事網の如く傳信機を張ることは蜘蛛の家の如し、而して國內鐵道の長さを算すれば一萬零八百英里にして此入費四萬ポンドなりと云ふ。

海軍及航海の盛んなる世界中英國に及ぶなし大小軍艦今年の算數六百七十艘此內五分の三は蒸氣軍艦にて其他英國に屬する商船の數二萬七千七百艘噸數四百六十萬噸なり云々

噸は積荷の高尙五百石積千石積といふが如し。

それから處々視察したが海軍の盛んであつて陸軍はさうでもなく又國內に城らしいものも無いこれが陸軍國たる我國武士の疑問であつた、そこで英國の士官に尋ねて見るとそれは外國から攻め來るものあらば海岸にて防禦する丈けだ、海軍は我國の得意とする所である若し海軍に長ぜず陸軍に長じては敵が王城を攻むる際何百萬の精兵が籠城しても駄目だといはれ半分は解つた樣な氣がした、丁度我

國今日の陸軍縮少案の説明である樣に聞えるのも妙だ。

此一行は佛伊を經て翌年正月二十六日神奈川に歸泊したのである。

英皇より獻納の軍艦

我國にて歐式海軍創設の急務なるを認めたのは幕末海警の頻々たるの時からであるが何しろ三百年の鎖國ではさう急速に海軍が出來るものでは無く、始めは和蘭より讓り受けし觀光艦(百五十馬力)で練習を爲し、それから同國より咸臨丸(百馬力)が出來上り、また朝陽艦(百馬力)と鵬翔丸(三百四十噸)(商船)を買入れて練習した、之が當時の我國海軍の總數である。

然るに千八百五十八年安政五年七月五日英國女王よりストームヤクトエンピロル號を幕府に獻納があつた、之は君主の遊覽船であつたので其當時の記錄では『艦內之裝置甚美金碧燦爛トシテ頗ル人目ヲ驚カス』とありて古艦やボロ舟を立派な軍艦と信じて見慣れて居た日本人を驚かせたのである。

此船は英國ブレツキワルにて製造され、長さ二十三間一尺、巾三間三尺、深さ二間一尺、六十馬力外車で大砲四門を備へ蟠龍艦と號し我海軍の中堅を爲した。

此時には、英艦四艘之を護して、品川に入港したのである、外船で江戸灣へ乘入るゝは、非常に面倒でちよいと測量するにしても、懷疑の眼を以て見られて居たのであるが、此時は將軍家へ獻納といふのだから、一切面倒が無く堂々乘込んだのである、しかも日英親善には多大の貢獻を爲したので、當時英國外交官の腕の冴えを見るに足る一談柄である。

慶應三年二月には、海軍傳習として、英國より教師トレシー・ウイルソン以下來着し、トレシーの月給三百七十五兩、水夫は五十兩宛といふ給料で雇聘し、我生徒八十餘名之に就いて傳習したが、維新の騷ぎとなりて解約した。

慶應四年八月十九日、榎本釜次郎武揚蟠龍外八艦を率ゐて品海を脫す、途中大颶風に會ひ、駿河の淸水港に漂着したが陸前松島港に入り、僚艦と合し、函館に入り激戰九回福山城を砲擊し、松前城を攻め官艦春日艦と戰ひ南部沖に東艦を追擊する等戰功多かりしが其最も有名なるは朝陽艦擊沈である。

此時、蟠龍艦の艦長は松岡盤吉で五月十一日官艦銳を盡して函館を攻む、蟠龍僚館回天と共に官艦五艘に當り、奮戰最も力む、蟠龍の一彈、官艦朝陽の火藥庫に命中し、數分にして粉碎形を存せざるに至り、朝陽の艦長中牟田倉之助(海軍中將男爵)顏面に傷を負ひ、辛うじて海中より救ひ出さるゝ

を得た。蟠龍勇氣十倍し、奮戰せしが彈盡き敵また逼らざるを以て、淺洲に乘上げ上陸した、須臾にして、官艦之に火を放ち、夜に入りて、半分許り燒けたが檣の傾倒によりて艦體も亦傾斜し自然に消火した。

戰爭後、英人某此半燒艦を上海に引き行き、手入をして新造艦として乘込みに來たのを、開拓使で買入れ雷電丸と名付けたが、後に軍艦となりて横須賀附屬となつて居り、後に廢艦となり、土佐の捕鯨船となり、後に熱田汽船會社の有となり全く用に堪へざるに至り明治三十年大阪前川造船所で解體せられこゝに記念すべき、日英海軍の連鎖たりし、此艦の終りを告たげのである。

此解體のとき、元同艦の士官であつた横井時庸が、其斷片を得て、之を戸川殘花に贈り、殘花また之を同好の士に頒つた、木村芥舟其一片を額となし、記念物として今に同家に珍藏されてある。

生麥事件

今回英皇儲殿下には、鹿兒島の島津邸に御立寄りの御豫定あり、同家にては生麥事件の顚末を記したものを獻上するの議ありとか、眞に結構な思ひ付きである。

雨降つて地固まるともいふべき近世史上重大なる意義を有する、彼の事件も長い間薩藩の勢力に蔽はれて、事件の眞相は霞を隔てゝ山を見るの感があつたが、時の力は大なるものである、六十年の星霜は終に昔は昔、今は今との感想から島津家の右の擧に出でることゝなり、又他方面の學者の研究から事件は赤裸々に、展開せらるゝに至つたのである。

京濱の中間、鶴見附近生麥の一地籍に英人遭難の碑が建てられてある、此邊一體の地は他の土地のそれの如く近世化せられて昔の面影もないが、未だ街道の宿驛らしき氣分も幾分か殘り、碑の附近は多少當時の狀況を存して、懷舊の情を偲ぶに相應はしいのである。

附近には、總持寺や、花月園がありて、京濱よりの來遊者も多く、生麥の地も從つて著聞して此地方の一名蹟となつて居る、交通の便はよろしく時は恰も郊外散策の好時期である、讀者を案内して暫らく當年の事跡を物語らんかな。

先鶴見驛で下車して、街道筋へ出で横濱の方へ向つて進むと、右側に花月園の中にある子育觀音へ行く途がある、此處から生麥である、今は此邊一體鶴見生麥も相續いて一村となり、生見尾村となつて居るが、昔は此二宿の區別があり、家も處々疎らにあつたものである、それから進むと小さな川があり、幅三尺にも足らぬ土橋がある、これから字本宮で右側に生麥六百九十八番地關口常吉といふ家

がある、これは以前は村田屋勘左衛門といふ家で、島津の行列が此橋を渡つて此家の前へ來たとき、横濱から來た馬上の英人一行と出會つたのである。

此地點で英人一行四人は斬り付けられ、逃げ行く中、リチヤードソンと、ヤーシヤルは、約一町程進んだ邊にて又斬られ、馬上八町程を駈つて、桐屋源四郎方前に至つたとき、リチヤードソンの傷口から滲出した腸は脫落し氣力殆ど盡きたのである。

此家は、今は五百四十二番地川端久吉といふ家である。その時其脫落した腸を犬が咬へて行つたとて當時の話の種となつた。

其から辛うじて、二町餘を去る松並木の處、小字を並木とも、また松原ともいひ、神明前とも呼ぶ處の、茶店の茂五郎方附近で落馬した。

今は此茶屋は無いが、兩側に並木あり、畑や土堤などありて、幾分か昔しの面影がある。

落馬したリチヤードソンは、通り掛りの者に、彼が知れる唯一の日本語たる水々と呼び、附近の草をむしつて傷口に當てゝ居る處へ來たりし薩摩武士六名は、之を附近の畑へ引摺り行き、慘殺したのである。

此邊が現に碑の建つて居る處である、只だ此附近の畑の先きが埋たてられてあるが、昔は畑の近く

迄海があり、其見晴しの宜い邊に茶店があつたのである。今現に此邊にある一軒の茶店は、近頃出來たもので、昔からあつたものでは無いが、其他は大體昔の通りと思へば間違ひは無い。

他の負傷外人はひた走りに駈り、ボラデール夫人の如きは、夢中になつて途中で轉落したり、馬を海中に乘入れたりして、横濱居留地に達し、他の二人は、神奈川本覺寺にある米國領事館に到着し、應急手當を受け、辛うじて助かつたのであるが、特にこれというて指點すべき地點は無い。

英人遭難の碑は、當時一少年たりし、鶴見の人黑川庄三翁が、其附近の土地を購ひ碑を建て、中村正直博士が書したので、其文體と內容とが、當時の時勢を察するに、面白いのである。此黑川翁は、或は現存して居るかも知れぬ、嘗ては此事件の顚末を調べて、世に公にせんとした特志家である、幸ひに健在ならんことを祈るのである。

扨てこれから、事件の概略を追想せんに時は維れ一千八百六十二年九月十四日、我が文久二年八月二十一日其前に勅使を江戸に護衛し、重大なる任務を果した薩藩島津三郎久光は、從士數百（或は三百人ともいひ六百人ともいふ）を率ゐて、大名行列堂々として、武州橘樹郡生麥村にさしかゝつたのは午後二時半頃であつた。なにしおふ、薩摩隼人の精鋭、攘夷一點張りの荒武者共で、之を率ゐるのが頑固無類の島津久光であるから其勢ひはたいしたものだ。其出發前にも、外夷若し途中で無禮の

擧動あらば、斬捨てるといふ屆書を出して來た意氣込であるから、始めから殺氣立つて無事に濟みさうにもない形勢であつた。

一方當時の外人は、幕府の爲すなきに乘じ、支那印度以下の扱ひをして勝手に振舞つて居つたときで、常に內外人の板挟みになつて居る幕府では、條約面では神奈川とあるのを、神奈川は東海道の宿驛であるから事端の生ぜんことを憂へ、横濱を、無理に神奈川の一部と稱して、開港した位であるから、横濱に居留地を定めた後にも東海道は大名往來の頻繁な處であるから、成るべく通行を見合はされたしと照會して置いたが、外人側では、東海道に出なければ、散策運動の便が無いとて承知せず、幕府が長崎出島の蘭館扱ひは御免を蒙るといふ意嚮である。それでは、本牧の方へ散歩運動せられたしとて道路迄修築し、東海道に大名の通行あるときは、前以て通知あるから其時丈けはせめて遠慮せられたいとの交渉をなして置いたが、丁度此時、香港から來て居つた英人リチヤードソン、ボラテール、マーシヤル、クラークの四人が、香港へ歸る前に、此國の首都たる江戸を見物せんとて、何れも馬上で出掛けたのである。友人等は、今日は島津といへる大名の通行があるから、見合せたがよからうと忠告したが、此四人は、支那にて英人が支那人に對する心地にて、聞き入れずして出掛けたのである。

此一行が、島津の行列と出合つたのは、前回述べた地點である。此處に於て、島津の供目附奈良原喜左衞門が、リチヤードソンに斬り付け、其左の肩と、脇腹に創を負はした。それからは、誰が何といふこと無く、一同拔き連れて、外人一同を襲ひ、マーシヤルの背、クラークの肩先、ボラデール夫人の頭髮等に斬り付けた。此騷ぎに前方一町程進んで居つた鐵砲組の久木村利休が、待ちかまへて、逃げ來るリチヤードソンの左腹と手へ斬込み、マーシヤルの左腹部へ斬りつけた。

後に英國との、談判の時、英國側では、千四百本の刀を有せる七百餘名は、何等武裝無き我國人を目掛けて、亂擊せられたといつて居る。形容は仲々甘くいつて居る、特に千四百本の刀といふ邊は、流石は外人の着眼で面白い。

これまでの事實は、朧氣ながらも世に傳はつて居るが、これから先の事實は、これまで隱蔽されて居るので、世に明かになつて居らないから、此點に付一言附加する。

扨て、前回に述べた桐屋の前にリチヤードソンは腸が落ちてから氣力も盡きて二町餘り先きの並木の處に落馬し水を呼び、附近の草をむしりて傷口に當て、苦悶し居る處へ、駈け來つたのが薩藩の海江田武次（信義子爵）、奈良原幸五郎（繁男爵）等六名許り（黑田淸隆も其內に加はりしやの疑ひがある）で此瀕死の外人を、附近の畑中へ引摺り行き、各一刀を加へ慘殺し、止めを刺し、附近の茶店の

脇に捨てありし古き葭簀を持來り死骸の上に被せ、愉快々々を連呼しつゝ意氣揚々として引上げたのである。

此慘殺の場所は、今の碑のある邊よりは海岸に近い方で、其當時にはその邊に、古井戸があつたが今はそれすら埋められて、其地點は定かに極め難いが、碑の附近と見て大差は無いのである。

此事件で第一に問題となるのは外人殺害の理由である、薩藩は始めから外人が我行列を切つたから無禮打ちにしたと主張し世人は今でも左樣に信じて居る、現に最近にも某文士は其史論に於て我國法を犯したものを成敗するに他國より彼是いはれる筈は無いとて英國側の主張を批難して居る。

之に反し英國側は始めより其事實無かりしことを極力主張して居る、重大なる國際問題となつたのであるからお互に懸引を用ゐて自己の主張に利せんとするのは當然であるが內外の史料を對照し冷靜に判斷すればこれはどうしても英國側に團扇を擧げねばならぬ、行列を切つたといふのは薩藩側が後に至つて考へ出した口實に過ぎない。

然らば何故に之を斬つたかといへばこれは薩藩が幕府をして外交の困難に陷らしめんとする苦肉策であると邪推するものがある、これは當時能くこんな樣な實例があつたからの立論であらうがそれではあまりにひどい、我輩は斯く斷定するのを欲しない善意に解して彼我事情の疏通を缺いた罪に歸す

るのである。

現に此一行の少し前に島津の行列に出會つた米人ウェンリードは大の日本通であつたから直ちに下馬して馬の口を執り道の傍らに佇み駕の通る時脫帽して敬禮したから無事に江戸へ達することが出來た。

然るに此一行は前に述べた意氣込で馬上で其儘駈けて來た、之を見た薩藩士は無禮だから引返せと合圖をしたが引返せといふのが無禮だとて英人は應ぜない、此第一歩に於て既に彼我の感情は衝突して居る此時代の我國法としては百姓町人の乘馬は禁ぜられてあつた馬一匹槍一筋といへる語は士人の榮譽ある特權として百姓は自己の馬でも乘り歩るくことは出來なかつた、日本人同志でも單なる一人の士の通行に對し百姓町人が乘馬の儘通つたら是れ丈けでも無禮打ちに會ふのは當然である況んやそれが大名行列に對するときは勿論である更に況んやそれが禽獸に均しい夷狄に於てをやである、見れば素町人の癖に馬上の儘である特にまた其內に女の癖に生意氣千萬にも馬上でそれに冠物（帽子ボンネツト）さへ取らぬとは愈怪しからんといふ感情もあつたらう。

極端なる男尊女卑で百姓町人を奴隸の如く思つて居る薩藩と女尊男卑で實業家を重んずる英國人と出會つたのが双方の不幸である。

それに外人から見れば結髪太刀の武士の一隊が奴挟箱節面白く街道を練つて行くのは非常に面白くも見え又侮蔑的な眼で見て互に語り合ひ笑ひ居つたのが薩藩士の眼にも觸れたらう、血氣盛りで人を斬つて見たくて堪らぬ若士共は諸所の異人殺しの話を聞いて居り今眼前に外人を見ては無暗に腕が鳴つたであらう。

それから第二の問題は此殺害は久光の命令に出でしものかどうかといふ點である、外人側は之を主張し迚だしきは最後の慘殺のときは久光も一刀を加へたとの報もあり或は久光が指圖して慘殺したといふ説もある、久光の性格から推して此場合單に默つて居る筈も無くまた行列を正して進む際に主君の命令無くて家來共が勝手に此暴行を爲す譯が無く其他前後の事情より考ふればどうしても久光の命令に出でたものだとの説もある。

外交談判としては久光自身の行爲とする方が先方で都合が能くまた政事上の責任としては勿論久光は知らぬといへないが、嚴密なる見解からすれば久光の差圖といふのが少し酷だと思ふ況んや久光が直接に手を下し一刀を加へたといふ如きは到底有り得べからざることゝ思ふ、一言久光の爲めに辯じて置く。

此事件のあつた爲め、薩藩は其夜は神奈川泊りの豫定であつたのを變更して程ケ谷泊りとしたので

ある。これはいろんな理由はあらうが結局は英人が恐かつたのだ、現に若士共は此理由で反對したのであつたが、小松帶刀は神奈川は要害不便の旅宿で鐵砲も不充分だからとの理由で此議となつたのである。

此變事突發に際し、神奈川奉行の苦心は諒とせねばならぬ、先づ第一に薩藩と英兵との衝突を止めねばならぬから、一方薩藩を急行せしめ、一方英兵を遲らしめる爲め、門を閉ぢ一方渡船場の水夫等に命じて成るべく舟を遲らす樣にし、また善後策に付き英國側の感情を宥めねばならぬので百方奔走した、此の事蹟はあまりに傳はつて居らぬからこれも一寸附言して置く。

此事件のあつた後に、此附近に外人間に『スペイン美人の茶屋』と呼ばれ常に外人が來て此事件の話を聞く茶店があつた、それは此茶店の娘がスペイン人に似て居るといふ處からこんな綽名があつたのであるが、其女の得意として居る話といふは『あの殺された異人さんは其行くときは妾の家の前を通りながら、妾に挨拶して行つたのです、あの人は時々此邊に散歩に來るから顏馴染になつて居るのです、それがどうです、血だらけになつて身を引摺りながらやつと妾の家の前迄來たのです妾も驚いたのですが苦しさうに水々といひますから、妾は水をあげたのです、ほんたうに甘さうに呑まれました、妾は其傷の手當をして居る處へ薩摩樣のお士さんが來て私を押退けあの可哀相な夷人さんを引

摺つて行きなぶり殺しにして散々ひどいことをして擧句に畑の溝の中に投げ込んで行つたのです、私はその死骸を家に持つて來てせめて葬つて上げようと思ふうちに横濱の方から迎へが來たのです』といふのであるが、これは眞赤な嘘である。

それから明治十七八年頃此邊の茶店に六十許りの婆さんが居り之れが當時の話を知つて居るとて手に取る如く述べて海江田さんも知つて居る抔と喋舌つて居つたが、之れも宜加減な出鱈目である、そこで此の婆さんは前のスペイン美人の後身で無いかと思はれるが、その點は今では解らない、兎角こんな樣な食はせ者はちよい〳〵あつて困る。

また前に述べた如く負傷外人の腸の滲出したのが當時の談柄となつたのであるが、滑稽なのは横濱迄逃げのびたマーシャルが服の切れ目からフランネルの赤い切れが出たのを見てこれも腸が出たのだとて騒いだこともあつた。

また外人一行はウヰスキーの小罎を持つて居つたのを薩藩士は之はピストルを持つて狙撃するものと誤解したものもあつた、リチヤードソンが最後迄離さなかつた罎も後になりあれは夷人の徳利ださうだとて話の種となつた、此頃は硝子がビードロといはれて珍重され更に罎となつてはフラソコといふものだとて珍藏され、外國船員が捨てたビールの空罎が高價に賣買され之を買つたものは鬱金木綿

で包み桐の箱に藏するといふ時であつたから、更にウヰスキーの瓶は珍らしがられたのであつたが、これは後に死體と共に引取られて行つたリチヤードソンの遺物としては帽子と靴と此罎と丈けであつた。

扨てこれから大騒ぎとなり、償金問題から薩英戰爭となるのであるが、その償金談判の時英國に宜加減なことをいはれナツシング氏などいへる被害者迄數へ出したと近頃出來た某々の書に面白く書いてあるが、これはまるで當時の事情を知らぬ言である、幕府如何に無能でもそんな馬鹿なことはあり樣は無い敢て辯駁する程の價値も無い。

此事件の結局の大詰たる薩英戰爭については世に知られて居るから之を省略し、只だ其逸聞の二三を次回に述べようと思ふ。

薩英戰爭餘談

英國東洋艦隊の鹿兒島砲撃はお互に勝つた積りで居るが、戰爭當時には之と反對にお互に負けた積りで口惜しがつた。

薩藩側では砲は破れ舟は焼かれ城下は焼かれる悠々と引上ぐる敵艦隊を追擊する軍艦は無い、風に送られる樂隊の響さへ癪にさはる隊長伊知地正治の如きは砲臺上に仰向になり足をじたばたして口惜しがつた。

英艦では要求の通らなかつた許りで無く、艦長は戰死する陸戰隊の上陸さへ出來なかつた、實は始めより開戰の積りで無く威喝の積りであつたのが戰爭となつて面喰つたので、此上は再擧を圖るより外に策無しとて引上げた。

薩藩とて英艦は其儘引込むものとは思はない、是に對する準備に怠りなかつたが、そこは利口な薩藩だ勝つて償金を拂ふのは恥づるに及ばないといふ理窟をつけ、償金を支拂つて無事落着した、どんな理窟がついても償金を拂つた以上は負けを自覺したのだ、所謂力の實物教育を受けて啓發したのだ。

それから英艦の置いて行つた錨を、其後渡した爲めに英は薩の高義に感じたといつて居るが、これも負け惜しみで、其實錨を奪つたことの價値を知らなかつたのだ。

此戰ひに樺山資紀（海軍大將伯爵）十八歳の初陣で、祇園洲砲臺にあつた、後年樺山に其時の狀況を聞いたものがあつたときに樺山答へて曰く日本外史抔で將軍率ゐる所何百餘騎とあるが、オイド

ンも右戰爭のときは其餘騎の中であつたと此男仲々話せる。

それから開戰前に薩藩では果物賣りに變裝し英船へ切り込んで其艦を奪はうといふので、血氣の若士は何れも裸體に犢鼻褌に大刀を帶び、小舟に西瓜を山の如く積んで果物賣りと稱して英艦へ近づいたが、英艦も之を覺りて其手に乘らなかつた、話は極めて勇壯の樣であるが何んのことはない亞弗利加の土人がクツクを殺した樣な遣方である、南洋邊の土蠻でもあんまり流行らぬ手である、此勇壯組の一人に松方助左衛門（正義侯爵）も居た。

此戰爭で英艦は現今使用の椎實彈を使用したのを薩藩では驚いた玉は昔から丸いものと極めて居つたのに尖つた彈丸が飛んで來たといふので、其不發彈を見ても眼を光らして睨んで居るというて氣味惡がつたものだ、今ではどんな子供でも砲彈は尖つたものだと思つて居るのに、此時は薩藩の砲術家でも之を知らなかつたといふのは嘘の樣な眞實の話である。

此戰には例の神風説が盛んに喧傳された、神々の聲が聞えたとか前の濱の雲中に神々の姿が見えたとか、さては戰爭の始まる前に大風起り敵艦から標的の定まらなかつたもその爲であるといふ樣な説が流布された、國難に神風のつき物であるのは我國民性である。

此談判のときばかりで無く長藩に對する時も同樣に對手國は幕府から償金を取り更に當該藩からも

償金を二重に取るのは隨分ひどい話であるが、自國の一部を外國から攻撃するに知らざる眞似して否寧ろ之を慫慂して自國の一部たる横濱を策源地とするのを看過する如き幕府の遣り方も怪しからんといはねばならぬ、薩長の樣な邪魔物は外國の手で征伐せしむるのが得策だと信ずる如き、幕府が其爲めに外交上に苦しんだのも自業自得なら、幕府をして外交上困難に陷らしめん爲めいろんな非常手段を採り其結局は自分も苦しんだ强藩の遣り方も不都合である、何れも政爭に沒頭して國家あるを忘れた某國の政黨と選ぶ所は無い醜態である。

英公使館燒打と功勞記念牌

英國文明展覽會に福地源一郎が高輪東漸寺なる英國公使館の襲はれたる際防禦したる功に依り授與された英國の功勞記念牌が出品されて居る、其説明書は多分悴の信世が書いたものだらうが、先代源一郎其儘の筆蹟であるから、坐ろに當年の事を思ひ出すのである。

此燒打は維新の元勳某々等が加はつて居つたとの噂もあるが、討入つたのは十四名で、内三人は殺され、一人は負傷して生捕られ、逃げたものゝ内三名自殺した、福地源一郎は當時外國方の役人であ

つたから、其前夜から公使館に詰めて居つたが、騷動を聞き起き出た處、公使館護衛の別手組某が、何の某なり、敵を討取つたり、一番首の功名を記し下さるべしと、息せきつゝ血刀を提げながら流血淋漓たる生首を携へて詰所の緣側に置いた。源一郎此時二十歳、生れて初めて人間の生首を見て、ビツクリしてボンヤリして居るを早く、御請取りくだされと先方に云はれ、右の首を請取つたのは我乍ら恥かしかつたとは後年に至る迄源一郎の話の種となつて居つた。

此とき、護衛の武士にも數名の死傷者を生じたが、公使始め館員は無事であつたので、英國公使アルコツクは之を感謝し、本國へ賞與を申達し、負傷者には夫れ〴〵手當を爲し見舞品を贈つた。

幕府でも、公使館員の無事なるを喜び、外交上の問題を起さゞりしに安堵したが、こゝに一つの問題を生じたのは、英公使から勳章の沙汰あるべしと申來つたのに對し、幕府では外國の勳章を受けては、朝廷へ對しても恐れ多い、我國辱となるといふ理由で强ひて斷り、幕府からは夫れ〴〵扶持等を給して之を賞した。

それから時勢は幾變轉し、明治二十二年になりて、英國より通達あり、明治二十七年になり夫れ夫れ授與のあつたのが功勞記念牌である。

始めは國辱として斷つたものが今度は名譽として喜んで受くるに至つたのである、時代の思想とい

ふものは妙なものである。

明治三十九年コンノート殿下が明治大帝に、ガーター勳章御贈進の爲め御來朝ありし際、該事件の當時唯一の生存者なる天野岩次郎(可春)を霞ケ關離宮に引見あり握手の後、

余は貴下を引見するを喜ぶ、殊に貴下が佩ぶる所の賞牌は、英國先帝の下賜せられたるものにして、今貴下が之を佩ぶるを見るは、余の最も欣喜する所なり、惟ふに貴下は既に高齢なり尙ほ能く保養して、永く此賞を佩用せんことを望む。

との有難き御沙汰あり、再び握手を賜ひ、參列の英國の諸官も各握手したのである。

此天野といふのは、舊幕臣で外國御用出役となり、東漸寺なる英國公使館護衛中、此變事あり衆に率先して奮鬪し、一人を組伏せて討取り、猶も追擊したが自分も前額を斬られ、腕にも少し負傷したのであつたが、コンノート殿下に拜謁の後大正七年八十七歳の高齢にて歿したのである。

福地源一郎は、殿下御來朝前に世を捐て、此光榮に浴することは出來なかつたが、其事蹟は著聞して居る。以上二人の事蹟は、世に知られて居るが、此時奮鬪身に十數創を負ひて斃れたる江幡吉平の事蹟の湮滅して居るは、遺憾に堪へない。同人は大番近藤遠江守組同心で、江幡家へ養子に來たものである、維新後一家離散し、其遺族は千葉縣に在るとのことである、今回の樣な盛儀に際し何とか

其事蹟を顯揚したいものである。

西園寺卿の御遠遊

維新の大元勳大岩倉に見出された西園寺公望は公卿中の傑物である、年齢若冠にして山陰道鎭撫總督となつて出征したが、歸來早くも外遊の企畫を爲した、之を聞いた木戸孝允も大岩倉に書面を送りて曰く

西園寺卿此度歸京被遊御遠遊之御內意被爲在候御樣子奉窺候乍恐此卿氣才兼備他日屹度朝廷の御用に被爲立候御儀如掛鏡と奉存候今日之際小事に御奔走被遊候はゞいかにも爲朝廷遺憾之極に奉存上候何卒相公の御盡力を以斷然早急に御遠遊之御宿志被爲遂他日皇國之御大用と被爲立候儀奉祈念候

といつて居る、維新三傑の一たる木戸が如何に傾倒して居つたかゞ解る、また其先見の明は確に適中して居る。

唯だこゝに一寸附言すべきは、右の文章を見ると如何に敬服して居るとはいへ、まるで皇族にでも

對する様な敬語の羅列は木戸ともあらうものが不見識の至りで、また不都合だといふ概念が起るかも知れぬ、がこれは其頃の時勢に付いて知らねばならぬ、維新前迄は位倒れと馬鹿にされて居つた公卿も、王政復古となると威權は百倍した、就中實力のある公卿の權勢は素破らしいものであつた。ズツト後でも三條太政大臣が熱海へ保養に行くに、軍艦派遣に付き内務卿の伊藤博文が奔走した位である から、維新當時はまだ甚だしかつた。前にも述べた様に岩倉は右大臣で殿下と呼ばれて居つたのも此頃であつた。それが況や三條岩倉よりもズツト上である清華の家柄の西園寺卿が實力ありときては、木戸の此敬語だらけの手紙も寧ろ足らぬ位である。明治の半頃の新聞の記事でも知事縣令なんどの事を記したものを見ても、今日の皇族に對する様な不都合な敬語を並べてあり、世人も之を怪しまなかつたのである。

扨て此西園寺卿はキンモチと讀んで居るが、實際の讀方はトモモチである。これは京都は一體に雅言を喜び紫宸殿をシシイデンと讀み、勸修寺をカジユウジと讀む如く、凡てンの音を省いて居る爲め公もキンと讀まずとトモと讀ませたのである。そこで此卿の維新の時卽ち明治元年肩書を見ると

正三位金紫光祿大夫

虎賁中郎將軍兼參與職

西園寺右近衞中將公望卿

といふなが〳〵しいことが書いてある。風流宰相陶庵公とはまるで別人の様に思はれる程時代は隔絶したのである。

それから間も無く權中納言に昇進したのであるが、そのとき所謂御遠遊の思召となつたので、一切の官位を辭し西園寺望一郎と名乘つて出掛けたのである。

洋行中彼の地より送つて來た手紙は、某氏が珍藏して居り之を讀むと思はず吹き出す珍感想が書いてあるが、これはマア預かりとしよう。それから前の肩書を見た序に當時の雲上明覽を見ると

御領五百九十七石餘

御住殿新在家東側

とありあの素破らしい肩書の公卿も、本領は六百石に足らぬ小身であつたのだが

琵琶之御家ナリ

とあり西園寺家と琵琶とは、歴史上有名なる事蹟であるが、公望卿だとて、少時には家の藝として學んだものだが、勿論壯年以後は手にしたこともなかつた。

ところが或時宮中に於て、先帝より琵琶を彈ぜよとの御沙汰あつた。これには公望卿恐懼したが、

それでも鮮に腕の冴を見せ、一曲を彈じ終つて御前にひれ伏し、臣が家の業とは申ながら何十年來手に致したること無之拙き調を御聽に達し恐懼身の措く所を知らずと奏上して冷汗を流したのを、昭憲皇太后の宣はく、それだから卿は朝廷の御役に立つたのだとの玉音を拜し、感泣の極暫らくは聲も出でなかつた。美しき君臣譚として草蒙の我等洩れ承るだに辱なさに涙の零るゝのである。

鎖港説の英人

幕末、鎖港攘夷説が滔天の輿論であつた時代でも、多少心あるものは開國の必要を感じて居つた。中には勢に押れて、表面攘夷論を主張しても內實は開港論のものもあつた。或は單に幕府攻擊の材料として、卽ち政爭の具として、鎖港説を主張したに過ぎなかつたものも多少はあつた。

國內の形勢すら、斯の如き時に當りて、鋭意開國を慫慂した外人中に、鎖港説を主張したものゝあつたのは確に珍である。

幕末に來て居つた英人で、オリハントといふのがあつた、ポリチカルセクリテーと稱して居つたが此男慶應の始め歸英したが、何か自國の國狀に不平でもあつた者か盛に日本を嘆美し、日本の政治は

亞米利加よりも宜しいと主張し、在英日本人の訪ふものあれば喜んで迎へ、一體歐羅巴各國は最早行き詰つて爛熟し切つて居る、英國抔は風俗は紊亂し、政界は腐敗して居る、日本は人道の美點を存し、士氣は緊張して居る。日本は今止むを得ずして長崎、函館、横濱抔と開港したが、歐羅巴の惡風のみ最先は傳染し數年の後には取返しのつかぬ害毒を流すであらう、どうも嘆息すべきことだ、しかし一旦開港した以上は仕方が無いから、此上は成丈け外國人を近づけずに鎖港の方針を採つたが宜しい、なにも諸外國を恐れるにも及ばぬ、日本では百六十餘の諸侯あり、各別に政府があつて半獨立國の體裁を爲して居るから、國力一致せないが此百六十餘の政府を一結し、一日本國として外に對したなら、英佛だとて迎も日本には敵はないといふ風に說き立るものだから、攘夷論者は喜ぶ、又開港論者にも當りの宜い議論でもあり、外人といへば何でも開港を迫り、日本國を窺ふか、然らずんば國の寶を持つて行くものと考へて居つた日本人は、外人中にもこんな卓見家が居るとて喜んで其門に集まつた。

中にも以前より英國と親交ありし薩藩の連中は、大に喜び其說を敷衍して吹聽し、同人の宅に下宿するものさへあつた。

しかし此の男はどんな身分の男であつたか不明であるが、其前年には高輪東漸寺なる英國公使館にも居て燒打のあつたときも、我輩は奮鬪し隨分負傷したが屈せなかつた抔と云つて居つたが、これは

ちと法螺がある様だ、彼の焼打事件のときの死傷者の調を見ても、外人の負傷者の中に此男の名前は無い。あの騒ぎの時であるから外人に若し一寸のカスリ傷でもあつたら、それこそ不問に附さるゝ筈も無く本人も之を祕し居る筈も無い。この男も日本通なるを振り廻す爲めに、いろんなお剩けをつけたものらしい、從つて此男の説も或は何か爲めにする處でもあつて、あんなことを云つたのかも知れないが、兎も角當時にあつては珍貴がられたものである。

此時在英の日本人も、相當に居つたので薩藩からは後に永く海軍に居つた松村淳三や歸朝後加賀藩に聘せられた長澤鼎とか、其外上野良太郎や松浦弘藏や町田仲平抔が居り長藩では文久に密航した伊藤井上と、仲間の野村彌吉（子爵井上勝）や、山尾庸三（子爵）抔が先輩振つて居り、其他藝藩肥藩等の連中等二十人内外は、在英して居つたのである。

幕府では、從來あまり露骨に佛國に倚り過ぎるとの外交團の批難もあり、且は對薩の關係上、英の感情を害するを欲せざる爲め、幕府からも相當の人士は英國に行つて居り、前に述べた蟠龍丸の獻納や、英海軍士官の招聘も、此時に約束されたのであるから、オリハントも幕薩のどちらへでも兩股かけて、日本人に宜しい様なことをいつて居つたのでは無いかとも想像されるが、それは兎も角こんな外人のあつたことも幕末史の一挿話である。（をはり）

掏摸物語

掏摸物語

イヨ〳〵仕立屋銀次が捕つたね、今迄能く捕らなかつたのが不思議と云ふのか、ナニ寧ろ捕つたのが不思議な位ぢや其譯はと云ふのか、それは今更云ふ必要もなければ又云はないでも分つとるぢやないか、兎に角公然帝都に梁山伯を築き顧問に堂々たる法律家あり、贓物處分の機關より獲得金品處分の法迄を制定せる一個の掏摸王國を現出し、幾多の配下を驅使し、白晝生馬の眼を抜くてふ都人士の懐中をふんだくらせる是亦男子一世の快事にあらずやだ。ナニ言葉が不穩當だとそれぢや取消して『是れ豈に立憲治下の一大怪事にあらずや』としたらどうだ是れでいゝだらう、豈に只だ掏摸のみならんやだ複雜なる社會の眞相はリストやビルグマイヤーでは分らぬ況んや是等の下手な飜譯書の丸呑にて於てをやだ、夫よりはゾラの巴里でも讀んだ方が少しは爲になるかも知れぬ、壇上衣冠の人堂々として夫れ雲上人の如し、有識故實に腐心せる藤原氏の權は遂に關東野武士の掌中に歸したるにあらずやだ、何處か其處いらの人しつかり頼むぜ。

ハ、ア銀次の資産は驚くべきだと、先達て我が東京區裁判所で十五年と十二年にたゝきつけた勇天、

勘天と云ふ二人は湯島の配下で有數の奴ぢやが裏許りも百圓内外の外套を着てお抱車で御出勤(?)遊ばすのぢや、そこいらの飢ゑたる〇〇と外國新聞に冷評せられた手合はチツと其爪の垢でも煎じて飲んだらどうぢやハ、ア。

ナニ掏摸の沿革を話せと飛んでもないことを云ふ男ぢや、我輩掏摸の親分ぢやないからね。待て待て茲に我輩日常執務の參考として書き留めた掏摸大鑑と名づけたものがあるよ、ハテ是れが全國掏摸分布圖だ、次が有名なる寫眞それ是れが銀次で是が湯島吉ぢや其他の皆夫れ〴〵特色ある奴共許りぢや、是れから、掏摸名簿有名な者丈けでも隨分あるだらう、それから符號や何やかや方法のことなど掏摸に關するエンサイクロペヂヤぢや、この始めの處に一寸沿革に關したことがあるから話さう、先づ書に出た始めは羅馬の帝政時代に私罪の最も重きものゝ中に Saccalarie と云ふものがある。是れ即ちタツセンヂーブ又ボイテルシナイルデルと云ふ即ち掏摸の事ぢや。茲に於てか掏摸は歐米の方が早く發達したるものなることが證據立てられる、併し現今にては我國が後進國たるに關らず技術にかけては天下に敵なしぢや、伊太利人や露西亞人が歐米では達人だと云ふが彼等の仕事はカツパライの稍進歩したる位でポケツトや胸の鎖を掏る位が精々で、我國の如く電光石火特に巧なるものに至つては「妙」と稱する懐中物の金錢のみを取り、入れ物は其儘舊の通りにして置く入神の技に至つては到底伊

の夢想だもせざる所だ、誰やらが掏摸の日本と云ふ名稱を下したが至極名譽なことぢや、我國の掏摸の巧みなるは古來國人が指先の働きが器用な處からで支那人の如き指先の無器用な者には絶對に掏摸能力がない、此小手先の器用なことに付ては幼時より箸を使ふからだと云ふ說もあれば、して見ると誰やらの因果關係說に依れば飯を食ふことを敎へし父母は其子の掏摸の敎唆者と謂はねばならぬのぢやハ、ア。

夫から一體掏摸は何時頃から盛になつたかと云ふと德川時代からであるらしい、戰國時代には勿論掏摸の必要はなく其以前となれば尙更必要もないから天下平定交通往來の頻繁となつてからと云ふのが當然と思ふ、卽ち江戸に巾着切りあり、東海道に胡麻の灰あり、此兩者が合して發達進步し胡麻の灰が汽車中の所謂箱師となり、巾着切が純然たる掏摸に進步したるものと見て差支ない。前年東京で電車合併の際最も利益あるものは掏摸なりとの說を我輩が主張したが何うだい、近來電車汽車の延長するに從つて掏摸の劇增したことや、京濱嚴なれば靜岡に集り靜岡に居不堪、東京に騷がるれば東北に移る、況んや滿韓の野あるに於てをやで人間到る處靑山ありだ。過般靜岡にて掏摸結託の刑事が家に二個の長距離電話を掛けありしとて世を驚かしたるが借問す司法權活動の爲め長距離電話二個以上ある官廳ありやだ、ナニ此頃の役所の樣は長距離電話處かへ役所夫れ自身でさへ建築費がないではな

いかと、君達はそんな憎まれ口を利くものぢやないよ、我輩の樣な溫和な者も君達に交るとつい口が惡くなつて困るよハ、ア。

大岡越前守が掏摸を公許し、稅金を納めさして鑑札として赤帽子を附與し、鑑札あればいくら掏つてもよろしいが、鑑札が無くて掏れば嚴罰に處するといつたとの落語は、根據の無い說でもない、卽ち天保の頃は其髓の元結を黑色とせしめて識別したことがある是が右の落語の起源らしい是等の默許と云ふもの遂には辻强盜等を働くに至りしかば流石に捨て置く譯には行かなくなり、斯る輩は容赦なく首を叩き斬つたから彼等は大に狼狽して一時跡を潛めた、此頃の親分株とも云ふべきは神田無宿の豆鐵事鐵五郎、芝無宿の芝德、穢多の萬吉、萬引の虎、向島無宿佐渡、ござい金事勇九郎、井間堀の遠州屋、横濱の秀奴等で是ぞ第一回の大檢擧であつたのだが、併し其地盤は牢固として叛くべからず、遂に後代の禍を爲すに至つたのぢや、其後穢多の萬吉、萬引の虎の兩人破獄を企てしとき勇九郎と遠州屋とが之を阻み破牢を防ぎしことの功に依り遠州屋は死一等を減じて追方となり、勇九郎は入牢十七年に處せられた、此十七年と云ふのが新刑法の最長期に似てをるから妙ではないか、此の勇九郎と云ふ奴は所謂天才肌でそりや勿論掏摸と手品は敎へても駄目ぢやが、ナニ天才でなくても誰でも出來るが、裁判官だと餘計な事を云ふものではない、マア混ぜッ返さずに後を聞け、此勇九郎が掏

摸となつた動機が面白い、十歳頃のこと淺草觀音に遊び廻つてをつたが、或る侍の袂の下を潜るに屢袂が頭に當る拍子に何やら有る樣だからそつと手を入れて取つたが侍は遂に氣が附かなかつたから是より趣味を感じ、遂に天晴れの掏摸となつたのぢやどうだ成功談にカブれたそこいらの雜誌で勇九郎君掏摸成功談でも書かないか。

一體德川百ケ條には途中にて小盜致候者は敲きとある、是れは掏摸に關する規定である、此小盜と云ふのは一兩以下と解釋がきまつてをるのぢや、今時の若手の連中の樣に英佛獨阿弗利加印度臺灣樺太の學說を引張り出して結局屁の如き結論に到着するとは雲泥萬里、近世語を以て云へば所謂不言實行だ、ナニ序に一視同仁は如何と混ぜ返すのか失敬な我輩を以て桂內閣のヘボ語を襲用するものと思ふ抔不都合ぢや、チト氣を附けなさい。其處でゆつくり調べて見ると右の規定の出來た享保四年の米價は、讃岐米が一石四十七匁八分中國米が三十九匁で舊屋外竊盜規則の出來た明治二十三年には六圓四十錢に六圓五十錢である、是に依ると金の價が大抵似たり寄たりで、屋外竊盜法を愚法だ抔と無暗なことを云ふものではない、其因つて來ること遠し豈に敢て佛法國の眞似損ひのみならんやだ、君等は米の直をも知らんで餘計な生意氣な口を聞くものぢやないよ、大分話が橫道へ這入つたが是から本文に立返つて述べんに、百ケ條には右の規定あるも官府より進んで檢擧することなく、偶々被害者

に目附かるも贓品の手にある樣なヘマはしないから、一兩以下とし此蔵き放しで濟したものだ所が右の大檢擧には大英斷で片端から捕らへ、重きは打首、輕きは流罪で三宅島や新島やさては烏も通はぬ八丈ヶ島へも遣られて追分節所ぢやないのだから其の掏摸界の恐慌と云つたら中々今度の樣な譯ではなく、又直參黨の領袖が監獄へ打ち込まれた處の騷ではなかつたのだ、併しいくら刑を重くしたつて犯罪が無くなる者でもなく、オツと是れは今時の新々派の判事殿には內密々、又檢擧とか取締嚴重とか云ふ者はさう永續する者でもないから遂に再び盛なるに至つたのぢや。

ナニ鼠小僧の掏摸談はどうぢやと、まあ待てそりや君達の云はん先に我輩は調べてをるが俗間に鼠小僧が傘の骨を勘定する振りをして侍の印籠を取つた抔と噴傳するが能く正史や舊判例等を調べて見るとドウモ鼠小僧には掏摸をやつたことは證據不十分ぢや、其餘りに有名な爲に何んでも賊の手段を是に附會したものらしい、丁度有名な事件はなんでもかでも大岡越前守の仕事の樣に云ふと同筆法だ、如何に泥坊でもそれ〴〵專門があつて無暗に他へ手を出すものぢやない、甲の學校には憲法を持つかと思へば、乙の講堂には民法を講義する樣なそこいらの教授先生とは少し譯が違うて。

併し一世の盜傑石川五右衞門の猛然として起るや、所在の群盜靡然として其膝下に伏し掏摸も亦た其裨將として闘いたに過ぎぬ、世には五右衞門を盜跖にあらず荊軻なり抔頻に提灯を持つが、それは

兎に角一代の豪ら物たるを失はぬ、銀次の様なタカが掏摸の親分とはてんで段が違ふ、それにしても世には有名な大悪人とか云はるゝものが時々出るが大法官とか明判官とかはサツパリ出ぬ、團ありて菊あり、梅ケ谷ありて常陸山あり、相對して始めて壯觀だがホンとにどうしたものぢやナ、流石は月給に拘束せらるゝオツトまた口が滑つた否頂戴なさる御役人様方は違つたものぢや。

イヤさう云ふ我輩はどうぢやと勘違も亦た甚だしい、我輩のは單に不平の慰藉の一部に過ぎぬ、行政法の法理として俸給は之を辭することを許さないから困るよハ、ア。

また〳〵話が外れたが、江戸時代の東海道中記には必ず雲助の次には護摩の灰の話が出、兩國廣小路や淺草觀音にはキツと巾着切りが出る、中には也有の俳句に感心した護摩の灰の如き風流談もあり、近松の吉野都女楠にも『いや〳〵巾着切りの大將剃刀の彌市と申す者』と名稱る處抔漸次文藝の題材とせられ、近來にも掏摸の盛なる證據には曾て中央新聞の何とか云ふ小説の主人公に掏摸あり、萬朝の懸賞小説にも二三回見たことがある。況んや青柳有美の掏摸公許論に至つては實に振つてる錦心繡腸の文士を煩はし更に我輩をして此談を爲すに至らしめたる掏摸の勢力偉なる哉だ、抑も亦此荒唐なる法螺物語を掲載する法律新聞記者の襟度に至つては實に欽すべきものぢやと玆に一寸御世辭を云つて置く我輩是でも中々愛嬌者だからね。

一、粒の麥地に落ちて死せざればナンカンと聖書臭きことを云ふ様ぢやが、此一掃せられ四分五裂となりたる掏摸界の回復を試みる一人の豪傑なからんやだと云ふのは前に述べた秀奴の事で此奴中々の曲者で入牢中勇九郎よりすつかり掏摸の呼吸を習ひ、天晴の腕前となつて出牢したのである、ホントに言はんことぢやないよ、犯人は只だ判決して監獄へぶち込む計りが能ぢやないよ今度でも、若し銀次が入監するとなるや司法官や司獄官達は先づ鼻毛や尻毛を抜かれぬ様に懐中物御用心の代りに鼻毛尻毛御用心の札でも掛けとき給へハテさて年寄は悪いことは言はないよ。

さて秀奴は愈〻大黒日から脱して見渡せば、堂々たる親分連は或は捕はれ或は離散して肩を並ぶるものなく勿論元老抔と云ふ自上の癤もない、時は徳川の秩序亂れて白晝切取强盗の行はるゝ頃と云ひ、近くは横濱開港で新開地のことである。懐の膨れた所謂成金黨が出入し萬里の波濤を遙々と金を抱へて來る赤髯先生あり、今や腕限り根限り働くべしと京濱間を横行して其勢を擅にした。時やは是れ維新の風雲漸く動き東洋正に多事ならんとし、山縣伊藤のへつぽこ足輕ヨ漸く騒ぎ出さんとした時代である。秀奴の活動やそも如何先づは一服とまあ云ふ所ぢやハハ、ア。

どうだ暑いか此頃は何をしとるのか、ナニ何もせずに寢轉んで居ると君達の様な若い者がそれでは困るではないか、ソコへ行くと流石は掏摸だ此七八九の三月が最も稼ぎ時だ人の遊ぶ時に働く中々感

心ぢやないかハハ、ア、暑中休暇で歸省するものや苦しい算段をして見榮に避暑するものや何やかで汽車の混雜は甚しく日中は暑いからとて可成夜汽車を選んで乘るそして、慾れて居眠る奴が多く衣類が薄くて懐工合が能く分る掏摸には持つて來いぢや、君達も歸省するならしつかり用心し給へ、ナニ目的物がないから大丈夫だとマアさうぢや、役人らしい顏をしながら金の無さゝうなは司法官の顏付だからソレと知つて手を出す馬鹿はあるまい、ナニ職掌に恐れてだと戯談ぢやないよ人間もそれ迄已惚れゝば世話はないさ。

さて前に述べた横濱の秀奴だが、此奴の活動せる際に一方にボタの一團が盛んになつて來た、ボタとは何かと云ふのか、此術語を知らないのか困るな、是はボタハタキと云つて袂の物を搜るのぢや、江戸政府倒れて職を失つて番屋の非人共市内の盛場に出沒し煙管の取り方から始めて懐中物に及び漸次上達して此一團を成したのである。今ではボタは掏摸の最初歩として又何れの親分にも直屬せざるモグリの連中のあるのは此系統を引いたのである、此方法とは云ひ乍ら又之のみを專門とせるものなきにしもあらずだ、卽ち目下懲役六年の服役中なるボタ清事志賀清藏一名須賀清吉と云ふ奴は前科九犯殘らずボタ計りである、是等は一寸珍しい、サウサナ博士になれぬでも登記法や戸籍法のみの大家があるやうなものぢや。

幕府瓦解と共に口あんぐり、兩國や淺草邊を迂路付く氣樂な勤番侍が無くなり、巾着切りの得意も減つたが、間もなく錦旗東下遷都となり近代語で云へば成官黨とでも謂ふべき成上りの官員共が肩で風を切つて歩く頃となり、得意も舊に變らず、東海道にも追々汽車が敷かれ職を失ひし護摩の灰共も茲に進化して長箱師となり、市中に鐵道馬車布かれて函師を生じ、活動の範圍を文明の進歩と共に擴張し、掏摸道勃興の氣運溜り來つたのであつた。併し此頃は今から見れば極めて幼稚な者で、長箱師でも髭を生やしたものは官員だからと云つて容易に手を觸れなかつたが、近來は中々どうして髭の有る者が田舍の金持議員か何かゞ多いから寧ろ御得意とする樣になつた、又ボウチヤ買と云つた帽子取りが新に行はれた、君達の樣な若い者は知るまいが今でも極稀れにアイヌの手代や何かゞ冠つて靴を提げてあるくを見たことがあるが、臘虎の帽子と云へば當時は大流行で中々ハイカラな者で特に實業家たるを表示せる唯一の帽子だつた、隨分値も出るし取るにも造作がなかつたから此方法が行はれた、今は殆ど是をやるものがない、ソレカラおかゝ買と云つて婦人の櫛簪を拔取ることが進歩した、始めは單に婦人の尻をつゝ突くとあれーとか何とか云つて腰に注意する機に頭の物を取る、謂はゞ出齒式だ近頃京都で此手で數ケ所に物を取つた馬鹿野郎が居つたが是れは最舊式で、此頃では尺五寸か二尺位の絹絲の一端に鉛の附いたる物を小指に挾み拇指で彈くと髮飾りが引からまり直に掏

摸の袂に飛込むといふ仕掛所謂鎖鎌の劍法を應用したものぢや、併し今は是れも流行らぬ、後の柳北一代の傑作と稱せられた柳橋新誌に

卷毛鬢上漫挿二黄金釵一可レ惜可レ惜早晩遇二拐兒一坤了醜瞼上レ泣那瞼蜂兒亦不二肯蠶一其態可レ見

とある、隨分口の悪いことを云つたものぢや、我輩と雖實に三舍を避けざるを得ない此文に依り以て當時其害の頻々たる知るに足るべしぢや、君等は表面に口頭辯論主義を主張し乍ら内實書面審理主義に重きを置くから一寸書證として扱いたのだドーだ腑に落ちたか。

それからダチを使ふこと、ダチとは何かと聞くのか一々五月蠅な、これは相棒を云ふのぢや友達と云ふ字の略だ、後で符號の事を話すからまあ默つて聞け、此相棒は初め三人組だが此頃は二人組で近來の鋭い奴は一人で三人の働をする奴がある、其頃は何と云うても未だノロカツタ。紐育に於ける最巧の掏摸と云つてもツール（道具と云ふ意味）とストール（物を集め入るゝ場所の意味）との二人を　し我國に於ける一人掛けの働きは到底彼等の夢想だも出來ない早業である、彼等をして一目之を見せしめば掏摸の日本の名空しからずと嘆稱し追つて留學生でもよこす樣になるだらう、他の事は兎も角も掏摸だけは一等國だからね。

又近來稀に見る所だが、掏摸が被害者に捉つたときには相棒がいきなり刑事巡査の樣な顏をしてや

りそこなつた奴の頰を二三度御見舞申し、サア警察へ來いと云ひ乍ら引張つて共に逃げる遣り方も、此時分には相棒が通り掛りの樣な工合にて飛出してやり損ひを捕へ財布や何やかを出させ、之を被害者に返しヤリ損じの奴は憐れッぽい事を云ふと、被害者は品物が返りさへすりやいゝのだから掏摸を許し捕へた奴に禮を云ひ乍ら中を開けて見ると何にもない、おのれ不埒な奴何れへ逃げたと追駈ける風をして相棒も共に逃げると云ふのが行はれた、恰も時の井上大藏大輔が財政問題の衝突を口にして野に下つたと同樣な遣方ぢや換骨脱體の妙玆に至つて極まると謂ふべし。以上は凡て初より相棒があつてのときで然らずして偶然掏摸同志が一緒になつて他の掏るのを見ても分配を請求することが出來ない、是は東西相一致したことで先年露西亞の聖彼得堡のエカテリンゴフ公園で捕まつたアレクセーフと云ふ掏摸の懐中せる彼等仲間の規約に（第三條會員中傍に立ちて同僚の掏取りたるを見たる者は決して分前を請求すべからず但し甲から掏取りて乙之を援護する時は平等に兩分にすべし）とあつた、流石は法律的で面白い、どうだ一つ訂正して同僚の昇給したるとき之に對し奢りを請求すべからず抔とやつたら君等は喜ぶだらう、ナニ但甲の昇級に付き乙之を周旋したるときは此限りあらずはどうだと君等相應な理窟をこねるな。

今や掏摸全盛の機運へ向へり郡雄所在に割據し山東の宋江、淮西の王、慶河北の田虎、河南の方臘

並び起るの概だ就中神田連雀町に於ける荒物屋の安、本所石原町に於ける魚屋の伊左、神田松永町に於ける伊藤吉五郎を始めとし根津の貞吉、大工の伊左等は其の最も雄なるものなのだ。此割據の時に際し鬱然一家をいたし嶄然として頭角を表はしたる者が清水の熊であるが是が卽ち銀次の前代だ。之と銀次との關係は新聞にある通り流石に熊の眼が高かつた、此熊の左右には宮本銀次郎、小西眞助野田伯惠等何れも一騎當千の强者共之が翼となり、隼の如く鷹の如き幾多の部下を從へ隱然斯界の覇を稱したのである。明治廿三年此晁蓋たる熊が牢死し呼保義宋江明銀次の躍いで起つや河南の方鵬たる荒安先づ死し河北の田虎、湯島吉之に代つて勢を振ひ各頭目之を補佐せしも、銀次の勢力隆々として是等の上に出で漸次其勢力範圍を擴張したのである。此時に當つて掏摸道の全盛其極に達し銀次の梁山泊には玉麒麟盧俊義にも比すべき大仙小林仙吉を始めとし、善謀善斷あらゆる樞機を握れる智多星吳用たる大清平野大吉あり、一棒嚮ふ所敵なき豹子頭林沖にも似たらん寺地定吉あり、母夜叉孫二娘たる豚花三好芳、母大蟲顧大嫂たる堀政、一丈青扈三娘たる谷本光等女軍あり、鋭なるもの敏なるもの儁なるもの精なるもの宿將精兵雨の如く猛將謀臣雲の如く官軍敢て一指を染むる能はず、來つて之を招安せんとし遠近其風を仰ぐ亦盛なりと謂ひつべしだ。いでや是より各頭目に付き詳細に述べんかだ。おいなんぼ暑いからとて居眠はしてはいかんよ、謹んで我輩の說く所を聞け。

洪信一度誤つて三清殿裏の伏魔殿を開き百八の魔王飛び去つて玆に永く永滸の禍をなしたるそれならで、當局一度策を失してより所謂百千虎狼潛九阡どころか全然濶歩し掏門の豪傑所在に割據し、各其雄を稱するに至つたのだ。銀次の事は新聞に細大となく書立てあるから詳細は云はなくても君等も知つて居るだらうから是位にして略して置かう。併し隨分トンチンカンのことや隔靴搔痒の記事もあるが目下檢擧中のことだからまあ餘り言ふまいが今度と云ふ今度は銀次の箔が剝げた隨分未練な男らしくない態度で評判程でもない奴ぢや。ナニそれでも役人下りの被告や代議士下りの連中よりまだまだ立派だと不相變君等の口は惡いな。我輩が愼まうとすると君等が側から壞すから困るよ。マア默つて聞給へ、何時だつたか室田そーら今巡視官か何かになつとる咎ぢやが彼が云つたことにマア東京中の親分では石定が一番で銀次抔は話しにならぬと確に名言だつた、ソリヤ昔から他の親分株と掏摸の親分とは一緒にならないが、石定と比較しては可哀相だよ。石定も先年死んだがあの朴訥の樣な顏をして居つても關東の遊俠界を支配してをつた處は中々確りものだつたよ鬼に角命知らずのアハレ者共を押へて行くのだから官制と任免權とでも部下を押へ切れない樣な長官とは譯が違ふ。況んや警察官は他廳の吏だから使ひにくい抔言つてあべこべに使はれる樣な殿上人とは大部違ふテ。

しかしこんな事を云ふのは老の愚癡で無理かも知れぬ、今ぢやそしらぬ顏をして濟しとるが古賀吉

抔は一時一日の寺錢五百圓を下らぬと稱せられたが總理大臣の八百圓でも大分段が違ふからな、ナニ日本橋の○○をしとると警視總監よりも收入が多かつた時代があつたと君達の樣なこれから出世しようと云う者がそんな惡口を云うてはいかんよ。

新聞で見ると銀次が村會議員か何かになる野心があつたとあるが、嘘か眞か知らんが彼れが逮捕の時には純紳士風をしてをつたことは事實だ。我輩多年の經驗に依るとどうも何でも親分株とも云はれる奴が髭でも生やし政治家とも交際しようとした奴は結局いけなくなるのは不思議な位だよ、殷鑑遠からず平氏にあり自ら武士たることを忘れて公卿の眞似をして終りを早めたと同じことだ、司法官でありながら行政官の眞似や實業家を夢みる樣な事は決してならぬキツと意見しておく。

其處へ行くと湯島の吉だ彼はどこまでも純然たる掏摸で立て通して居る當年取つて五十六歳斯界の元老だ。彼れは掏摸としては銀次より山緒正しく淸水熊等と雁行し今に至つて仕立派と頗頗して下らないので、此奴の部下では入監中の勇天勘天を始めとしシヤツポの金、書生の德作市狸の萬公等が腕ツこきだつた、以上の兩頭目と並稱せられたる都下三大頭目の一は鍋勝一名鼈甲勝だ是れは入監中で乾兒の小春が之に代つて指揮したが亦是入監し安田中村等が留守師團長と云ふ格だ。是等の頭目に次ぐ各頭領は穴藏の三公、跛の綱、熊公、田中の赤等で三頭目が御三家なら此奴等は國持大名とでも云

ふべきだ何れも幾多の乾兒を有し其乾兒にまた四五人宛陪臣ありだ、ソーラ我輩の掏摸大鑑に記載したる丈でも此通り隨分あるだらう一々云ふのも面倒だし、今や掏族大檢擧の最中だからマア略することにしよう、此多勢の奴は緣日や何かには一緒に集つて仕事するが平常最も多く横行する勢力區域を示したのが此郡雄割據の圖ぢや、主として電車を標準としたのだ、此の黑い線が電車線路だよまあ大體寫して見給へ全國分布圖は中々大部だから市中の分だけに爲給へ。（圖略）

以上は大體市中の分を述べたが、近在では田舍の祭禮等を廻るナカ師と云ふ奴には田舍榮バツタの榮仙チヤン大辰又田中の赤の乾分共だズーツと遠くでは栗橋の古河竹が常に八九名の乾兒をして絕えず働かしめつゝある、神奈川には小林に油屋德、横濱に埼玉初雨宮鳥兼等あり、何れも有名（？）だ、其他各地方でも隨分あるが京阪等を除いては何れも其營業範圍が汽車中だから長箱師の事から述べんに初めに我輩は長箱師は護摩の灰の進化だと云つたが、其中の古參なものは桶金で之に次いで油屋山下杯で、近時世を驚かした靜岡の大和田なども舊は京濱間を往來したものだ、横濱は一種の稼場と云ふのは上陸外國人が掏摸に遭つた經驗なく而かも長途の航海の上での上陸やれ嬉しやと夢中になつて物珍しくきよろ〳〵見物するを豪儀な獲物御座んなれと掏摸にねらはれるのだ、造作がなくて得物の多いのは是に限る日本人はどうも吝ち臭くていかんよ。君達もドツサリ大金を持つて歩かなきや掏

摸に悪く云はれるよ。

一昨年だつたか露國の女優マハリンスカイヤが良人のガアフキルド大尉と共に來朝したとき九百圓を掏取られ、『日本の風景は美しく演劇も面白く俳優も進歩せるが唯一つの憎むべきは掏摸なり、總てのものゝ日本の進歩は意外なるが掏摸の技術進歩は最も驚くべし恐らく最狡猾なるものならん』とベソをかいたが、氣の毒でもあるが蓋し亦至言と謂つべしだ、此の外人の被害の多いことが我警察をして遂に投込の陋習を深からしめ、掏摸をして威張らしめ、而かも表面に於ては外人をして掏摸の日本と恐れしめ、又一面には日本警察の敏腕に敬服せしめたる一大原因である。或は我輩の云ふことが支離滅裂何のことやら分らぬといふだらう、君等には一寸分るまい、ソレだからそんな職務に愚圖愚圖して掏摸になれぬのだチトしつかりして裏表から聞くさ。

それから街道筋では、江尻の嘉十熱田の林に按摩勝等で進んで靜岡名古屋とくると實に掏門街道筋の大本營だ、東西掏摸の輻湊して最も被害の多い處だ、重要なる物貨の集散して中京の繁華を成した如く掏摸も亦此大勢に洩れず、東京よりするもの大阪よりするもの丁度夜汽車の中途、外は丑滿三更の頃人は皆疲れて睡む眞最中虎視眈々たる掏兒の乘ずるに最も好都合だ、況んや警察車掌と結託せるに於てをやだ天下豈に是より便利なることあらんやだ、必要は便利を生ずるの原則を發揮して遺

憾なしぢや、ナニ警察と惡徒との結託はどこにあると叱々靜にせよそんな不埒な事が有てたまる者か人口四萬たらずの靜岡で二百餘の掏摸と十二人の頭領あり、是に附屬せる時計屋質屋古物商等あり、亦盛なりと謂つべし、靜岡繁華の原因夫れ掏摸に基づくにあらずやとは我輩の例の憎まれ口だ、不服なら誰でも來い負けるものか。

靜岡の大疑獄は天下を驚かしたが、まだ新聞にも出ぬ面白い話があるから、一寸話さうか數年前に或地方裁判所長が、會同の歸途例に依り靜岡邊で大事な〳〵金時計を掏られた、さあ大變と正直にも之を靜岡警察へ尋ね合し、此方は堂々たる所長何を措いても搜出すだらうと待つてをつた處が其來た返事はどうだ、御依頼の時計金何十圓御出しになれば搜し出さしむべく候年月日靜岡警察署長警視何の某と麗々しき公文書が來た、ドーだ驚いたらう天下どこの警察が腐敗したとて是程圖々敷い處があるか其處で仕方がないから泣々其金を工面して送ッたら時計が來た、慷慨や悲憤は通り越して寧ろ滑稽だ、而かも此一條の物語中に掏摸、警察、所長の如何なるものなるかゞ隱約の間に表れてをるから面白いではないか。

こゝで一寸掏摸の人身賣買と云ふ話を聞かさう、長箱師が新橋で睨んだ客を追掛けると云ふとき親分から金を借りて出掛ける之をツケサゲと云ふのぢや、ところが此目的とした旅客がどうも隙がなく

て仕事が出來ぬ、併し自分は名古屋で下車せねばならぬと云ふとき途中から乗込んだ他の掏摸に一定の代價で賣渡して仕舞ふと云ふのは、此客は確に物になるが、俺は此處で降りるから貴様に讓つてやる代りに幾らか寄越せと云つて賣買が成立する。處が當の本人たる客は何にも知らぬ天下太平ぢや。如何に古今東西の學說をひつくり返したつてこんな賣買はあるまい。どうだ當代新進若手の連中何とか理窟を附けないか。

ナニ掏摸取得希望權の賣買か、隨分苦しいなソーさな日露が滿韓交換を策したのも此轍を履んだのかも知れない。

扨亦名古屋となると其便利は云ふまでもなく、爰には淺草觀世音に比すべき大須觀音には電車は東京よりも早く敷かれてをるから掏摸活動の範圍も他に比して汎く好個の掏摸菌發生地だ。此地では越中竹チビ辰千太を始めとし、前科十五犯の淺野十四犯の林ばけつ魚減源多の金はげ金等百有餘名の錚錚たる連中あり、電車の車掌と結託する樣な手ぬるいことでなく、掏摸が切符切りを志願してる奴がある、丁度某縣で密航婦周旋の爲め警官を志願し月給抔は宛にせぬものがあると同樣だ、三宅雪嶺が學生竊盜事件の時學生が泥坊したのぢやなくて泥坊が學生だつたのだと言つたことがあるが、是等は此警句に適合じ而かも其內容の更に進んだものだ、又或縣下に落選候補の運動者が、我に三年の歲月

を借せ我は巡査を志願し、進んで警部となり、以て選擧に干涉し卿をして當選せしめんと誓つて巡査を志願した者があつた如き皆此亞流だ。世の中も段々深刻になつて行くよそこいらの人しつかり賴むぜ。

大阪に至つては流石は關西の本場だ。其起源關東よりも舊く名稱もチボと云ひ市內に働くものを地使ひ汽車や電車に働くを箱使ひと云ふ抔大分關東とは術語を異にしてるのみならず、方法も下駄の脫替や羽織外し抔は關東より進んでをる。それに刃物切物を使ふのが近くに堺があるからで例の指間の刃物を特に製する處がある、之れは關東派が及ばぬ處であるが關東派は寧ろ刃物を持つを卑しとし新宿熊の子分等が持つてをるのみぢやが、大阪のは凡てが持つてをると云つてもよい、それにモ一つの特色とも云ふべきはどうも執拗でいかん、關東派の奴は駄目と見ると白狀するが此地の奴はどんなに證據が十分でも、仲々白狀しない厄介な奴ぢや。

銀次の乾兒共の嘆願書に『掏摸の親分と稱するは仕立屋銀次計りにも無之大阪などには幾らもあり』云々とあつたが、此地の大親分と云ふのは前田を始めとし、湯幡に横田等だ之に附屬せる時計商のみ五十餘軒あると稱せらる、娼妓や下女でも掏摸と知つては寧ろ歡迎すると云はるゝ位ぢや、啻に掏摸のみならず罪惡の發達は東京を凌駕すること數等ぢや、獨力能く百萬の市街をなして輦轂の東京に匹

敵する大阪は罪惡に於ても亦然りと斷言するを憚らない。

京都にはネンネ政吉あり、神戸には大親分ガワラト岩吉あり、山陽線の巨魁としては廣島の友吉、馬關のバカ竹あり、岡山には金春の常、門司に兜子あり、實に多士濟々たりだ、更に滿韓の野にありては玉島の岡平に床安あり、帝國發展の威力掏摸界に及ぶ又昭代の餘德なるかなだ。

憲政二十年春王の六月掏摸王捕はる。有松警保局長閣下曰く『從來掏摸の檢擧を爲すに彼等如き巨魁の手を借りたること間々あれば、或は一時不便を感ずる場合無きにしもあらず』明治三十九年安樂警視總監閣下曰く『他の犯罪搜索の必要上掏摸檢擧に手加減を加ふるは從來久しき慣習をなし居りたり』と帝國警察權の名譽大なりと謂つべしだ。呑舟の魚をして細鱗を滅せしめんとする漁夫に對しては、法律は尙ほ蜘蛛の網の如しと云つたヘーゲルも啞然として二の句を續け得ないであらう。

抑も此不都合を馴致したる基は德川幕府の初めからだ、一體德川時代の目明し岡つ引なんて云ふものは不埒極る者で、謂はゞ權力を有する惡徒だから純粹な惡徒からも惡まれ能く折助部屋へ引張つて行かれ隨分ひどい目にあはされ、又誤つて入牢すると同監者から殆んど死に勝る酷遇を受けたものだ、此奴共が掏摸の處へ親分々々と言つて出入したこれが所謂おやじと子供との關係となつたのだ、被害者から金を出して子供に賴むとおやじの處へ行つて品物を出してくるが、其中に御辭掛りの品と

云ふのがある。是れは當路者の權門に關係ある品で奉行より命ずるものを云ふので、是は無償で出さねばならぬ、是が義理返しの始めぢや。明治になつて外國貴賓の被害の時刑事が帝國警察の面目に關するからと賴むと、ヨシそれならお前達の顏を立てゝやらうと云つて出して呉れる、我輩の知つてる甚だしい話があるが是れは拘留中の被告を諜者が連れ出して入浴せしめ蕎麥も食ひ夫から銀次の處へ行つたが銀次が傲然として面會を謝絕し玄關拂ひを喰つたこともある。此義理返しが投込となり、後小包で送る樣になつたのだ、被害者は品さへ還れば夫れで濟むが時によるとどうしても犯人を出さねばならぬことがあると、一番へつぽこな奴で病氣にでもなつてをる厄介者を身代りとして送る處が卽決裁判だ姓名は名無權兵衞明治六十八年十三月武藏國大阪で泥坊したかへ——相違ございません、直に裁判を言渡す重禁錮二ケ月監視六ケ月と來る勿論控訴などはしない、直に入監する病氣は醫師があつて癒る、仲間があれば技術を練磨する、滿期出獄となるや肩書も增し身も腕も役に立つ至極重寶便利に出來てる譯さ。

それから目と云ふ役もあれば、祕密な用も限りなくある。掏摸の跋扈は無理からぬソコいらの男爵博士に御相談申す『進化論より觀たる掏摸』などは著書になりませんかナ。

新律綱領の嚴罰、舊刑法に依つて緩和されたが彼等の豐年時だ、更に二十三年の屋外竊盜規則とき

ては萬歳だ、銀側懐中時計なんどゝくると必らず五圓以下を爭ふ、五圓以上の金錢でもあると其場で掏つても品物はダチに渡して手にないから未遂だと主張し屋外盗の慰典に預からうとする中々始末にいけない、ガイオクと云ふのが屋外の倒さ讀みで彼等の術語だ。固より前科抔は言はない住所氏名出鱈目を云つていつも初犯だ、近頃やつゝけた奴なども能く〳〵調べて見ると前科に處せられた僞名丈でも十二もあつて本人も何れが本名か殆ど記憶がない。ひどい奴になると名無權兵衞と申上げたは僞り實は大馬鹿三太郎でござると云つて判決を受け、次に捕まると大馬鹿三太郎は嘘で實は名無權兵衞でござると云ふ、勿論どれも籍は無し一體こんな奴に名前を問ふ必要なく彼等は寧ろ仇名が仲間に通用して立派な商號になつて居るのだから、本籍氏名抔は不必要なのかも知れぬ、全く手の附け様がない。ところが晴天の霹靂とも云ふべきは實に三十九年の大檢擧だ、此時は全都警察總掛りで大仕掛で中々今度の檢擧處でなく隨分素晴しい遣方だつたが、今度程目立たなかつたから忘れてをる連中もあらうからマア順序として其大體を話さう。

時は博覽會の頃と云餘りに彼等の跋扈せるとに依り、ソウ〳〵大目に見る譯にゆかず、愈々大檢擧と決し一月より其調査に依り數ケ月を費し、安樂總監大號令の下に一網打盡の計畫を立て一切掏摸の交通を禁じ、各署に掏摸專務を增加し、親分株の連中には巡査を張番さして之を監視し、掏摸と目さ

したる奴の家へは視察と云つて踏込ましめ、甚しきは一日數回に及びたることもあつた、そして少しにても疑ある者の家に紙入の二つもあらうものならこれを引上げ、近所の緣日に掏取つたが、中には錢が無かつた即ち五圓未滿と云ふことにし被害者を搜査するに不明なりと云ふことで因果を含めたこともあると噂された位だ。電車乘込の角袖を增すは勿論のこと要所〳〵の乘換場所へは見張りを出し、掏摸と知られた奴は目附つたが最後掏らうが掏るまいが片端より道路妨害罪に浮浪罪で打ち込んだものさ。世の中には隨分即決處分を攻擊するものが多いがこんな時や今度の樣な時は何とも云はぬから可笑いよ。攻擊とは自己の都合惡きことのみに用ゐる武器かも知れぬからな、其れから見ると例の掏摸關係の辯護士が掏摸にも人權ありとの論文を發表せんとする主義一貫の勇氣は多とすべしぢや、少くとも人權擁護の上に於て將た腐緣報恩の爲めにな。

さて此大檢擧は非常の意氣込だつたが、そんなことで屈する銀次ではない、彼は既に其株を大仙に讓つて、自らは大御所として全權を振ひ、意氣猶ほ豪なり、細作に依り早くも其檢擧を知り、而かも其檢擧たるや、東京豫審判事から警視廳に交渉して遣らしたのだと觀測した。是れは丁度其頃一人の掏摸が捕つて、主任の豫審判事此判事今は地方の控訴に居るが、此判事に對し例の拜み屋主義に依り、掏摸の內幕を殘らず申上ぐるから免訴しくれと嘆願したことがある、斯んなことを聞傳へて銀次が右

様な考へを起したものらしい。

『仕事をして居たにしても居ないにしても、今度の様な突然な事をすると、後には困りやしないかと思ます。隨分之まで警視廳や警察、又は刑事の旦那方に出來る丈けならばまだしも、無理なお顏も立つて居るのです。もう〳〵今度の様な沸湯を飲まされる様な事をされたんぢや、お顏を立てたくても第一子分の奴等が云ふ事を聞入れませんぢや、此末は皆さん方の方で、緊乎物を取られぬ様にお氣を附なさらないと、一旦盗まれた品が滅多に出ませんから、何でも御用心が大事ですよアツハ、、』と此傍若無人の大言を吐いたのは誰あらう當時の銀次で、之を謹んで紙上に掲載し奉つたのが堂々たる某々新聞だ、新聞記者となるには掏摸をも訪問し、其氣焰をも拜聽しなければならぬ、大阪の劇評記者が役者の仕着せを貰つて喜んで着てをるのと、一對かも知れぬ記者たる亦難いかなだ、此記事を出す奴も奴だが、之を讀んで默つて居る市民も市民だ、如何に掏摸程智慧がない者共ばかりにせよ、腑甲斐ない連中だ、而かも亦た此放言を敢て爲さしめ、而かも是れ以上一歩をも進め得なかつた警察も警察だ、流石は名譽ある日本の警察だよ。

併し兎に角彼等にとつては打擊に相違ない、そこで一部隊は宇都宮方面に向つた、今度の檢擧にも然りだが、該地方の掏摸や博徒のことは大に研究に値する。又一部隊は街道筋へ向ひ靜岡の大本營へ

落込んだ横濱は、一時掏摸の刑を輕くして彼等の輻湊地となつたが、其後大に刑を重くし、東京よりも嚴だつたから此時は横濱へ集らなかつた。處で面白いのは他地方へ行つた掏摸は、其地方の奴と衝突し、土地の奴は營業を妨害されると云ふ譯で互に密告の仕合をしたこともある。こんな時こそ拔根枯枝の手腕で双方共一掃せねばならぬのを、ソコは天下泰平な次第さ大したこともなかつた。其の他在京者連は大清の集會所に於て大會議を開いた末、先づ顏を知られたものは汽車中に派遣し、博覽會見物の人士を途中に擁して仕事をし、在京者は田舍者となり、女房とも見るべき女を携へ、之をダチとすることに決し、親分と目指されたものは、表面丈正業に從事することゝなつた。銀次の妾等が動坂町に煙草雜貨商となり、鍋勝の小間物屋、穴藏屋のおでん屋、藪梅の青物商、其他夫々天麩羅屋緣日商人と世間を裝つた。是れで先づ〳〵報告の材料が出來たと云ふ譯で、十二月四日より翌年十一月三日迄の掏摸檢擧數千八百五十四人、尤も中には乞食を捕へて掏摸と云つた處もあるが、愈々送りとなつたのは二百七十八名で、淺草署の四十五名を最多とし、下谷四十一名之れに踵ぎ小松川府中の各一は最も少い方である、前年に比し被害件數二十五件減少と表に記され、是にて一段落、マア〳〵御苦勞と一先づ幕が下りた後は元の杢阿彌、つまりは義理返しのなくなつたのと、搜査の面倒と云ふ獲物があつた許りで、翌年には下谷署丈でも被害屆が百六十六件と云ふ增方で、顧問辯護士の處には正

式裁判の申立書印刷しあり、一回警察へ顔を出した丈けで、報酬は十圓以上と稱せられたのも此頃からのこと、銀次の門構堂々として板塀の光りは依然たり掏門亦盛なりカネ。

續いて昨年十月新刑法實施は一時期を劃した、今日でも能く博徒や掏摸抔が、是迄はやりましたが、新刑法になつてからは改心しましたと云ふ奴が多い、處が刑期擴張の爲め掏摸が十年、十五年とやられるから彼等も驚いた、屋外盜時代とは雲泥萬里是りや溜らぬと思ふ處へ、警察犯處罰令で拘留が永くなる、こいつ一思案せざるべからずと、茲に再び大會議を開き、腕の巧拙に係らず顔の知られて居ない奴を稼がせ、其他の者は晝間や夜の十一時頃は、掏摸係が見張つてをるから、寧ろ係りの巡査が交代する時刻や、夜の十一時過の油斷を覗て働かうと決したが、併し大勢掏摸に利あらず靜岡の大本營潰え、東京の牙營又壞るゝに至つた。今後の掏摸の奮闘やソも如何、我輩は其殄滅を希ふや切なりだ。

まあ〳〵掏摸の沿革さつと此の如し。隨分喋舌り疲れた、やれ〳〵御苦勞なこつたつた、ナニ掏摸に成るにはどうして成り、又どうして仕込むと聞くのか、ドーも君も中々拔からぬ切込が烈しいね、君達がそんなことを聞て何にするのか、眞逆掏摸になる積りでもあるまい、また其積りだつた處が君等の樣に生半可に理窟を云たり、青表紙をひねくつたものは今から掏摸にならうたつて駄目だヨ、よし給へ。なにそんな積りではないが參考の爲めに聞きたいと、どうも仕方がない、モー少し喋舌らうその代り嫌になつたら何時でも中途で止すからいゝか。

世には新聞記者に仕込むと云ッたつて、子供の時から三面記事の稽古をさせるものも、法律家にすると云つても、乳房片手に六法全書を玩具にする者もないが、掏摸と來ては子供の時から實際其氣のある奴を仕立上げるのぢや。茲で君等によく〳〵しつかりして貰はねばならぬ。いゝかな君等がどうかかうか今日の地位になるには、元來が本意ではない子供の時には親や兄貴に叱らるゝが恐しさ、大きくなつても試驗や何かに怖くて仕方なし成つたのだらう、ナニ隱しても駄目だよ、屹度夫れに違ひないさ所が掏摸は右云ふ如く、子供の時から掏摸に趣味を持つ奴を仕込むのぢやから、既に其立脚點に於て勝つてをる、そして直に實地に就き命懸けにやるのだから、月給の手前午前九時出勤、午後四時退廳の連中とはテンで譯が違ふ、今更掏摸機關の整頓は警察機關の整頓を凌駕すること數等なり抔言つて騒いだつて始まらんよ、オイしつかり賴むぜ。

よく世間では倫敦のピツクポケツトとなるには、親分のポケツトに鈴の附いて居るのを鳴らない樣にして取る練習を遣るとか、イヤ日本では大きな護謨人形に鈴が下つて居るのを、音せねやうに學習するとか、種々なことを云ふ者があるが、是等は凡て掏摸程利口でない連中の言ふことぢや、ソんな

降らないことで掏摸が上達すると思ふか、夫りや勿論多少の呼吸は練習するが、凡て初めから實地教練だよ、こんなことを云ふ連中は游泳の上手になる迄、水に入らずに疊の上で習ふと云ふ手合さ、今時の若い者は存外分つた樣で分らない者だな。

さうさな、角力が田舍廻りをして弟子を見附けて來る樣に、掏摸にも教育總監や教育本部長も在るヨ、こんな職名は必ずしも陸海軍の專屬に限らんからナ、陸海軍のこんな職は、遣場所のなき連中の投込場所だが、掏摸は中々そんなことではない有力な機關さ。先づ是等の職務の奴が淺草公園邊に行つて見る、そこは流石は東京だ、親の家を飛び出した惡少年や、棒先切つて主人の宅へ歸れぬ小僧やなんかの手合が、毎日五人や七人はぼんやりぶらついて居る、其中から利口さうな奴を連れて、汁粉や蕎麥なんど食はせ喜ばせ、それから方々引張り廻し、ボタ抔を遣らせて見る、見込がつくと段々呼吸を敎へ込む、自分等の掏るのを見せて上達させる、マア云はゞ加藤福島の樣な豐臣小飼の大名と云ふ格だ、大仙が子守をしとる時、子供を抱きながら婦人の懐中物を掏つた抔は、流石は後來若親分と立てられて、銀次の跡を繼ぐ丈けあつて違つたものだつたよ、それから親が其日稼の貧乏人だと、少し金をやつて子供を連れて行つて仕込む奴もある、貧民窟の子弟と來るとまた素養があるからな、現に先年我輩が鮫ケ橋へ見に行つたことがある、其時に一軒の家で頭の禿げかゝつた親爺が、子供に對

し隣の淸坊は今朝から靴を二足取つて來たに、お前は未だ何も取つて來ないぢやないかと怒鳴つて居つたのを聞て實に驚いたヨ、夫れから尙ほ段々內情を聞いて見ると中々ひどい、こんな立派な家庭敎育で育つた連中だから仲々末賴母しい次第さ。

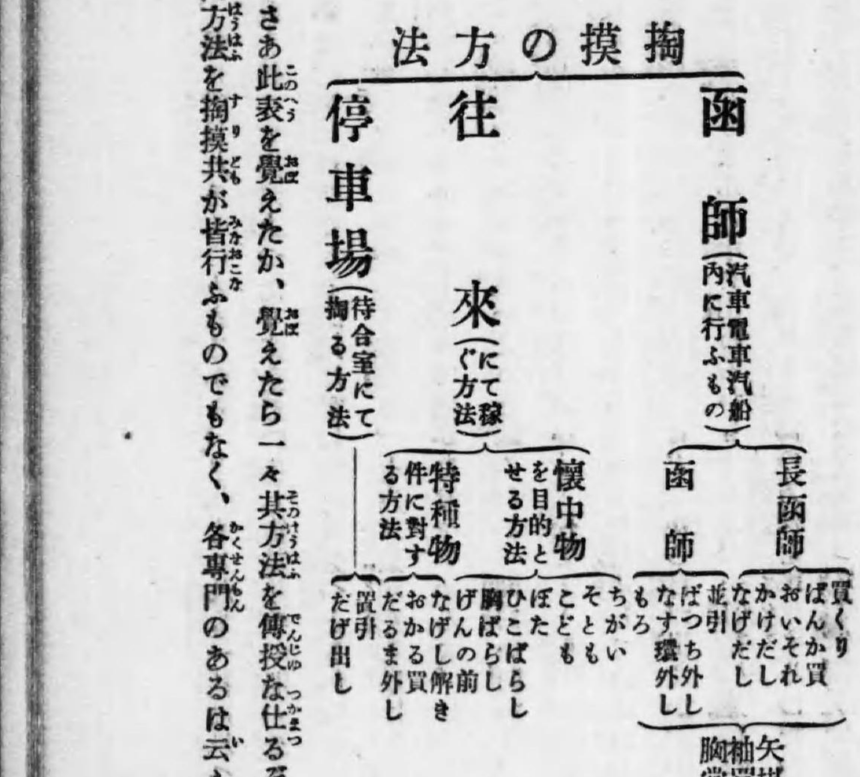
以上の二種はまあ正科生とも云ふべきものだ、中には小泥坊抔が入監中同監の掏摸から其手段方法を聞き、其利益多きを羨み、出獄後其中間に這入る、云はゞ選科生とも云ふ譯さ、それから墮落者、特には博徒連が失敗の結果轉ろげ込むもの、之を聽講生とでも云ふべき格だ、又初めより獨立して、ボタから漸々仕上げて一人前となる奴卽ち校外生さ、此中から近世の大天才勇九郎が出たことは始めに述べた通りさ、出仕生徒から博士も出るからさう捨てたものでは無いさ。

かういふ工合に練習を積み、其間に五六回多ければ十四五回も入監し、而かも何れも初犯として處分を受けなけりや一廉の掏摸には成れぬよ、一年半法廷の後に居眠つて居て年俸八百圓にあり附くよりは中々六ケ敷よ。

斯くて一人前になると『ヤリの牛蒡拔』と云ひ、其最も上達して長箱師となる、是が彼等の出世で、マア幕の內から敕任と云ふ資格さ。かうなると親分の處へ行つても待遇が違ふ、彼等出世の目的さ。こゝに一寸注意すべきは、掏摸となるには俗に巾着切りの樣だと云はるゝ如く、人一倍の敏捷なる

ことを必要とするが、更に大膽と云ふことが要件なることを忘れてはならぬ、大膽と機敏と此二つは如何なる事業の成功にも必要だが、但し此二つとも要らないのは何處かそこいらの御役人樣丈さ。特に掏摸には必要だと云ふのは、失敗しても狼狽せないこと、、事前に直往邁進の勇氣を要すと云ふことである、燕返しと稱し、突倒して取る蠻的手段や、パンカ買ひと云つて、仕掛のある鞄を鞄の上から冠せる遣方抔は事前の勇氣を要し、懐へ突込んだ手を被害者に握られた儘、預けて置き、下車の際振切つて出づる如きは失敗に處する大膽だ。此後の場合の實例は幾らでもある新宿の熊の子分で、常に青山線や新宿線で稼ぐ頗る大膽な奴が居る、或時婦人の帶の間の銀貨入を掏つたが、被害者もさるもの、直に其手より奪ひ取り、而かも其取つた手を叩きつけたにも拘はらず、此奴平氣で釣革にぶら下つてをつた。又或時築地兩國線で小僧の懐から引出さうとしたのを、小僧が氣が附いて之を取り戻したが、掏摸奴怒つて小僧の頭を二つ三つ毆つたこともある、天晴な奴ぢやが惜哉其姓名を失した、中には隨分馬鹿な奴がゐるよ、我輩が先年淺草の小島町から電車に乘たとき、車中に帽子も冠らずいんばねす許り着た奴がゐるから變だと思つて、顏を見ると三十九年の大檢擧の際たゝきつけた奴だつた。彼も我輩の顏を覺えてをつたと見えて、周章てゝ運轉手臺から飛下りて逃げて行つたよ。こんな奴は大した出世も出來ない駄目な奴だよ。ハ、アまあ掏摸立身の途此の如し。次には掏摸の方法如何

と來るだらうから、君等にせがまれぬ先に話さう、其前に大體を圖解してそれから追々説明して聞かさう、サア此圖解をしつかり覺えたり。



さあ此表を覺えたか、覺えたら一々其方法を傳授な仕るぞ、其前に一寸注意しとくが、茲に列擧した方法を掏摸共が皆行ふものでもなく、各專門のあるは云ふ迄もない又此方法中にも常に行はるゝ者

と、稀に行はれるものとあるから、どれもこれも一緒に思つてはいかん。何千何百條朝野法曹大家の頭腦を搾つて出來上つた、完全無缺但し實施後半年間と云ふ樣な法典でも、日常用ゐらるゝ法條は極僅かで、中には必要なる原則は言はずとも分つとるからとて、略して他の大部分は滅多に生ずることなき出來事を暇にあかして豫想し、七六ケ敷理窟を着ける樣に、是から說明する方法も稀有の場合をも網羅したのだから、其積りで聞かなきやいかんよ。

ナニ我輩を一本やり込めようと云ふのか、面白い聞かう、フン〳〵右の表の上には寄席荒しがない、抑も寄席荒しの專門は八百兼と云ひ……待て〳〵皆迄云はなくても我輩百も二百も承知だよ、新聞の讀賣なんか止せ、一體新聞なんかをみんな信用してはいかん、悉く新聞を信ぜば新聞なきに如かずだ、特に此頃の掏摸檢擧の記事と來てはどこから種が出るか、一目見りやすぐ分るよ、又筆法により如何なる關係からこんな筆を用ゐるかも分るよ、一體寄席荒しの方法たるや、席中に行ふもの、出入口の混雜に乘じて行ふもの、何れも函師の方法を準用するのだから、此一事にのみ態々項目を設くる必要なしとして略したのだ。嚴格に云はゞ電車の昇降の際行ふ方法は、函師か、往來の方法かと云へば之を判別するに苦しむ樣なものだ、極く大體の表丈掲げたのだ、詳しいことは一々各項に就き說明するからまあ默つて聞くさ。

偶には新聞などで掏摸の方法を記載することもあるが、掏摸にも各專門のあることを忘れ、或一部の掏摸の云ふことのみを聞いて書くものだから、全般に涉らぬことも多い、又は古手刑事の自慢話などの當推量のことを記するのだから、割合に正鵠を得ないのだ、我輩の是から說かんとする所は、全般に涉りて遺漏なしぢやから能く氣を附けて聞け。

此表を見て第一に氣の附くのは、方法の語尾に買ひと云ふ語が多いことだらう、此買ふと云ふことは掏取ることの隱語だ、商賣に行つて何々を買つて來た抔と能く彼等の云ふ所ぢや、買ふと云ふことは普通にも能く使ふ語で、喧嘩を買つたとか貴樣の心を買つてやるとか云うて種々に用ゐらるゝのぢや、民法以外に賣買なしなんて思ふ手合に限つて、娼妓は人身賣買にあらずなんどゝ力むのぢや、般若湯は酒にあらずだからな。

閑話休題長口上は講釋の妨げとあつて、これより本文に取掛らんに、先づ往來に於ける方法より始めよう、是は前にも一寸云つた通り、關西には地使ひと云ふ總稱もあるが、關東には別々の名稱のみで總括した語がない。此方面は寧ろ穴藏屋三公、跛の綱なんどの管轄で、辰巳稼ぎと云つて深川方面の奴が得意とする所だ、此第一のチガヒと云ふのは、通常二人又は三人にて行ふので、普通は此方法だ、先づ一人が前からどんと突當り、後から一人が拔き取り、三人のときなら他の一人に品物を渡す

と云ふ遣方だ、此突當られた被害者がはつとした機に、劍道で所謂隙が出來て懷中若くは帶と體との間がゆるむに乘じて掏るのだから、造作の無い遣方だ、或赤筋代理先生が身體に對する暴行を用ゐ取つたのだから、强盜を以て論ずべきものだと、躍氣になつたことがあつたのは此譯を知らぬからだ、閣下は當代の豪傑でござると云つて嬉しがらせ、氣の弛んだに乘じ自己の要求を持出すのも此流だ、始めより堂々と議論して取入る後藤蠻爵流に至つては、更にチガヒの眞髓を得たものだ、當世成功の祕訣是に限る君等の樣な若い者は折角稽古するがいゝよ。

次のソトモと云ふのはチガヒと似た方法で、人によりては之を同一だと云ふものもあるが少し違ふ、と云ふのは一人が後から足を踏附けて、何をしやがるんだと振返る途端に前から拔き取る方法だ、此内にも種々の方法があり、女なら後から尻を撫でるか、つゝ突くのであり、又車でも牽いて居る者に對しては、一人が車輪の傍であ痛い〳〵と云つて、轢かれた眞似をして膝をつくと、是れは氣の毒とあやまつてゐる間に他の一人が掏るのもある、甲武線や新宿線では女の掏摸が突き當り、又は足を踏んで謝罪にかこつけて庇髪を胸にすり附けて掏る奴もある、目尻を下げてナニそんなにあやまるに及びませぬ、ナンかんと云つてる被害者の顏は實に見物だよ、ハツハア、、、、。

それから一人でやるのにもまだいろ〳〵ある、燕返しと云ふのは、強く突當つて倒れるや否や、拔

取るので最も蠻的な方法で、今はやるものがないが、一人で被害者の後から突當り、振向くと同時に被害者の前に廻り、手早く掏るのが近來敏捷な奴のやる仕事ぢや、彼等の中では隨分新陳代謝が烈しいよ、リストのレーゼブックがいつ迄も役に立つ社會とは違ふ。右のソトモとは元來外懷を云ふ符號から來たので、腰差の煙草入等をも掏るのを包含するのぢや。次のこどもと云ふのは、內懷や內かくしを掏るから生じた名稱で、ゲンの前とは婦人の帶の間を云ふので、之を呢ふからの名稱で一名舞ひとも云ふ、此兩者共方法は前と大した變りはない。ボタとは始めから屢述べた通り極初步で、胴卷を切つて掏るのをヒコバラシ、腹掛の井を切るのが胸バラシ、何れも初步の奴の遣方で、別に委しく說明する程の必要もない。

第二款とも云ふべき特殊物件に對する方法。これは東京の方よりも大阪方がよつ程進んどる、第一のナゲシ解キと云ふのは帶を取る方法で、說明よりも實地遣つて見せる方がいゝ、おいS子を呼んで來い、おいS子今掏摸の練習をするから、默つてお前は被害者になるのだ、ナニ可笑いことがあるものか、少し我慢をしろ、マアN君、君は前から突當つて帶締を解くのだ、不味いなマアそれでよしよし、それからK君後から帶の結目を解くのぢや、アア、いかんな、そらかうして解くのぢや、いゝか勿論NK兩君同時にやらなきやいかんよ、S子モー少しだ我慢しろ、K君はそれから帶の垂れを拔く

のぢや、さう〳〵善哉々々、それからかうするのぢやまづ解けた丈をかうくる〳〵巻くのぢや、そして前へ廻はり衝當りざまに直ぐ巻くのぢや、中々骨が折れるだらう、こんなことが木偶なら知らず、被害者が知らずに居らうとは思ふまいが、ソコは掏摸のあざやかな手ぎわぢや、勿論掏摸はインバネスを着て其下で働くのだ、被害者は帶揚や下締の爲めに氣が着かないよ、ソリや人通の少い所では出來ぬが、雜沓中では造作ないよ、特にぼんやり芝居看板抔を見てゐる道頓堀邊ではナニ造作がない、ドーだ掏摸と君等は隨分段が違ふだらう、此の如き方法は想像すべからざる事なるを以て、被告の自白は信用するに足らず、ナンカンとやられては溜らないよ。

オカル買ひと云ふのは、前既に述べた通り、ダルマ外しと云ふのもまあ實地やつて見せなきや分らないから、まあ一服してやらう、おいS子帶を見て何をぼんやりしとるのだ、驚いたと見えるなハハア、、、、。

此ダルマと云ふのは羽織の事で、之を外すからダルマ外しと云ふのだ、時に之を略して單にダルマとも云ふ、此方法は大阪から流行つて來たので、色々の方法がある、先づ其單純なるものから遣つて見せればかうだ、N君君が被害者になるのだ、暑くても我慢して羽織を出して着な、紹ぢやいかんよ裏の附いた冬のやつぢや、ソレでよし、そしてマアぼんやり懐手をして其額を見とるのぢや、額は

芝居又は觀世物の看板と假定する譯さ、オイ〳〵さう側を見てはいかんよ、虛心平氣、換言すれば呆然とせなけりやいかん、ソコで我輩が掏摸の一人として、前へ出て看板を見る振りをしてから背を向けて立つのぢや、ソコでK君が人に押された工合に揉まれてくる、Nソーラ君も體をかはさうとするだらう、玆がつけ目ぢや、我輩は後手で素早く紐を解いてかう體をすりよせ、袖口の片隅を引く、K君が後から他の片方を引く、ソーラ造作がないだらうハ、ア。

ところが、さう懐手をしてぼんやりする奴は、此頃少なくなつたから、當り前に手を出しとるのを掏るには、後から蟲なり毛なりを背中に入るのだ、入れられた者は痒いから袖から手を背中へやつて搔く暇に、右の如く片袖をも脫がせる何の造作もない、此方法はずつと以前流行つた下駄取りが進化したので、初歩の奴がぼんやり立つてる被害者の足の後から蟲を這はせ、又はちよいとつツつくと痒いものだから、他の片足を揚げて其足を搔く隙に、下駄と古下駄と取替へたことから考へついた者だ、斯道の專門家は芝のボロ國、下谷の獅子勝等が有名だ。一體着物の裏はまづいものを附けながら、羽織の裏に限つて良い裏地や、滑るものを附くるのは何の爲めぢや、脫ぐに便利と云ふよりは、藝者や何かに脫いで貰つて、嬉しがる爲めだらう、そんな不心得な連中共だからまた掏摸に取られるにも便利なので、脫がさるゝの喜と取られる悲とは其揆を一にす天罰覿面、己れに

出で丶己れに歸るだ、以後は氣を附けて羽織の裏は木綿のごり〳〵したものを附けろ、是で往來でやる方法は大略すんだ。次には停車場に於ける方法を說明しよう、こゝに停車場と云つても、敢て停車場に限つた譯でもなく、銀行にも行はるゝのだが、主として停車場だから玆に表題を揭げたのだ。君等が何かと云ふとすぐ揚足を取らうとするから、豫じめ註釋をしておくのだ、又此方法は店先でも準用さるゝことがあるが、是は寧ろ萬引の部類に屬するのだから玆には其說明を省くのぢや。

停車場で發車を待合せの客が、鞄なり包なりを横に置き腰を掛けて居るのを見るとダチ一名吸取がトバヲイと云ふ役をする、トバヲイとは先づ其客に向つて煙草の火を貸してくれとか、何とか云つて並んで腰を掛けて話を仕掛ける、其腰掛け方に注意がいる、先づ品物と客との間に腰をかけることが出來れば結構だが、それが出來なければ掛ける場所が無い眞似して、品物の前へ掛ける、品物が大きくつて是も出來ぬときは品物が左にあれば客の右、右なれば左へ腰を下す、人生尻の置き方に苦心する恐らくは掏摸を措いて他にあるまい、名優は毎日の舞臺の踏所が一定し、武術の達人は道場の踏方が一定して動かない。抑も亦た夏日午後の壇上、頰突き肘突きの一定せる人ありやなしやだ。

サアかうなるとしめたものだ、先づ煙草入を取り出し悠々として話し出す、或は煙草を態と濕らして火を點けるのに手間を取り、マツチを借りるとかなんとかして時間を費し氣を外らし、機熟すと見

るや他一人は遂に其物品を持去る、話の面白さに釣り込まれ、發車時間となつて氣がつく、サア大變と騷いだ所が後の祭り、容物が小さければとうの昔し便所などへ打捨られ、中は空つぽとなりて當の相手は何處かで舌を吐いてる始末、今更掏摸係に訴ても追付かない次第、此方法を稱して置引と云ふのだ。此連中が置引師として獨立し、近來銀行構内で預金者の待合せるのに準用さるゝに至つたのだが、其未だ大に盛なるに至らないのは、銀行では脇に置くもの少く、又出入も停車場程客はなく、場所も狹くて人目も多く出入口も小さいからである、追ては人民控所などにも行はるゝに至るかも知れないよ、其鋭い奴になると一人で之を行ひ、相棒を要せない奴がある、タゲダシと云ふのぢや、露骨な奴になると客の袂の中へ吸殼なり、マツチの燃えてるのを投込み、客が周章てゝ消さんと躍ぐ間に風呂敷包を取つたのもある。會社の内幕を發き惡評を立てゝ新聞に攻擊させ裏へ廻つて自己の持株を賣飛ばして儲ける重役連も此呼吸を習つたものだ、其處いらにソンナ腕のある連中は御座るかな。先年日本銀行内で淺草銀行の三萬圓を取つた奴は、更に此手段の進んだもので、寧ろ詐欺師の部類に入るべきものだ、流石の掏摸でも未だ此方法に工夫を凝らさないと見える。（日本銀行の事件は其後十年目に發覺したが玄人で無かつた）

サア是れからが愈最高等の函師の說明となるのだ、函師一に函乘又は函使ひと云ふ函師は更に之

を細別して、狭義の函師と長函師との二種となしと講義體に云ふものゝ本は一つもの、我國では汽車が始めだから、護摩の灰の進化して函師となつて稼いだものが、其後川蒸汽から鐵道馬車、電車となつて活動の範圍を擴張したから、之と區別する爲めに、是等を函と云ひ汽車などに稼ぐのを長函と云ふに過ぎないのだ。此兩者如此き關係に立つのだから敢て內容に差あるのではなく、此兩者を一人にて兼ぬることも易々たりだが、其大體の區別と云はゞ、汽車に乘る奴は客が荷物を多く持てると、比較的懷暖きと、夜間と疲勞とに乘ずる機會の存すると、客と懇意になり易く、車掌を除きては警吏に顏を知らるゝの虞なく、特に掏摸係の乘込めることなきと、被害者の覺知したる頃には、遠く何十哩他縣の管轄內に有りて、發覺の恐れなきことの特徵がある、之に對し函の方にては距離の短きと賃錢を要すること少きと、昇降の場所多きと、混雜の電車の多きと、客の胴卷等に金錢を祕することと少なく懷中に在ること多きと、逃走に便なると、車掌と結託するに諸種の便宜あることの點に於て長函に勝るのだ、木下上島槍の長短何れが可なるかと云ふ樣な譯さ。（昨年に至つて始めて移動警察が設けられた）

能く世間では人を見たら泥坊と思へ、と云ふ格言のあるのを忘れ、ドウも油斷していかないが、掏摸は之に反し人を見たらどれを見ても御得意樣計りと見てをるのだ、堂々たる天下の宰相でも掏摸の目からは財布臺や時計掛にしか見えないのだ、ナニ美人から見たら何と見えると云ふのか、これ〳〵

君等はそんな不都合なことを云つてはいかんよ。

長函師中には偶には魔睡藥を用ゐるものがあり、函師には絕對に之を用ゐるものはないのが、兩者の區別さるべき一法だが、此藥を用ゐることも近來餘り流行らない、或は菓子に入れたり、ナイフに塗つたり、又は煎餅抔に入れて焦の有無に依り自分の食すると客に食せしむるとの區別をするとか、又は奇偶に依り判別するとか、いろんなことを云ふものがあるが、資本と勞力の餘計にかゝるのと、客も用心して食はず停車場には物賣りも大勢居るから、之から買ふと云ふ樣になつたのだから、漸次行はれなくなつたのぢや、一車內全部魔睡せしめたなどの大袈裟な話もあるが、餘り信用を措けない話だ、マア考へても見ろ、一車內全部が皆掏摸の物を食ふ筈もなく、又煙草の煙りが何にか仕込んであつたとすれば、先づ第一掏摸自身が睡つて仕舞はねばならぬからな。掏摸一般の原則特に函師共通の原則とも云ふべきは第一、客の油斷に乘ずること第二、客を油斷せしむること第三、客の注意力を他に轉ぜしむること此三大原則が必要で、之を原理とし臨機應變眼は電光と閃き、手は石火と働くのぢや、相棒を使ふときも始めより約束のあるのは別だが、途中で一緒になつた未見の掏摸同志でも蛇の途は蛇で、互に舉動が分るから、一瞥の相圖で直に爲さんとする方法が企圖されるのだ、第一條甲は何月何日何時何所に於て掏摸を爲さんことを乙に申込み、乙は其申込みに對し承諾の意志表示を爲

したり、なんかんと云ふ様な公正證書に依り共犯が出來るものではないよ、共謀の證據十分ならずなどは眞平御免だよ。

第一の客の油斷に乘ずることは油斷をするものが害を被るのは云ふ迄もないこと、風景や看板に見とれること、話に夢中になること、美人を眺めること抔は殊に禁物だ前回屢述べた通りだ、子供を負へるもの荷物を持てるもの、懷中や、帶を覗ふことは素人でも出來る、電車の下りしなに片手に切符を持ち片手は戸につかまるものや、汽車に入り乍ら、荷物を棚へ上げるものを襲ふ抔は最も樂で、片手にぶらさがればいゝ釣革に兩手でぶらさがる連中に至つては到底度すべからずだ。

第二の客を油斷せしむること　是れが函師の最も苦心慘憺たる所だ、往來とは異り客と相並ぶこと長時間だから、警戒されない樣に昔しから色々に工夫したものだ、フロックの紳士ともなれば紋付羽織の旦那ともなり、田舍者ともなれば商人ともならねばならぬ、平坊書生德の紳士風、八百幸の商人、仁三の魚屋又は職人、湯島吉乾兒の學生風抔は中々うまいものだ、特に磯公ときては相場師ともなれば番頭ともなり、官吏ごされ會社員ごされ、何んでも化ける曲者だ、紳士風をする奴は女房とも見るべき女を連れるのがこれは五六年來のやり方で、念の入つた奴は子供をも抱かせる、又は子供許りを連れて子供に稼がせる奴もある、是等はどうも客が油斷し易い、又學生風も中々の成功で、制服制帽

で澄しこむ、角帽は近來女たらしが用ゐるが、掏摸は多く徽章附の中學程度位の學校の服裝をする、帽子もかういふ風に種々に利用せられては若し靈あらば泣いてるだらうと、とんだ後生氣も出て來る譯さ。

更に近來の新手と云ふのは、除隊服を着て歸鄕兵とかまへ込む、之には客も瞞されるよ、日露戰後の陸軍當局が僅か二百萬圓許りの經費を惜み、除隊の際服を剝いで素裸若くは襤衣許りではうり出すものだから、機を見るに敏な商人共は、兵營附近に聯隊號から腕筋迄夫々のものを一組三圓內外で賣出して、所謂除隊服と云へる一種の制服にもあらず、私服にもあらざるヘンテコなものが出來たのが掏摸の附け目、是迄容易に手に入らなかつた兵服がおほびらに買へるものだから、遂に此方法に出でたのだ、陸軍當局掏摸をして跋扈せしむだ、鉈釣りの髯武者連どうだ一言もあるまい。

それから車中に入るなり、客の側へ並んで反對の方を見たり、態と居眠りをして油斷せしむるのもある、或る旅行雜誌の挿繪に、掏摸が左手を鞄につきて居眠りを裝ひ右の手を鞄の中から卽ち鞄の橫の開く仕掛になつてをる所から出して客の煙草入を取る處を畫いてあつたが、煙草入を取る位ならこんな鞄やこんな苦心はいらないよ、是れは臺を使ふことから考へついたか、聞いたかした繪だらうが、實際を知らない迂なやり方だ、掏摸だつて新聞雜誌を讀んでをるから馬鹿なことを書くと笑はれ

るよ。

油斷せしむる風采態度は此通りだ、が物品に依り油斷せしめ、且つ行ふに便利なのは例のインバネスだ、近時文明の難有さには、夏にも着る樣になつたから持つて來いだ、陳腐な方法としてはマクヲ切ると云つて、新聞やはんけちを膝一杯に擴げ、又は可成扁平い風呂敷包を置くことだ、是れは世人の知る通り掏摸のシンボルだ。

前に云つた廂髪を押し附けるのも新手だが、是は女に限る藝當だから近來是に似た新手が出來た、ソは帽子を押しつけるのだ、と云ふのは此頃の電車では往復切符の復の分丈け、帽子の內部の革の間へ挾み込んで置くのはお互にすることぢや、それを掏摸の奴め考へやがつて、帽子のその切符を出す振をして、客の胸等に當てゝ片手を其下から出して掏るのだ、これはネショ吉又は痳小便の吉と云ふ奴が上手だ、此奴は前科七犯一犯毎に新手を案出す謂はゞ荒岩の全盛時代の樣だ、今度の法抔も確かに實用新案の値はあるよ。

此ネショ吉のことは、近頃の新聞にも出て居らぬから一寸序に說明するが、こんな十把一束と云ふと何んだか第三流の掏摸の樣だが、素性は仲々正(?)しいもので、今度銀次の一連として捕つた元金杉の西洋料理屋の谷本光と云ふ女豪が居るだらう、君等は外の奴の名前は忘れても女の名前丈は覺え

てるだらう、乃ちネショ吉は此女の夫で、川久保吉之助、谷本吉五郎、小谷吉之助、小西吉五郎、川久保吉五郎なんど色んな名前を持つてをるので、此光と云ふのは銀次の先代淸水熊の兄分として之を凌ぐ勢のあつた根津の豐吉、前に沿革の時云つておいたらう、此豐の娘でネショ吉は第一の乾分として光の夫となつたのだが、豐が悶死したとき其跡目を繼いだのが、仕立屋派の勢力に壓せられて遂に銀次の乾分となつたのだ、銀次の伯父分に當ることなれば客將を以て任じ若親分、大仙の保護者とも云ふべき格で、常に目玉の金等と共に京濱間を稼ぎ横濱にも一家を構へ居り、銀次は此光の母、卽ち豐吉の妻たる谷本いち、一名小西いちと云ふ婆さんを入谷に住はして、不自由な目を見せないのだ。かう段々調べて見ると彼の腕が勝れてるのも分るが、併し近來は大分腕に年を取らしたよ、何でも修養が大事だ、試驗さへ通過すりや後は本なんどはどうでもいゝ、なんどの不了簡を起しては如何に出身が良うても駄目だ、氣を附けなきやいかんよ。

さて第三の原則として客の注意力を他に轉ぜしむる事、是れが仲々必要な呼吸で前に云つた置引の型である、別に深く說明するにも及ぶまいが、此事は掏摸に限らず君等も大に心得ねばならぬことだ、議會との衝突極度に至りしとき、突如外征の師を起したる如き、また豐公が國內の武力を鷄林に嚮けし如き皆此亞流だ。

一代の拗者トルストイ空嘯いて曰く、幾世紀後の人類は十九世紀の人類を評して云はん、彼等は單に地球上の一地より、他の一地に至らんことの速かならんことを勉めし奇妙なる人類なりしと、此爺情ない哉、露人だからこんな分らないことを云ふのだ我輩をして幾萬年後に生れて現世を評せしめば、十九世紀頃の人類は掏摸に活動の場所を供給せんが爲めに、電車や汽車を延長せしめたる有德の人類なりと云はんのみだ、どうだ爺さん驚いたらう、東方掏摸國の論客は觀察が中々奇警だよ、モウ餘命幾何も無からうから息のある內、ちと我輩の處へ習ひに來たらどうだ。

ところがどうも世には此有德ならざる君子もありけりで、昨年の春頃我輩の知つとる或郡長樣が上京したことがあるが、此先生電車に乘つて內務省へ出る度に、掏摸に遭つて必いくらか取らるゝので、是は溜らぬ電車賃が大變高價につくからとて、遂に出入共腕車を用ゐることにしたよ。之と同じく馬車に乘つて飛んで行く手合も、電車賃の高くなるを恐れる吝ちな連中共だ、チト我輩の樣に電車賃を惜まずに車中の默想と云つたとて居睡ではないよ、將た又民情視察をする樣に言附けて置く。

一體函師特に長函師が、彼等社會に最も重んぜらるゝと云ふのは、種々な原因も多いが、其技術の巧妙なることを必要とすると、一は其獲物の多いからである。彼の靜岡事件で天下を驚かした三萬圓は云はずもがな、同幸吉が興津で二千圓を稼いだのを最とし、近來知られたる大物丈でも、黑久神戶

の政の沼津に於ける千二百八十圓、榮吉福吉の御殿場での四千二百圓、小島政と榮次の七條に於ける二千三百八十圓、岡平の朝鮮でやつた千四十圓など、隨分素晴らしい稼高で、而かも何れも現ナマだから溜らないよ、是を普通の竊盜と比較すると話しにならない、現金で百圓以上と來ると大物で、千圓以上と云つたらマア絕無と云つても差支へない、近年では大阪博覽會の一萬圓の金塊、熊澤鑑司の三萬圓、日本銀行の三萬圓なんどが異數として驚嘆せらるゝに過ぎない、蘭燈ほのぐらき邊、現ナマ二萬圓、只だ使君と曹とのみなんかんテナ話は、敕任一級二級なんど仰せらるゝ、高級の閣下方に申上げても分からない所で御座る。

さて愈函師が身裝を整へ出掛けるとなると、前に云つた樣につけさげで出掛ける奴もあれば白を塗る奴もある、此白を塗るとは堂々たる紳士風で、一等汽車で押通して仕事をすることを云ふのだ、御光の友次が此道のえらもので、新橋から馬關迄も通すことさへあるので、其覗ふのは時計と紙入とで、必ず外づれたことは無いと云はるゝ程である。併し世の中の進步は恐しいもので、掏摸とお天氣師と、邯鄲師とを折衷した樣な遣方で、時計特に金側時計のみを狙ふ竊盜で、兒玉準太郎と云ふ傑物がある、此奴の事は例の男三郎事件で、ヘンなことが問題となつた歌代何某が能く知つてをつて隨分面白い話もあるが、此處では範圍外だから其內追つて話すことにしようが、總體時計は取り易いもの

で、一寸頭を捻ぢれば造作なく素人でも僅かの練習で出來るもので、取られたが最後番號なんどは直に打替へ、針を入れ替へ器械と側とも仕替ふるに何んでもないので、時計の番號等は能く記憶したつて何にもならないよ、マア判例の年月日を覺えてる樣なものだな。

前の表にある買クリと云ふのは長函でも初歩の遣方で、棚にある包や袋や鞄なんどを自分の用意して行つた古新聞等詰めたのと掏替ふるので、ポン引なども遣る手でつまらない方法だが、佛法の刑法大家、忽にして獨法を振り舞はすよりも勝れて居るよ。

バンカ買とは、はんか卽ち鞄の逆讀だが、此手は十二三年前から行はるゝので、大きな空な鞄で底に仕掛がある、卽ち縱に口が開いて、內部に鉤があつて下りる樣に出來てるので、之をマア重さうに提げて車中に入り、客の手荷物の上からすぱりと掩被せて仕舞ひ、一寸押すと鉤が出て釣り下がる樣になるので、平氣な顏をして下車して行くのだ、勿論其鞄にはチヤンと立派な名刺も何もかも提げてあるので、群集の中をおほびらに提げて行くのだ、流石は唯取株式會社專務取締役仁野物取君の御荷物は立派だなんて感嘆する樣な譯合さ。

かうはいふものゝ、大膽は愈〻掩ひ被せてからのことで、掩ふ迄は苦心が中々だよ。それだから初めの內は、網棚の上へ鞄を上げる樣な眞似をして、被せる位のところから段々上達するので、こんな

仕掛を要せずに單に客の隙を窺ひ、鞄等を提げ出すのをかけだしと云ふ、是は主として衣類を目的とすることが多い、それから夜行汽車で隙を狙ひ、窓から客の鞄などを投出すのをナゲダシと云ひ、何れともあまり利口でない遣り方だ。

オイソレと云ふのは刃物の名で、鍛鐵製の鋭利な切物で、之を持つて鞄なり包なりの橫腹を破つて中味を取出すので、インバネスを幕にして、鞄の口を開けて中の物品を掏替へるか、又は切破るのを矢掛と云ひ、着物の上から胴卷を切つて、中の物品を取出すを矢使と云ふ、靜岡事件の三萬圓は此手だ、今井田幸太郎は實に斯道の大家で同類さへ舌を卷く程の名人で、其甚しいのとなると、數名共謀の上狙つた客と同時に乘込み、客の前後左右を包圍して腰を掛けるので、この重圍に陷いてはもう駄目で、被害者だらうが他の客だらうが氣附く奴があれば、短銃や短刀をそれとなく見せ付けるので、中には仕事の後に短銃を指し附け、警察などへ知らせば火を放けるから、なぜ〻強盜其儘な奴も居る。今度銀次や仙吉の處から短銃二十餘挺、短刀幾振が出たのは皆が皆これに使つたのでもあるまいが、マア思ひ半ばに過ぎんやだ、君等もこんな場合に出くはしたらどうする、手向ふ譯にも行かず、サリとて命ばかりは御助けと云ふ譯にも行くまい、マア其儘にするより仕方あるまい、情ない連中だな。

袖買と云ふのは袖で働くので、インバネス新聞抔で幕を切り、客が右に居れば右手で新聞等を讀む風を裝ひ、左手を右の袖口から出して仕事する、ナニ分らないと仕様がないな、左手を懐して右の袖口から出すのよ、そらかうだ分らないか、そら或は左の手を肋骨邊に押當て、右の手を客の懐へ入るゝのもある、是は函ばかりでなく勸工場邊でも客と並んで立ち、懐手をする樣にして兩手を片方の袖口から出して掏るのもある、新免二刀流兩手とも働くのぢや。

福田行誠曾て乞食を拜して、おゝ有難い哉よくぞ泥坊にならなかつたと曰ッた。我輩も亦た盜を見て、よくぞ富豪の駙馬權門の奴とならなかつたと喜ばんとするのだ、人生成功の祕訣働かずして甘いことをするに在りで、盜と駙馬均しく此要訣に合す、只だ其自己の人格を沒了せざる點に於て盜を勝れりとするのだ、而かも其等の徒の唯一の武器とする所は、巧言令色のみだが、我輩は寧ろ天才の敏に加ふるに技術の練を以てする、掏摸に於て其貴きを知るのだ、盜の理想とする物品よりも現金、即ち一國の選良たる代議士間に於て、現ナマと仰せらるゝそれだ、其之を得るに他の盜の如き手數と時とを要せずして其額の多く、被害者に覺知せらるゝ機少きは掏摸の多とする所で、其實に理想とする處は、客の懐中物を掏り、尙ほ能く其內容のみを盜み得るにある、是こそ彼等の理想の極致だ、所謂中拔なるもの、是に於てか生ず、恐らく駙馬の徒の理想とする所も亦た是に外ならざるべし、何とか

云ふ女學校長は女蕩らしの學生を評して、節操の掏摸と云つたが鮒馬の彼等は又、是等の掏摸をも兼ぬるのだ、豈に一代の人豪にあらずやだ。

中拔一に腕當と云ふ、是れは天下一品、外國掏摸の夢想だにも及ばざる早業で、穴藏屋の乾分小春の獨得の技だ、東コート抔を着てるものゝ前に立ち、一寸車外の廣告を見る振りをして、指先が一分でも觸るゝや否や、既にコートは開かれ洋服の釦なんどは造作もなく外れる、かくして內懐のものを掏るパツチ外しと云ひ、其掏つた上更に釦などを元の如くかけ置くことも出來、又懐中の蟇口を掏り、其中の金丈取つて蟇口を舊の如くなし置くことも出來るのが中拔だ、現に七八年前に萬世橋附近の車中で此手にかゝつた被害者が、刑事の注意あるにも拘はらず、掏られません蟇口は此通りと云ひ開けて見ろと云はれ、始めて中のみを見て入神の技に驚き、塞つた蟇口を見て開いた口の塞らなかつたことがある、此小春のことに付ては仲間の者も始めは信ぜず、懸賞で以てやらしめたことの逸話もある位掏摸道の珍だ。

支那人は絕對に掏摸能力のないことは始めに述べた通りだが、之を防ぐ方法を考へたことは流石に好錢國民丈けある、乃ち留學生は時計を必ず二個以上持つことにきめた、勿論女に取らるゝときの準備もあるが、掏摸に對する用意もあるのだ、それから所謂大國民の襟度ありと稱せられた寸の延びた

洋服を着るときにも、ポケツトに入れて置く墓口には、紐にナス環をつけ底に食込ましして置く、掏摸も始めからさうと知つとれば紐を切るとか何んとか注意をするが、こんな巧はありと知らぬから、墓口計りと思ひ、ヒョイと引出すとどつこい來ないので間が延び、ドヂを踏むことがある、近來どこかの帶屋で、時計の掏られぬ金具を考へ出して賣捌いたものがあつたが、ソンなことで困る樣な掏摸も居ないから、之れも賣れなくなつた、近來の學問や教育の樣に末の形式許りに重きを置き、精神に重きを置かない遣方は何をやつても駄目だよ。

それから都人士、寧ろ非田舍者と云ふ方が適當かも知れぬが、是等の者が能く田舍者と馬鹿にしてかゝるが、財布の紐で頸からかけて懐へ入れておくのを掏るのが割合に六ケ敷いよ、是は前に云つた袖買の方法で、重に左手にて働くのだ、懐中時計も渡來の始めは其の名の如く、頸から紐にかけて內懐へ入れたものが多かつたから、一寸取りにくかつたが、此頃は猫も杓子もサア掏つてくれと云はぬ許りに、帶に挿む樣になつて帶間時計とでも改稱せなければいけぬ樣になつたから、サア占めたものだ、徐々と帶の間から引出し、時計の環を一寸捻ると容易に外れる、是をナス環戻しと云ふのだ、素人でも出來るので其捻るとき、他に響かない樣にするのが掏摸の呼吸で、山陽線で三人の客同志が話合の中、一人が時計を掏られたと騒ぎ出したら、他の二人も氣が附いたら三人共取られ居つたと云

ふこともあるが、こんな場合に使ふ相棒をスキと云ふのだ、紐育抔では此相棒をストールと云ひ、主働者をゾールと云ふことは前に述た處だが、此兩名が足を踏んだとか侮辱をしたとか何とか云つて、互に大激論を始め乘客は之に氣を取られて總立ちになつた隙を覗ひ取るのだが、隨分のろい遣方だよ、此の如く時計を取るとき、鎖や何かの附屬品をも共に切つて取るのがモロと云ひ、車掌臺に立つて乘る客の懐中を掏り、飛降りて次いで進行し來る電車に飛乘つて隱れるを並引と云つて函師の初歩だが、一級上つて參事官に飛び乘るのは最高等の方法で、固より同日の論ではない。

我輩の此物語を始めたのは、靜岡の檢擧が稍片付き、東京檢擧の始まつたときだつたが、段々話して行く中に關西の大檢擧となり、京阪神より姫路岡山、さては北陸迄に及んだのは實に大に賀すべきことで、話すのにも大に張合があるよ。是等の檢擧は正に其功績大なるべし、關西の大檢擧も定めて效果あるべし。赤坂署の檢擧の時新聞は報じて曰く、東京に掏摸は皆無となれり、川開の時掏られしものゝ二人あるのみ、銀行に被害二件ありしも掏摸にあらずと、云ふかと思へば墨痕いな活字のいんきの乾かぬ內に、下駄屋は時計掏摸の名人にて搜索の結果、時計五十餘個を發見したりと報ずソレかと思へば又新聞に依りては、尙ほ千五百の掏摸ありなんかんと三年前の記事を再勤せしむる者もある、裁判所でも記者の仰せらるゝ掏摸でもあるまいが、人の懐中か袂を搜る奴が仲々やつてくるよ、從づ

て其記事も出る、賞めたり取消したり新聞も隨分忙しいよ、關西に檢擧あれば直に此檢擧は從來現金の輸送をなし居たる銀行業者に少からざる安心を與へたりと云ふと報じ、又は尙幾日を經過する間には、關西地方の掏摸は殆んど根絶すべく、殘るは只だ御寺參りの婆さん達の財布を覗ふ樣な雜兵のみにして、旅行者の安全亦昔日の比に非ざるべし、と東西負けず劣らずに書いてるよ、曠古の大戰に通信機關の限りを盡し乍ら、金州丸の將校は一人も殘らず萬歲を唱へて割腹したと書いた新聞記者閣下の御腕前は違つたものだよ。

新聞記事の正確は實に此の如しと雖、當局者の見る所果して如何やだ、固より各府縣に於ける活動は近來の見物だが、當局は單に其手柄を賞する丈では我輩は決して承知は出來ない、更に當局者樣の大活動を望むのだ、此各地の大檢擧は正に掏摸の根絶なるべし、而かも彼等の最高等たる箱師、營業所たる汽車内に於て果して一指を加へたるやを問はんと欲するのだ、固より彼等の親分株と稱するものゝ、公然門戸を張らしむるの不都合なるは論なし、而かも是等の狩り立てのみにては、其目的を達し得る者ではない、其親分株と稱するものも、當局との默契の甚だ進まざるや密に市井に潛んだ者だ、況んや其親分共に於ては多くは其居所を不明にしたものだ、祝祭等の群集の前日には各警察署にては、掏摸と目せらるゝ者を悉く檢束したが、彼等は之を知つて前日から木賃宿をあちらこちらと泊り歩いたものだ、故に眞に掏摸を根絶せんとせば其居所を襲ふよりは、寧ろ其營業の場所を警戒するを以て第一とするのだ、然るに方今の檢擧は果して是が首尾を顚倒するの傾向なきや否やだ、固より市中にありては掏摸係を各所に配置し、電車にも乘込ましむるも、未だ以て汽車中に何等の設備あるを聞かない、遞信當局者は鐵道警察の設置論を立てゝ立消えとなつたが、荷物の被害は掏摸の害よりも遙かに少ないのに、此議を立る是亦本末を顚倒したものだ、區々たる列車ボーイや、客車專務車掌等は果して何んするものぞやだ、四面嘲笑の中に葬られし文官服帶劍制の末路に拘らず、自ら劍を提げたさに、鐵道員のみに制服帶劍の議を押通した蠻爵閣下は、果して車中の警察に重きを置いたのでもあるまい、各地大檢擧の列車に對する影響の、如何に戰慄すべきものなるやは新聞未だ記せず、世未だ多くを語らざれども、今や恐るべき掏族大移動の時期なりだ、宜敷耳をほじくつて我輩の說く所を聞け。

ハ、ア我輩がえらい劍幕にて論じ出したものだから、變な顏をして聞いてるよハハ、ア。

さて斯樣に方々に狩り立てらるゝから、掏族は大擧して何れも顏の知れない土地へ行くことゝし、東西互に入れ替るのだから其途に當つたものは溜らない、蒙古の鐵騎五十萬、歐亞の野を突破するや過ぐる處靑草なしと云ふ樣な勢で、甚だしきときは一車内全體掏摸の乘込んでることがある、此のときはソラ例の二人並び四人相向ひの腰掛に三人共腰を掛け、窓に近い一隅に一人のみの座席を空けて

有るときは氣を附けなきやいかん、ソの席へ入らうものなら、丁寧に他の三人が請じて坐らせる坐つたら溜らない、孤軍重圍の内へ飛込んだのだ、只さへ近來は荒くなつた掏摸共は、狩立に窮鼠猫を嚙むの勢だから、客が起きとろが寐とろが構はないで、前回に述べた様な包圍攻擊に遭ふのだ、寐とら う者なら狸や否やを試むる爲めに、手に觸れ足に接し、或は煙草の火や燒蠟を當てる、甚だしきときは電氣を觸れしむ、カウなつては客は絶對に抵抗力を失つて爲すが儘になる、列車ボーイや車掌などは何の役にも立たず、彼等は寧ろ可成之を避け、停車場の巡査だつて保護が及ばないと斷る始末、所謂藪をつッ突いて蛇を出した當局、果して此妄狀を坐視するに忍び得るか、賢明なる警保局長健在なりや、抑も亦た警察の威信の爲めに議會に辯難を辭せざる一木次官、一度も盲判を御押し遊ばさない內務大臣オイどうして呉れる。（遲蒔ながら移動警察は出來た）

此頃チョイ〳〵怪しからぬ噂を耳にする、ドウも尾佐竹は餘程掏摸をやつたに違ひないなんと、飛んでもないことをいふ奴もあるさうな、コンナ連中は釋迦が托鉢に來たときに、明巢覗ひぢやないかと疑ふ手合だ、中には又或はキット掏摸を二三人も使つてるに相違ないと云ふものもあるさうだ、コレは丁度先年圓城寺が豫算の缺點を見附けて鋭く突き込んだときに、大藏の當局者が驚いて、圓城寺といふ男は少くとも十人以上の人を使つて調べさしたのだと云つたが、其實圓城寺一人の頭から出た

ことだつたのと同じことだ、或ひは又どうも刑事巡査を親類に持てるのだと、サモ穿つた様なことを云ふものもある、親類に持つ位なら綠雨の言草ぢやないが、岩崎の伯父さんを身內にするよ、ハツハアこんないろんなことを云ふよりは、仲間の惡戲者共が先達て相談した様に、尾佐竹を引擔いで行つて、掏摸に賣つて儲けてやらうぢやないかと云つた方がまだ〳〵振るつてるよ。ハアハア、コ、で掏摸の所へ賣ると云ふ話が出た序に贓物の處分のことを一寸話さう、前回で掏摸の方法が一通り濟んだから、順序として其獲物をどうするかは是非話さなくてはならぬが、今は贓物を手懸りとして關西から中京迄の大檢擧があるのだから、マア餘り詳しいことは拔きにしてザツトした所だけ述べよう。

先づ掏摸の第一の理想とする現金を掏つたときは、之れを親分の處に持ち込んで、十分の三を差出すのを不文法とするが、これは親分から日當を貰つて、長箱へ出掛る連中の外は、マア殆んど適用がないと云つてもいゝ。長箱連でも正直に出す奴は少ない、親分の目からはまだ餘計に掏つたなと思つても、あまりやかましく追究はせない嚴格に云ふときは、遂にみんな出さない様になるからだ、是れは能くドの社會でもあることで、或地方の稅務屬が署長の前へ出ては、ポケツトにこんな金が入つて居りましたと云つて、一部分丈け出して大部分は猫婆にするのも、是れと同じ遣り方だ、掏摸も中々ずるいから、仲間とやつたときでも直接手を下した奴は、大部分を誤摩化して之れ丈けしかなかつた

とて、僅ばかりを分配せんとて勘付かれ、大喧嘩が持上ることもあり、甚だしきはピストルを振り廻はすことさへある、コノ上前を刎ねることをズドンと云ふのだ、ところが世には上には上があるもので、掏摸が人を掏つたと見ると、跡をつけ行き人氣の無い所へ行つて、チョイと呼びかけニヤリと笑ひながら、親方甘くやりましたねと云ふと、默つて幾何らか呉れる、上野邊の朦朧車夫でこれを職業にしてる奴さへある。

長箱師で親分から旅費を借りて出るときも此法に依るのだが、云はゞ舊商法の冒險貸借の樣なもので、靜岡事件の幸吉等が熱田の大親分林から、旅費として三十圓を借りて行き、一週間經たぬ中に三十圓の外、利子だと云つて四百圓を返して來た如きは隨分ボロイ仕事だ、當代ハイカラの某紳士が、ヒド工面して千六百圓を有名な相場師に用立てゝ、今日は一萬圓になるか、明日は十萬圓になるかと喜んで待つた甲斐もなく、スツカリ空になつたのに腰を拔かさん許りに失望した奇談は、右の鵜を眞似た鴉で掏摸の親分とハイカラとは固より段が違ふよ。

現金ではドウモ正面通り行はれぬことが多いが、ナシ、卽ち物品ときては正確に行はるゝので、乾兒共が掏つた物を持込むと、親分は之を買ふことになるのだ、ソシテ故買者へ廻すのだから、親分とは故買者の一種に過ぎない樣だが、其テンピキと稱する上前を刎ねる點に於て親分である。從つて隨

分儲かるが、乾分が引張られた時には正式裁判の保證金や、辯護士の謝禮やら差入物や、舊法時代では監視引受け等も皆爲て有るので、是等の諸費用も算入せられあるは、豫め乾兒共も承知して居るので、或筋への附屆、車掌や驛夫への渡りも亦然りで、凡ての不文法が確立してをる、五年も十年もコキ遣つて身代を作りながら、チツトモ構はないお店の旦那なんぞは、宜しく掏摸に對して愧死すべしである、況んや最下級で何年もほつて置きながら……叱々これ〳〵又餘計なことを云つていかん。

かうは云ふものゝ乾分共の方から云はせると、折角骨折つて稼ぎながら大部分は親分連の所得となり、仲間の分配やら列車々掌への附屆け、扨は見附からんとしたとき車掌の鞄の內へ投込んだときの禮や何かで自分の所得は少なく、ソレデ自分は何回も處刑を受けなければならぬ、コンナ割に合はないことは無いと喞つが、實際餘程の顏の賣れた奴でなければ中々樂にはならぬ、先達ても面白い奴が捕まつたよ、是迄はやつたがドウモ食へないから、近來は堅氣になつたと云つたが一部は確に眞理だよ、ソコデ少し腕が出來顏が賣れると、自ら故買者を拵へ直接に處分する、カウなると占めたもので中親分となるのだ、川上が壯士芝居の旗を擧げたとき、座員で少し名が出ると直に分離し、何々團なんてものが幾つも出來たが、今日では何れもドコカへ消えてしまひ、サモないとみんな困つてるのを見ると、矢張り此連中も掏摸程利口でないと見える。

さて親分が乾兒から買取つたものをドウするかと云ふと、ソコが所謂機關が設備してるのだ、或新聞にコンミッション、マーヂャントだと云つたのは未だ眞相を得た言でない、マヅ衣類やなんかだと賍品變造係とも云ふべきものがあつて、染替仕立替をなして質屋の看板ある仲間へ廻す、其質屋へ行く使などもあつて、殆んど株の樣に成つてをる、柳原にあつた近藤と云ふのは、掏摸の物ではないが一般の盜賍たる衣類を仕立替へることや、引解にするに付ては獨得で、古着仲間に名を知られたる明治年間に於ける一大問屋であつたが、玆では問題外だから略すとしよう。

ソレから貴金屬時計や、指環となると銻屋時計屋等あり、金時計なら普通二十圓から三十圓位、銀時計なら三圓から五圓位で買つて直に鑄潰し打直し、番號も打替へ器械の入替へなど實に敏速なものだよ、先年有栖川家へ忍び入つた泥坊は、邸内で悠々時計や何かを鎔解して金分を見た奴があつたが、掏摸でも未だ自分で此技倆を持つてるものが無い。

斯くして出來上つた品物は、公然と店鋪を張り、又は露店其他で市中へ出るのである、時計の番號の打替へられたのは能く注意すると、其痕跡が分るが前の番號は何號であつたかは分らぬ、これに就いて一寸面白い話がある、先年某司法官今は關西の要地に居るが、此男が時計を掏られたから熟慮の末、賍物時計屋と目指されたる家の名を刑事に聞いて、毎日々々根氣能く何十軒となく廻はり、時計

を買ふ振りをして一々見て歩いたが、遂に稍似た時計を見付け出し、たうとう自分の物を押付けて仕舞つたことがある、此時計は今持つてるかどうか知らぬが、今度の大檢擧に對しては今昔の感を聞きたいものだよ。

又は關東關西互に賍物の交換をすることもある、此時では顔のある奴が欽差大臣で互に送迎やら儀式やらがある、勿論電話での話もある、或は滿韓迄も品物を出すこともある中々手廣いことだ。

此故買者の手へ渡らぬ先に、所謂義理返しや新聞の所謂『掏摸に對して恐惶謹言』が行はるゝのだ、乃ち親分の方では故買者へ賣る代りに被害者に賣る譯だから、手數もいらず、刑事も儲かる至極便利な方法だが、手遲れすると器械の入れ替つて居ることが少なくない、自分の取られたものを自分で買はねばならぬのは、明治聖代の難有さで、民法第百九十三條なんどはチヤントかうなるのを見透したので、刑法施行法第六十一條抔は時勢に添はない愚法だ、サテ賍物は斯樣な順序を經るのだが、街道筋の樂園と云はるゝ熱田では、賍物の儘持つて行けば遊ばして呉れる妓樓が二軒もある、何んでも必要に應じて便利は生ずるものだが、掏摸の檢擧があつたから我輩が此物語をなすものと思ふと大に間違だよ、況や此物語があつたら檢擧があつたなどは猶ほ〳〵間違だと、玆で一寸閣下方に對して敬意を表して置く。

どうしてかう云ふ工合に、凡ての機關が完備するかと云ふのは、大分六ケしい問題だが、是れは永の年月漸々に出來たので、其中でも自分の妾や下女などにやらせるのが最も確かで安心だ、銀次と國、仙吉と勝、綱と金抔は云ふ迄もなく才子佳人(?)の契合申分なしぢやが中には例外もある、先達て一寸新聞にも出とつたが、緣日臺帳を持つて居つた目黑のチビの事ナ、あれの緣日臺帳は中々綿密に東京は勿論、近鄕近在の緣日と云ふ緣日は殘らず記載し、池上の競馬や横濱根岸の分迄日取をもちやんと記載し索引迄も附けてあつて完全のものだつたが、それよりも面白いは彼の女房だ、是れは芝新堀の煙草菓子屋の看板娘であつたのを苦心慘憺して手に入れたのだ、是には中々筋道があるが君等の樣な若い者に、そんなことを云ふと毒だから略すが、マアやつとの思ひで手に入れたのが、三十九年の八月十六歲の花の盛りだ、愈〻來て見ると掏摸だつたので驚いて泣きの涙で止めたので、一時は中止したのだが、遂には其言をも聞き入れない樣になつたのだが、此一幕はそこいらのヘボ文士の筆では、到底及びもつかない世話場だつたよハツハア。

それから宮の銀や野田の樣に、銀次先代の乾兒だつたが、麒麟も老いて何とやらで故買となつたのもある、丁度關取が止めて年寄になる樣なもので、退職されて辯護士となるとは少し趣きが違ふのだ、一體掏摸は十歲前後から才能を發揮し、二三十歲前後が最も働き盛りで、中には老いて益々盛になる

ものもあるがどうも敏捷を缺くものが多い、普通の竊盜でも又然りだ、現今の樣に十年十五年とやらるゝと時勢にも遲れ株も失ひ、身體も駄目ともなるからマア職業的に死刑の宣告を受けたも同樣で、特には長の年月のことで言渡す方は平氣だが、言渡さるゝ方は中々溜らないから末はどうなるやらも知れないので、此頃は捕まると覺悟を極め、中には女房を離緣して出て來るのもある、大阪では前田の女房が縊れ死なうとしたさうだが、贅六にも似合はず掏摸だけあつて感心だよ、聞けば前田も一應釋放されたさうだ、女房の一心天に通ずかネ此前田は前に沿革の時にも一寸云つて置いたが、關西の大親分で新聞にも一寸ある通り、靜岡事件の時などは他に事件があつて手が放せないと云ふのを、無理に警察から御願ひ申して岡山から方々へ行つて貰つて、端緒を得たこともある、赤坂署では掏摸全滅の意氣込で居ながら、大仙捕縛の時は此前田に御願ひした樣な譯で、仲々の奴だからどうかシツカリやつて貰ひたいものだ。

大分話が脇道へ外れたが、其他一般の關係者を作るのは、所謂人心收攬術と金で急所を押へる遣方だ、是れは掏摸に限らず天下に大事業をするのは皆此流だ、此呼吸は講釋したとて分るものではないが、君等は是から大に心掛けねばいかんよ、昔から義賊と云つて演劇や何かで、能く金持から奪つて貧乏人に施すものを賞め立てるが、是れは其貰ひたい連中の云ふことで、盜となりや大なり小なりや

る事とて別に異とすることもない、と云ふのは元來只だ取つて來たものだから惜しくはないのと、一は眞逆の時の隱れ場の爲めに恩を着せて置くのだ、月給を後生大事にして辨當食ひに行く連中には分からない事だよ、それから通信機關や集會所や凡てのものが整備して居るが併し新聞にある樣に、ナニも今更警察機關に凌駕するとか、何とか云つて驚くに當らない、何れの方面を見たつて善なり惡なり、凡ての機關は皆ちやんと整つて役所仕事は最も遲れて居るのが一般だ、ソレを自分等の後れた眼から見て感心して、ナニカ機關があると云へば、直に一々官制を定め職員を任命し、規則を定めてやるものだと思ふから益驚きが大きくなるのだ、昨年だつたか繁文褥禮を廢せよとの訓令が出たら直に繁文褥禮調査會でなものを設け、益繁文褥禮ならしめたドコカの地方廳の樣に役所連はほんとに話にならないよ。

關西の檢擧も益盛んだね。モウやりさうなものと觀測し、我輩も前回掏摸のバラダイスだと云つておいた、名古屋熱田も愈手を附けたな、豐橋一の宮鳴海さては岡崎から濱松迄手を延ばしたのは中中愉快だ、全國聯合の大檢擧は眞に、空前の大壯擧だ大に遣るべし〳〵、國家の爲め賀すべく、更に司法權の睡れるものにあらざるを示すことに於て賀すべく、更に大に賀すべきは、大阪刑事の潔白なることの言質を得たことだ、罪惡の最も發達したる大阪に於て、根據の深き掏摸の本場に於て、被害

者より依賴せられて、贓品を出さしむるとき之を値切る迄深切なる刑事あることは、刑事腐敗の聲高き今日に於て、實に一の奇蹟として喜ぶべき現象ぢや、我輩の從來知り得たる結果に依れば、前數回述べたる以外に於て、明言すべからざる掏摸と刑事との關係、さては此兩者と故買者の關係の如きは、惟ふに誤聞であらう、刑事の潔白は敢て關東も關西に讓らざること〻思ふから、玆には一切述べないことゝし、前回に引續きたる故買者の談も國家の爲め目出度々々で打切り、此物語も隨分永くなり我輩自身の豫想では、始め二三回で濟む考へだつたが、君達の釣出しが甘いものだから、とう〳〵こんなに喋舌つたのだ、殊には休暇も濟んで多忙となつたから、モウいゝ加減に切上げようと思ふ、もう何んと云つても君達の手には乘らんよ。

ウ、約束だから符號のことを話せと、前來處々で大抵話したからモウ良ぢやないか、我輩が言を食むと云ふのか、成程な、第三回のとき符號は後で話すと云うたと、訊問調書ですら時々否認する事がある世の中に、君等の筆記とて絶對證據力もあるまい。併し議論は別として一寸話さう。

實を云ふと符號には苦んだよ、十七八年頃だつたか警視廳で符號を編纂したことがあつたが、盜賊どもはソレと知つて替へてしまつて、無駄骨折となつたことがあるよ、現に我輩の知つてからも四度程變つたよ、ソレト云ふのは何も一々爾後本團に於て符號を何々と定むとか、何とか云つて文部省

流に訓令するとは異なり、彼等の以心傳心で自然に發達して適者のみ生存するのだから、彼等の敏捷な如く符號の變遷も激しいのだ、四光や硯海の義太夫の樣に、有名となつて隱藝の範圍を脱しても尙ほ隱藝で通るとは違つて、世に知られては符號たる效果がない。臥雲日件錄に『盜賊中有二隱語一曰二止湯一曰二合沐一曰二錢湯一錢湯者不レ論二貴賤一各頒レ所レ盜曰二合沐一者諸賊等分二其財一曰二止湯一者不レ論二多少一所レ盜歸二賊中首一也。』とあり或は土藏を『娘』と云ひ犬を『姑』と云ふなんどゝ一般に知られたことは、今更氣の利いた化者は使はないよ、亞米利加の言語學者が言語發生を研究する爲め、二三歳の幼兒數百名を無人の地に置かば、互に一種の言語を發明して、相互の意思を交通すべしと云つたが、ドウモ學者丈けに云ふことが迂濶だよ、そんなくだらないことよりは、掏摸の仲間へ這入つて符號の發生を研究した方がよつ程いゝよ、外國人は掏摸の觀念が薄いから何んでも鈍くていかん。

さて變遷極りなき符號中にも、一般盜語の混入したものや、新舊混雜したものがあつて複雜だが、是を一貫した大原則と云ふのは、凡て逆讀にするので、夫れ以上は臨機應變に意思を通ずるのだ、眼が口程にものを云ふと云つたつて、直に戀愛の符號如何なんとくる野暮ぢや話せないからな。

竊盜をノビ、兇器をドス、危險をヤバイ、刑事をデカ、逃走をズラカルなど云ふのは一般の盜語で、掏摸の專用ではない、警察をサツケイ。交番をバンコ、警部をブケイ抔と逆讀をなすが、警視廳を

『局』と云ふのは、寧ろ符號の部類に屬さないかも知れぬ、君等の樣な若い者は知るまいが、警視廳創立の頃の第二局の勢力と云ふものは、それは〳〵素ばらしいもので、他の局などはあつても無きが如くだつたから、警視廳を俗に二局又は單に局と呼んだのが此語の起りで、他には用ゐられなくなつても、掏摸仲間丈には其恐ろしさが忘れられずに今でも用ゐらゝるのだ、故買をヅヤと云ふのは系圖屋(窩主)の下の辭から取つたのだ、ダチの友達に於ける樣なものだ、被害者をドウロク、婦人をゲン、手拭をスイビラ、顏を知られるのを『面がある』、抔は其詳しい由來が分らない、船を『浮巢』と云ふに至りては、賴政集の「子をおもふにほのうきすのゆられきて、すてじとすれやみがくれもせぬ」から來たので却々優美だよ、權利義務ばかりが能ではないから、チト優美な心掛がないと掏摸にまでも笑はれるよ、稼ぎ場所では、歳の市を『ザラ』、酉の市を『ヒラマチ』などは普通で、深川不動を『辰巳』とはいゝ思ひ付きだが、藥師の『目醫者』はひどい。

彼等の最も重きを置くのは方法と贓物の符號だ、方法に付ては上來屢述べた通りだが、贓物ときては實に雜多だ、金時計を『鶯』、時計を『饅頭』などは古くから知られた語で、近來は用ゐるものもない、或は金時計を『テラ』、時計を『スコ』、銀時計を『ヒロ』、鎖を『サクリ』又は『金まん』『銀まん』『クリス』と云ひ、關西では『金玉』『銀玉』『すこ』など云ふが、銀次の金錢出納簿には『ウグ二〇』など舊式な語を

記載してある、序に同帳簿の符號を話さうか、固より今我輩の手許に無いから多少の違ひがあるかも知れぬが『大せい』とは勿論平野清吉、『みやた』は宮田庄太郎、『さだ』は寺地定吉、『きん』は井上金次郎、『はげ』は日形寅吉等で、五十餘名の各口座は皆乾分の符號だ、此帳簿は其内に公にされるだらう、其時はまあゆつくり話さう、それから六十錢を『眞田』、墓口を『自雷也』などは凝つては思案に能はずの方だ、櫛を『三日月』は一寸氣がきいてるが、銅貨を『醉拂ひ』は普通で、五十錢銀貨が『オテンタウサマ』、二十錢銀貨が『星』は拙い、マアこんなに竝ぶれば際限がないから大體で止さう、『エスペラント』でもやる隙があつたら、掏摸の符號でも研究した方がいゝかも知れぬ、去年千葉の新聞記者が上京の途次、汽車中でマクを切つてる紳士風の男を、てつきり掏摸と思つてウロ覺えの符號で話しかけたが、向うも之に答へたから得意になつて話す内、ツイ間違つて掏摸でないことを覺られた面白い話があるが、マア是も省略としよう、引續いて第三讀會に移るよ。

さて段々掏摸の講釋を承つて大部明瞭になつたが、抑も彼等の末路は如何と云ふ質問か、至極御尤で其實御尤でない疑問だ、官吏や藝者の落着は如何と云ふ問題を研究した上で、始めて此問を起すのが然るべしと云つて、ハネてしまつては曲がないから、彼等の仲間で非命に死んだ奴のことを一寸話せばかうだ、前來述べた根津の貞吉は入獄中精神に異狀が出來て悶死し、銀次の先代清水熊一名

水燕の熊と云はれた清水文造、又の名谷尾育造も末路亦殆んど同樣の狂死である、それから東海道で一人、碓氷峠で一人何れも汽車から飛下りて死んだ奴もあり、魚河岸のリンチで遂に死んだものもある。

魚河岸のことは君の所の社長は特別な知識があるが、夫れが爲め説明しないのも體裁が惡いから一寸爰で話さう、魚河岸と云つたら言ふ迄もなく、勇肌の本場魚飛び錢躍る處、取るには何の造作がない樣だが、此地では餘程氣の利いた奴ぢやなくては寄り附かない、彼等の危險界と云ふのは目付かつたら最後、何百人と云ふ連中に天秤棒を喰はされ、擧句には河へ放り込まれ、泳ぎつけば亦た打込む傍へも寄り附けぬ始末で其の爲め警察へ引渡したのち死んだものもある、掏摸道の暗劍殺だ、それから三十六年の名古屋の殺傷で『きられの江戸』が、仲間の爲めに殺された時は實に大騷ぎで、彼等仲間の沸騰と云つたら、中々板垣伯岐阜の遭難處ではなかつたよ、近くでは横濱で雨宮の乾分栗山が仲間へ對し、己れが手本なれば惡い事は止めよとの手紙を出し、入監中縊死を遂げ、靜岡の由が死後は眞面目に世を渡れと、女房へ遺言を傳言し入監中縊死し、石田の定が六連發を以て銀次宅へ闖入し、金子恒男の掌を擊ち貫き、御光の友次を二階から蹴落した騷ぎもあつた、之れは新聞にもあつた有名な話だ、掏摸道全盛時代に巨萬の富を造り、家賃の收入のみにても優に二百圓、立派な紳士として世

を送れるだらうと思つて居た銀次もトウトウ捕はれ、全國に檢擧の手が擴がつた樣な次第ドウセ碌な末路もあるまい、マア細々ながら月給大事と嚙り付いてる方が無事だ、若い者共は無謀な野心に驅られてはいかんよ。

さて愈〳〵大詰として掏摸の語源の講釋を始めようと思ふ、能く注意して此頃の新聞の記事を見ると、關東では掏摸と書してスリと假名を附け、關西ではチボと假名が附てる、抑も此掏摸と云ふ字は果して何と讀むのか知つてるかどうだ、今の若い者は文字の講釋とくるとカラキシ駄目だよ、清國招聘の連中の不評判は人格にも依るが第一の原因は同文國など威張り乍ら漢字を知らないからだ、君等も天下のこと國家のことや大きなこと許り云つたつて、文字を知らなくては此通り何にもならないよ、書は以て姓名を記するに足るなんどの遁辭は許さないよ、ア、いかぬ文字の話だとすぐ面白くない樣な顏をして傍目をしとる、モウ少しだ我慢しないと承知しないぞ。

（此間沿革語源の話あるも前章と重複するを以て省略）

是にはいろんな說があるが、まあ片端から辭書征伐と出掛けよう、是れが文學博士物集高見纂宮內省御藏版日本大辭林と云ふ素破らしい辭書だ、なんのこつた『掏摸ものをかきさらひとるぬすびと』是ぢや搔浚の說明だ、掏摸とはお門違だ、流石は上流の方々は下々の樣子を御存じないと見える、是れ

から見ると幾らか司法官の方が常識があるよ、次は帝國大辭典だ、フム『往來にて人の携へたる品など掠めとるを云ふ』前より少しはいゝが、汽車や電車の中をどうしてくれるのだ、マダ〳〵面白いことがあるよ『きんちやくきり、ちぼ、ぴくぽけつとなど云ふ』ピクポケツトを俗語だと思つてるから振るつてるよ、して見ると司法官は又た學者よりも常識があるよ、段々價値が出てくるよ。

御次は御大將言海だ、ア、矢張り同樣だ『路行く人に摩り寄りて其携ふる品を掠め盜むこと其又盜人』まるで話しにならぬ、マア馬鹿〳〵しい、もう辭書なんどは止しにしようと云つて別に明案もない、マア仕方がない、すつと拔き取るから出たか又は摩り寄つて取るからだとでも云つて置かう、これ〳〵何を笑つてるのだ、とう〳〵我輩が弱音を吹たと、ケシカラヌことを云ふな、所謂滿を持して發せないのだ。掏摸一名モサとも云ふ、摸索と云ふ語だらうと云ふものもあるが、決して當てになる說ではないから我輩は保證しない、其他チボと云ひ、マツチヤンと云ひ、サガラとも云ふが能く語調を味つて見ると、チボと云へば語の發音自體上方的で、關西風を帶びるは爭はれないが、スリと云ふと何となく江戸ツ子的口調を帶びて、快活に敏捷に勢能く而かも思ひ切りのいゝ感を起さしむるのだ、前に沿革の部に述べた如く、東西掏摸の氣風の異同は、亦夫れ名稱自體に於て之を體現すると云つても不可はない。

名古屋以東の停車場では、朝日と云へば東京朝日、ビールと云へばエビスと通じ、以西では大阪朝日を單に朝日と云へば得られ、旭ビールは只だビールとのみで得らるべし、其何れなるやと問ひ返さるゝは名古屋なりと、矧川得意の地理談のそれではないが、以東に於てはスリと云ひ以西にはチボと云つた掏摸も、東西より狩立てられ何れにも通ずる名古屋に於て、最終の一網を下せしときに於て、我輩も所謂また此物語の終りを告ぐるのであると御茶を濁して置く。

終りに臨んで、我輩の此永々しき法螺物語を掲載したる法律新聞記者の宏量と、之を愛讀したる、ナニだれが愛讀するものか憎讀だと、コラ默ツとれ讀者諸君の好意を謝しと、こゝ迄御世辭を云つてきたがサア後が詰つた、それ〳〵漸く思ひ出した余は此機會を利用して敬意を表すと、ハイカツてお

くかなハツハアハツハ。

附錄二篇

隈侯いろ〳〵

一、大隈の名が新聞に表はれし始め

大隈重信の名程多く新聞に出たものはあるまい、啻に國内の新聞のみならず外國の新聞にも常に日本人の代表的人物として掲げられて居る、現に近着のデリーメール年鑑の世界現代人物中にも『プリンス大隈』と出て居る位であるが此世界的偉人の名の新聞に表はれし始めはといへば慶應四年六月二日發行の『横濱新報藻鹽草』第十四編に

ある人の説にながさき港は商法まことによくとゝのひて土商客商ともによろこびあへり參謀大熊(隈)氏は鍋島の人なり博識英才にて時勢をさつし急務をあげ邪正を糺し仁慈をほどこせり支那はいにしへより日本と和親の國なれば別段によきとりあつかひをなせりこれによりて唐商ども朝廷のおぼしめしを感戴し舊弊のあらたまりたるをよろこびけるとぞ

隈侯の公生涯短しとせざれどこれ程の贊辭は無かつたらう、此當時の交通不便の時代に於て長崎の名聲が横濱に迄擴がつたのを見ても如何に縱横に手腕を揮ひつゝありしかを想見するに足るであら

う。

右の文中に參謀とあるは今の用例と異り武官では無かつた、其職掌からいへば民政部長とでもいふべきものであつた。

これが大隈八太郎が中央政界に乘り出すの始めである、其當時の長崎は新文明の觸接地として各藩競うて留學生……敢て留學生といふ、此頃の長崎遊學は今日の歐米留學以上の困難と抱負とを有して居つたのである……を送つて居つたが佐賀藩の人材として大隈は此地に來り、致遠館の學生として孜孜として研學し傍英語をフルベツキに學び數學をウイリヤムスに習つた。

時に大政奉還の飛報は此地に電達した、年少氣鋭の意氣天を衝く書生連は相會して幕府既に大政を奉還す、長崎奉行は當然廢官なり我等代つて理想の政治を行はんと議し、佐々木高行(故侯爵)副島次郎(故伯爵種臣)大隈八太郎等を代表として長崎奉行に迫りて長崎の政治を引渡すべしと談判を開始した、平素威風堂々として長崎全市を壓したる奉行も書生連の勢ひに辟易し暗夜密かに部下と荷物とを取纏めて逃走した。

茲に於て書生連は凱歌を揚げ相會して長崎會議所を組織して長崎の行政を掌つた、即ち書生連の自治政府であるが其實質は各藩人材の集合であつて、明治顯官巨商發祥の搖籃である。

其主なる人々は右三人の外江藤新平、中島信行、岩崎彌太郎、谷口藍丙等であり大隈は其外交部方面を擔當したのである。

大隈は先づ關税を徴收したのだが、端なく佛國領事の抗議に遇ひ博辯宏辭堂々論辯して屈せず、大隈の名茲に於て外交團中に著聞したのである。

此書生政府は二ケ月にして長崎裁判所總督兼九州鎭撫總督澤宣嘉參謀井上聞多（馨侯爵）以下の幕僚を率ゐて來任したるに際し事務を引繼ぎ大部分は長崎府の役人として任命せられたのである。

前書新聞は正に此前後の頃の記事である、此時代中の難問題として起つたのが浦上村切支丹事件で之が中央政界の問題となり面倒なる外交案件として大隈は上京し英公使との間に談判數回之れより大隈の名聲轟き長崎の書生は遂に押しも押されもせぬ大外交家大政治家となつたのである。

二　菅原朝臣重信

明治二年から三年へかけての職員錄に

從四位守民部大輔兼大藏大輔菅原朝臣重信

といふながゝしき奈良朝時代の公卿でゞもありさうな肩書の大官がある、いふ迄もなく隈侯である。

最も新進の政治家として明治政府の要路に立ち非常の意氣込を以て改革改造に熱注した隈侯にこんな肩書があらうとは一寸信じ難いやうであるが實際あつたのである。

序だが隈侯と相並んで二大政治家たりし伊藤博文公當時の肩書は

從五位守大藏少輔兼民部少輔越智宿禰博文とある、現代人に耳遠い肩書は矢ッ張りあつたのである。

それから序にも一つ披露をすれば澁澤子爵は

正七位守租税正源朝臣榮一

といふのである。

こんな肩書のある事が維新史の面白い處である、なにしろ王政の復古といふことゝ維新といふことを同意味に取扱つた時のことであるから種々の矛盾は免れないのである。

一方には政體書で三權分立を標榜し諸官四年を以て更替す公選入札の法を以てす、と米國直譯の政治を其儘宣言して實施せんとする一派があるかと思へば、大禮服の制定論で舊來の分は平安朝式でいかぬから奈良朝時代のものを採用すべし、との廟議ある時代であるから明治二年には右の政體書に基き明治天皇御前に於て輔相（首相）以下三等官以上を選擧したかと思へば、其年には千二百年前の大

寶令其儘を復活した職員令が發布せられてこんな肩書が出來たのである、米國と奈良朝とを同一に取扱つた所に明治史のユーモアがあるのである、然し氏を源平藤橘に別つたのは其前年からあることで昨日までの足輕や浪人は一躍して廟堂の大官となり俄に氏が要ることになり勝手に攫み取りをしたので、中には源平ばかりでは面白くない、さりとて公卿でないから藤原氏は猶ほ緣が遠い、いつそ楠公は橘氏だから拙者は橘氏にするといふ堂々たる(?)理由で橘氏を名乘つたものもある、後年の乃木家再興問題よりは無邪氣で良い。

扨て明治二年四月に民部省を置き翌三年七月民部省と大藏省とを分つたので隈侯は之に任ぜられ常に其實權を握つて居つたが斯く朝廷の大官となつた爲め氏を菅原と名乘つたのである、晩年迄菅原道實の何の何とやらいふ系圖論を隈侯から聞くに至つたのは此時に基くのである、それに就いてちよいとした挿話がある、といふのは先年隈侯が南部秀麿を養子に迎へたときの祝としてカフス釦の用命を蒙つた玉寶堂は大隈家の定紋として梅鉢をつけて叱られながら、けゞんな顏をして殿樣に菅原道實の子孫と仰せらるゝから梅鉢だと思ひましたがさうでないのですかといつて大笑ひとなつたことがある、玉寶堂の主人なか〳〵話せるぞ。

三　大隈參議と大浦警部

明治九年明治天皇東北御巡幸あるや參議兼大藏卿として隈侯は供奉の列に加はつた、七月十五日車駕青森小學校に臨御あつた、此時弘前東奥義塾教師米人ジインク生徒十名を率ゐて來り御前に於て演說及び文章朗讀を行はしめたが其學生の筆頭には

ハンバル士卒を勵ますの辯
青森へ御着輦を祝するの文

珍田捨巳

であつた珍田伯たるもの當年を追想せば多少の感慨無きを得ないであらう。

次いで明治十一年車駕北陸東海御巡幸あり參議兼大藏卿正四位大隈重信供奉した其時の隨行員は

大隈參議從者二人小者三人
佐伯大藏權少書記官小者一人
判任二人
金子大藏一等屬警部一人
南大藏八等屬馬丁一人小者一人
大藏省御用　泉信吉小者一人

開拓使屬高木彬敏一人
橋本大藏少書記官
松本大藏四等屬
堀大藏六等屬
藤井大藏八等屬
田中大藏八等屬
鑑定方三人
小者一人
車夫五人

といふ一行であつた。

此時の供奉の內に少警部大浦兼武といふのがあり月給二十五圓であつた、其地位の隔絕は大隈參議とは口を利くことすら出來なかつたものだが、時運の變轉は人事の意表に出で三十幾年後には內閣總理大臣伯爵大隈重信と內務大臣子爵大浦兼武として相並んで廟堂に立つに至つた、當年兩雄の夢想せざりし此際會は少からざる興味を唆るのである。

扨て又此時の宿泊料は敕任官（此時親任官の定めなし）を上とし『晝拾五錢泊三十五錢』奏任官判任官及下士官を中とし『晝十二錢泊二十五錢』等外兵卒從者夫卒小者を下とし『晝七錢泊十三錢』であつた、決して桁違ひや書き違ひではない、大臣參議は一日合計金五十錢也であつた、而して大隈參議は此時一等官として月給五百圓也であつた御役人樣の羽振りの好かつたのは故なきにあらずである。

明治十四年車駕兩羽、北海道に御巡幸あり、大隈參議供奉す、六月九日北白川宮大隈參議を牛田銀山に御差遣あつた、松島瑞巖寺で北山和尙が紙と筆とを出して大隈參議に揮毫を賴んだが隈侯例の流儀で私は書けない、夫よりも此處に居る學者連（川田剛金井之恭等）に賴んだがよからうといつたが和尙は大隈ともあらうものが書けんといふ話がなからうとて承知しなかつた。

二十四日には隈侯に鮫港を巡視せしめられ三本木附近へも御差遣あつた、九月十五日には荒川鑛山に御差遣あり、同月二十三日鶴岡神宮敎會所、二十六日には玉野開墾地、三十日には山形市濟生館を巡視せしめられた。

此時の宿泊料は前より騰貴して居る

一等敕任　晝三十錢　泊五十錢

二等奏任　　晝二十錢　泊四十錢
三等判任下士官　　晝十五錢　泊三十五錢
四等等外兵卒從者夫卒　　晝十錢　泊二十五錢

決して木賃宿の間違ひでは無い。

四　大隈家の戸籍

ちよつと大隈家の私事に立ち入つて見る。

隈侯の父は信保といひ母は同藩杉本牧太夫の次女で三井子といつた、天保九年二月十六日此夫婦の間に生れたのが八太郎重信である。

それから綾子夫人は東京の三枝七四郎の二女で兄は守富である、嘉永三年十月廿五日生れで大隈家へ嫁したのが明治五年十月である。

明治五年といへば隈侯は參議で所謂國務大臣である薩長の元勳を向へ廻して縱横に切り捲くつて居つた最も鼻息の荒い時である、此時に結婚したのであるから夫れ以前は獨身であつたらうか否々。

それに付いては一寸其頃の時勢を語らねばならぬなにしろ當時の顯官といへば、昨日迄は地位の卑しい田舍武士一躍して廟堂の大官となつたのである、得意ならざるを得ぬのである、醉うては枕す美

人の膝、覺めては握る天下の權で折花攀柳を事としたマア何の事はない今の成金氣分だね。

これに付いて隈侯は一昨年昵近の者に面白いことを言つた、それは露國の現狀の話が出て昨日迄の貴族富豪は今日は喰ふに困り色んな賤役に從事し、之に反し此間迄の勞働者が政權を握り得々たる有樣を話したものがあつたとき、侯はそれは過渡時代にはどこでもあることで現に我國でも維新の際は恰も其通りであつた、昨日迄の足輕や浪人が大官となり威張て居るに反し、旗本御家人の殿樣や若樣が今日は小使や給仕で其下に使はれて居る、剩へ其上官が小使や給仕に其方に娘や妹があるかあるなら妾に出せといつた風なことは幾らもあつたとの話は確に當時の世態を喝破した言だ。

或者はいつた當時の狀態には少し許りは同情してやるべき點がある、夫は田舍武士が大官となつては第一に目につくのは江戸の美人であるのも無理は無い、それに糟糠の妻を國から呼び寄せて見れば田舍臭くて話にならぬどうも大官の妻としては不釣合だといふことから遂にいろんな家庭の悲劇を生じたのだと。

これも一理のある論だ、まあこんな譯で當時の大官の殆んど凡ては國の妻を忘れて江戸の女を納れたものだ、此點は遺憾ながら隈侯も御多分に洩れなかつた。

其時の隈侯の言草は

和親の第一は結婚である、江戸人の怨みを去るのは其女を納むるにあるのだ、今や王政維新海内一和の時國家の爲め家庭の私事を犧牲にするんである

といふのであつた隈侯平生の雄辯に似ず甚だ下手だ。

佐野常民之を聞いて曰く

なんといふ屁理窟をいふ男だ、なぜさつぱりと白狀しないのか、往生際の惡い男だ、無妻の人がいふのなら幾分聞えぬことも無いが朝廷の臣ともあらうものが故らに糟糠の妻までも離緣するにも及ぶまい、如何に維新だとて一家まで維新にする必要は無いだから俺は大隈は嫌ひだ

といつた、どうしても此方に團扇を揚げねばならぬ。

それから先年南部英麿と破鏡の嘆に滿都の子女の袂をしぼらしめし長女熊子は文久三年十二月十四日生れで勿論今の綾子夫人の子では無い明治十二年五月十五日南部伯の弟英麿を迎へて養子とした、これは綾子夫人の見立てゞあつたが明治三十五年九月十五日離婚となり翌年五月六日熊子は相續人を廢除された。

これより先き明治三十五年四月十七日三枝守富の三女光子（明治十七年一月二十日生）養子英麿の養子つまり侯の養孫として入籍したのが英麿離婚の後明治卅五年十月十五日松浦伯の五男庶子常（明

治四年八月十六日生）を婿養子として迎へ常は信常と改名した次いで光子は翌三十六年二月二十日廢嫡となり大隈第二世は信常となつた、此光子といふのは始め明治十七年三月七日養女となつて居つたのを明治三十五年四月十二日實家へ復籍して居つたのを英麿離緣の少し前に再び入籍したのである。

その外眞木男爵夫人知惠子は三枝の娘で一旦大隈家の籍に入れて夫れから嫁したことになつて居る、あんまり一家の私事を書くのは良くないからまあこれ位にして置かう。

五　選擧任官

外交家として中央政界へ乘り出した隈侯が財政家として認められしは明治二年の會計官副知事が始めてゞある。

會計官とは今の大藏省で副知事といへばさしあたり次官といふ地位である。

此時の任官は選擧任命で我政體に於ては空前にして絕後な制度であつた、立憲政治家の振出しとしては眞に好箇の出發點と謂ふべしである、此選擧のことは前に一寸述べたが明治政府の急進政策の中でも最も急進突飛な遣り方であつた。

幕末外交問題の頻發するや政府は其傳統的政策に反して百姓官人でも國策の進言を許した、所謂時艱にしてデモクラシーの思想の横溢するは如何なる時代にも見る現象である、而して一面には當局の

無能に對する反動もあつたので公議輿論は全國民の標語となつた。

爰に於てか明治政府劈頭の大宣言たる萬機公論の御誓文が出たので明治元年閏四月の政體書には『太政官の權力を分つて立法行法司法の三權とす』云々との當時としては驚くべき新思想の綱領を聲明し其中に

諸官四年を以て交代す公選入札之法を用ふべし云々

といふ米國直譯流の制度を布き明治二年五月には其細則が規定せられ、參與、副知事は被選舉資格に制限なく『貴賤に拘はらず選擧すべし』とあり即日明治天皇御前に於て選擧を執行せられたのである。

先づ輔相、首相が三條實美當選し直に任命ありそれからそれ以下の選擧となり大隈四位は會計官副知事に任命せられた。

其選擧に就いては井上馨の盡力もあつたがまた岩倉具視の信任も與つて力あつたのである。

此選擧の際反對したのが山内容堂と大村益次郎とである。

容堂は土佐藩主として早く上下兩院を設くべしとの建議をなした位の明君であつたが此突飛なる政策には反對して曰く、國家の大臣たるものは天皇の御目鏡により仰付けらるべきものである夫を互に

投票する抔とは以ての外である、容堂は左樣な兒戯に均しき儀は御免を蒙るとて憤然席を蹴つて退出した、所謂大權干犯である、之に對する隈侯の辯駁は場所柄とはいへ出なかつたのは遺憾である。

さりながら偶然とはいへ隈侯の立脚の始めに當り選擧せられたに對し反對論の主唱者は土佐藩主であつた、後年自由の發祥地としての土佐而して其後身の政友會これが常に隈侯の反對に立つたのも何かの因緣であらう。

而して此時の斡旋者井上馨は其後常に隈侯と相反對しながら晩年に大隈内閣成立の産婆役となり其内閣が政友會を正面の政敵として手酷く打擊を加へたのは何でもないことであるが見方によりては興趣があるともいへる。

扨て此破天荒なる制度も此時一回限りで世は奈良朝に逆戻り、同年七月會計官副知事も廢官となりて大藏大輔も改まり隈侯は之に任ぜられてそれから前に說明した通りの公卿然たる肩書となり、明治三年九月參議に轉じて國務大臣の列に入つたのである。

六　隈侯の肝臟病

隈侯の肝臟病は久しいもので現に大正六年にも發し一時危篤を傳へられた程であるが抑々の初發は明治九年七月であつた。

時偶〻内務卿大久保利通も腫物を患つて療養中であつた、中外評論第五號は論じて曰く

（前略）二三大臣ノ不豫アル時ハ一國是カ爲ニ愕然タリ平素其指揮ニ從ツテ勉勵倦マサル者ト雖モ氣縮マリ色沮ミ狼狽周章措ク處ヲ知ラス宛モ敗卒ノ歸スル所ヲ失スルカ如キ形況ナキヲ保シ難シ此頃我儔カ聞ク處ニ因レバ明治政府柱石タル二大臣ハ皆不豫ヲ以テ政ヲ見スト嗟呼不幸ナル哉明治政府今ヤ我人民ヲシテ二大臣ノ不豫ヲ聞テ國家將來ノ變遷ヲ思念セシメハ果シテ如何ナル影響ヲ起ス可キカ、此時ニ當ツテ孰レカ敢テ潸然トシテ涕下リ慘然トシテ心悲シマザラン況ンヤ今天變屢至リ地異モ亦頻リニ顯ルノ際ニ於テ人心ノ擾々タル紛トシテ麻ノ如キ殆ント戊辰前後ノ看ヲ做スニ於テヲヤ、若シ世人カ二氏ヲ愛スルノ餘リ誤ツテ其病ノ重且深ニ至ランコトヲ思ヒ悲哀切痛ノ聲ヲ發シ震驚危疑ノ擧動ヲナシテ人心ヲ紛擾セシムルアラバ二氏ヲ愛スルノ心ハ却ツテ二氏ヲ害スルノ跡アルニ至ル無キヲ得ンヤ然ラハ則チ世人ハ何ヲ以テカ此際ニ處スヘキカ曰ク大隈ヲ愛スル者ハ之レカ爲メニ廣大ナル祠堂ヲ興シテ其祟ヲ祓ヒ其平穩ヲ祈ル所アレ云々謹ンテ獻欷ノ聲ヲ發シ悲哀ノ情ヲ起シテ世人ノ觀望ヲシテ笑々乎地ニ至ラシムルコト勿レ云々大隈ノ如キハ多年國家會計ノ要務ニ當リ之ヲ料理彌縫シタル艱苦ノ積鬱スル所此大病ヲ釀セシニ非サランヤ嗚呼命ナル哉云々

以つて如何に重大視せられたかゞ判る。

處が此頃多愛もない風說が流布した、それは此少し前に大隈家の家内中が大蛇に祟られて惱んだから屋敷の内に鎭守を建てゝ神官を聘して祓はせ淸めしめたとの噂があり、今度の大病も此の大蛇が又又出て來て祟つたのだらうといふので馬鹿々々しいやうだが隨分信用せられたものだ。

此時の隈侯は井上馨澁澤榮一の野に降つた後を受けて大藏省の事務總裁より參議兼大藏卿となり一面には地租改正事務局御用係となりて明治政府の一大事業たる地租改正に着手し、其前には臺灣事務局長官ともなり縱橫に財政家としての手腕を振ひつゝあつた時代であつたから、前出記事の國家激務の爲め此病を生じたのだらうとの推測は一應は當つて居る其後とても過勞のときには時々其發生の兆候はあつたので年と共に其勢を增したのである。

しかし此初發のときは隈侯の元氣最も旺盛のときであつたから例の元氣で押して間も無く治療したのであつた。

此時の隈侯の勢力には少からざる反對派もあつて私に其の病の重きを希望した者もあるとの噂もあつたが治療した後は岩倉具視の信任益々篤きを加へ帝國財政は大隈にあらずんば他に人無しと推賞し隈侯擁護に力めたのであつた。

七　外交の種本

隈侯が外交家としての手腕識見の群を抜けるは天稟の智勇辯力に加ふるにあらゆる難關の修練に由るは勿論であるが、抑々の出發點として一書生の身でありながら佛國領事の抗議に屈せず英公使と論じて敢て降らなかつた素養は何であつたらうか。

永き鎖國の我國には就いて師とすべき先輩知友のある無くまた外交の實際に接觸するの機は絶對に無い、さりとて當時の不十分なる外國語の知識にては到底これが資料を得らるべくも無かつた。

しかし長崎會議所の外交係として大隈八太郎の心頼みとした六韜三略ともいふべき種本は實に一漢譯萬國公法であつた。

後年隈侯は此事を語りて更に其外國官判事となつたときにも其時迄は條約すら一讀したこと無く任に就いて始めて條約といふものを見たのだと哄笑した。

この漢譯萬國公法といふのはホキートンの一六八四年の原著を支那に聘せられて居つた米人丁韓良（ウキリアムマルチン）が漢譯したのを明治三年に出版し、之を開成所（帝國大學の前身たる開成學校は此系統を引いて居るので幕府の蕃書調所が洋書調所となり更に此名に改めたもので）慶應元年に飜刻したものをいふのである。

一體歐米文明の我國に入つた初期は何れも支那を經由したもので歐米人は文化宣傳事業として盛んに原書を漢譯したものだ、之れが我國に入り來りて文化の進展を助けた功は偉大なものである。

勿論ホキートンの原書は幕府の外交係の許にはあつたが一般の讀物となる筈はなく、此の漢譯に依りて始めて我國の有識階級の眼に觸れたので啻に國際法の概念ばかりで無く『權利』といふ熟語は此書に依りて始めて我國に知られたのである。

扨て隈侯が佛國領事の抗議に對し論辯の金科玉條としたる一節は右の書の第一卷第二章第十一節の邦國君主ヲ易ヘ國法ヲ變スルノ時其公法ニ於テハ如何

の條である。

國約ハ專ラ議スル所之事ヲ指シテ言フ其事ニ在テ其人ニ在ラス君主ヲ易ヘ國法ヲ變スト雖モ其約仍ホ存シテ礙無シ卽チ變易アルモ其國猶存ス其自主之權亦タ存ス故ニ其約亦應ニ久シキヲ歷テ廢セサルナリ云々

髷を結ひ刀を帶びたる未開國の青二才と侮りてかゝつた佛國領事も筋道立つたる議論には面喰つたが佛國の勢力を背景としたる彼は弱身を見せずと居丈高になりて若し我要求を容れなければ大艦隊を派遣して責任を問はんと虛喝したが八太郎大隈は之には驚かないそれは御隨意になさいと平然たるものがあつた。

これも右の第三卷第一章第廿二節に

領事官ハ使臣ノ列ニ在ラズ云々

領事官等萬國公法定ムル所ノ國使ノ權利ニ與ラザルナリ云々

以下の領事の職務の性質を解しまた當時の情勢として佛國東洋艦隊の直に殺到し來りて開戰となる如き事理の在り得べからざるを知つて居つたからである。

今日から見れば何でも無いことであるが當時これだけの識見を有して居つた隈侯を偉とせざるを得ない。

八　大隈判官事と横須賀製鐵所

何等の武勳なきに拘らず明治政府へ乘り出し外交と財政とに於て他の比肩を許さゞる隈侯が其手腕を縱横に發揮し、軍閥者流をしてアッと感嘆せしめたのは横須賀製鐵所事件である。

此事に就ては從來あまり詳細の事實は傳はつて居らぬからこゝに一寸說明することゝする。

一體横須賀製鐵所とは幕末の俊傑小栗上野介が其財政困難なるとき萬難を排して設立したのであるが、其事業緒に就かんとするに際し幕府は倒壞し其工事も休業同樣となつた。

剩へ幕府は財政多端な爲在横濱の佛國共同會社及佛國郵船會社へ支拂ふべき金五十萬弗の延滯

の爲横須賀と横濱の製鐵所を抵當とし一八六八年三月一日より向ふ七箇月間に元利償還の約であつた。

當時はナポレオン三世全盛時代で其野心を東洋に迄及ぼさんとして居り幕府と深く結託し居つた爲め其好意を見せる外交振として横須賀製鐵所も出來たのであつたから幕府の否運と見るや自己の手で差押へてしまつたのである。

現今の横須賀鎭守府同海軍工廠の前身たる横須賀製鐵所が負債の爲め外國へ差押へられたといふ情無い事情のあつたとは今日からは想像もつかぬことであるが事實はどこ迄も事實である。

幕府が佛國に結ぶに對し薩藩は英國に賴つたので今や薩英が勢を得ては此佛國の差押へを解除せしめねばならず、又此有力なる製鐵所を手に入れなければならぬといふ第一の必要はあつたのであるが、なにしろ五十萬ドルの借財を拂はねばならぬといふ難關がある。

今の五十萬ドルは何んでもないことであるが其頃では容易ならぬ大金である、況んや明治政府には財權が無く且つ戰費多端な場合である、今日の財政困難とはとても比べものにならぬ大困難である、之には雲の如き豪傑連もハタと當惑した。

此時奮然として群議を排し其任に當らんと提議したのが外國、官判事大隈八太郎であつた。

其颯爽たる英姿に得意の雄辯を鼓し堂々として製鐵所の重要なる事より佛國の世界に於ける野心を指摘し寸刻も猶豫すべきにあらざることを力說し其費額の如きは我輩自ら處理せんと斷言した。

之れには廟堂一人の異議なく全權を大隈判官事に委任して東上せしめた。

大隈判官事は先づ大阪に赴き新政府の信用やら佐賀藩の信用やらあらゆる方面の勸說に依り府の手で以て富豪より借り上げたがやつと二十五萬兩しか出來なかつた。

これでもあれば何うかなるだらうと隈侯一流の胸算で此金を携へて海路東上した。

此時の隈侯の意氣込はさることながら横須賀製鐵所と佐賀藩とは關係がないでもなかつた、といふのは始め佐賀藩主鍋島閑叟は蒸汽工作機械を和蘭より購入したが經費の巨額なると人無きの故を以て之を幕府に獻じた、幕府は此機械が動機となつて幾多の曲折を經て横須賀製鐵所となつたのであるから藩主の命を受けて隈侯が此擧に出でたのであるか否かは不明であるが、少くとも此製鐵所のことは佐賀藩士の頭から去らなかつたから隈侯が進んで此任に當つたのかとも考へらるゝ。

當時は江戸城は明渡にたつたとはいひ條、彰義隊は上野に屯集し品川灣には榎本釜次郎の率ゆる大艦隊は煤烟を瀰らせつゝ海上權を掌握し官軍をして一指だも染めしめない。脫走の幕兵は所在に割據し物情正に恟々たるものがあつた。

大隈判官事は直に參謀總長たる軍務官判事大村益次郎を訪うたが大村は此時都下の事情を述べて米國より廻航の軍艦を受取るのが急務であるから、何卒此事を取計らつて呉れと切願した。

其軍艦といふのは幕府が米國に註文したストンウオールの事で、米國より廻航して横濱へ來たときは既に幕府が倒れたので、此艦には米國旗を揭げ米國は局外中立であるから官幕何れへも引渡すことは出來ぬとて碇泊して居つたのである。

幕府は歐式の海軍を創設してより既に十年、新歸朝者なる榎本は其大艦隊を擁して、江戸城たとひ明渡となるも我に此艦隊あらば幕府を回復すること難きにあらずとて儼として一敵國の觀をなした。

然るに遺憾なるは官軍には之に對抗する艦隊は無い、各藩に二三艘の艦はあるが全部之を江戸灣に廻航する餘裕は無い、然るに目の前にぶら下つた香餌は此のストンウオールである。

しかし此艦は當時唯一の裝甲艦で千四百噸の大艦である、後年『品川乘出す東艦』と唄はれて東洋に威を振ひ、其前函館戰爭には甲鐵艦といふ固有名詞で此艦の何れの手に屬するかに依り海戰の勝敗の別るゝと迄いはれ、爲めに宮古港の激戰となつた位の堅艦である。

之が目の前にあるのだから官軍は喉から手の出る程欲しい。そこで大隈判官事に賴んだのである。

そこで當年の隈侯はよしと許りに引受け米國公使に談判したが、そこは米國だ、現金を見せなけれ

ばどんな理窟をいつてもウント承知はしない。

しかしそこは隈侯だ、今更手を引く譯にも行かず勿論弱味は見せられない、こゝで獨斷で横須賀製鐵所の爲めとて工面して來た二十五萬兩をサラリと投出して軍艦受取の方へ流用した。

喜んだのは大村だ。これさへあれば官軍大勝利だとてこれより着々戰略が進行した。

艦は直ちに引渡を受け佐賀藩士が乘り込み水夫は長藩のもので操縱した。

此點は大出來だつたが肝心の横須賀製鐵所の金は更に工面せねばならぬ、そこで英公使パークスに持込み佛國の爲め横須賀製鐵所を押收せらるゝの危險を說きて其心を動かし、英公使の盡力で英の東洋銀行から五十萬圓を借入れ、佛國公使を訪ひ共同會社郵船會社と精算した處五十萬圓では餘分が出た爲め之れで更に軍器軍服迄引取つた。

さしもの難關も之で結着し、明治元年閏四月朔日横須賀製鐵所は明治政府に引繼がれた、此時の受取の長官は神奈川裁判所長官東久世中將通禧で副は鍋島侍從直大であるのもさこそと首肯される。

斯く隈侯の手腕に依り明治政府に引繼がれた横須賀製鐵所は大藏省の所管となり更に民部省の所管となつたが此兩省の首腦は隈侯であつたから其關係も依然深かつたのである。

明治四年二月横須賀船渠開業式があり兵部卿有栖川熾仁親王之に臨席あらせられ隈侯此時參議の顯

位にあり宮に從うて臨席した其得意思ふべしである。

同年五月彼のストンウオール卽ち東艦は船渠に於て大修理を加へたときは大隈參議は態々來りて之を點檢し當年の苦心談に氣焰萬丈當るべからざるの概があつた。

翌五年には隈侯は御召艦建造の議を上申し之れが實行の運びに至つた蒼龍丸と呼ばれたのが之れである。

爾來星霜五十年横須賀海軍工廠の發展は帝國の進運と共に目覺しく東洋一の工廠として三萬噸級の戰艦を建造して綽々餘裕あるに至り大正四年九月創立五十年記念祝典を擧行した。

時運は妙なもので此時の首相は偶然にも隈侯であつた、五十年一夢の如く感慨猶ほ新なるものがあつたが差支あつてどうしても臨席することが出來なく海軍參政官早速整爾をして祝辭を代讀せしめた。

其祝辭は普通の月並的のものと異り隈侯の口授に出でたものであつた、横須賀工廠の沿革を敍し日佛の交涉を述べた點は堂々たる論文であるが今其內の一節を揭げんに

横須賀海軍工廠創立五十周年祝典ハ本日ヲ以テ擧行セラル予ハ衷心ヨリ之ヲ祝スルト同時ニ無限ノ感慨ニ勝ヘザルナリ工廠ハ初メ横須賀製鐵所ト稱シ實ニ今ヨリ五十年前佛國政府ト我日本政府トノ

交渉ニ依リテ生レ出テタルナリ此交渉タルヤ日本側ニ於テハ主トシテ小栗上野介ノ干與スル所ナリシガ事上野介ノ發意ニ基クカ佛國政府ノ勸誘ニ因ルカ今之ヲ明ニセズト雖兎ニ角小栗氏ノ盡力ニ依リテ佛國ハ日本政府ノ爲メニ製鐵所創設ノ業ヲ援助スルコトニ決シタリ

之より横須賀の情況を敍說し佛人の功績を述べ次いで

予ハ明治元年五月ヨリ同八年ぺるにーノ歸國ニ至ル迄或ハ外交官トシテ或ハ財務官トシテ此横須賀製鐵所ノ事業ニ關係シタリ其ノ間幾多ノ快事ヲ見聞スルト同時ニ又幾多ノ苦キ經驗ヲ嘗メタリ回顧スレバ茫トシテ夢ノ如シ今日ノ横須賀海軍工廠ノ隆昌ヲ觀レバ殆ド隔世ノ思アリ

此一段は正に隈侯得意の經歷談である。

予ハ此等當局者並從業者ノ功ヲ偉トスルト共ニ本日擧行セラル、五十年祝典ヲ無限ノ歡喜ヲ以テ祝スルモノナリ本日親シク臨席シテ其現狀ヲ視察シ聊カ祝賀ノ意ヲ述ベント欲シタルモ國務繁忙ノ爲其意ヲ果ス能ハザルハ予ノ甚遺憾トスル所ナリ玆ニ代理者ヲ派遣シテ予ノ祝意ノ萬一ヲ述ベシメ職員諸君ノ一層自愛シテ國家ノ爲メニ益々奮勵セラレンコトヲ切望スルモノナリ。

之は通り一遍の御世辭で無く隈侯の衷心よりの叫びである世間多數の祝辭特に隈侯の祝辭の中で此時程力の籠つたものは無い自ら經歷したゞけあつて力の入れ方も非常であつたのである。

犬いろ〳〵

一　日米親善の犬

我邦より米國に派遣した使節の始めは萬延元年の親見豐前守の一行である。

一行凡て八十一名結髮帶刀を横たへて華盛頓や紐育の市中を濶歩し其國書捧呈の際は烏帽子直垂にて差廻しの馬車に乘り下郎は槍を立てゝ儀仗とし堂々として大統領に謁見した其時の使節の一人なる村垣淡路守の日記の一節に曰く

大路は所せまきまで物見の車はた歩行の男女群集かぎりなし、おのれは狩衣を着せし儘海外には見も馴れぬ服なれば、彼はいとあやしみて見るさまなれど、かゝる胡國に行て皇國の光をかゞやかせし心地し、おろかなる身の程も忘れて誇り貌に行もおかし

此意氣でなくては、大日本帝國の全權は勤まらない、霞關あたりの若手には爪の垢でも煎じて呑ませたい、此時の米國全體の歡迎はすばらしいものであつた、中には我々が臺灣の生蕃でも見る樣な好奇心から出たものであつたらうか純粹なヤンキー氣質で腹の底からの歡迎であつたか、我全權は右の

意氣であつたから、夷狄の邦禮儀を知らざる國と目し、夜會の招待あれば我國風では夜間人を訪問するは失禮だからとて斷り、ホテルで大舞踏會を開けばちつとも面白くないとて欠伸を嚙み殺す、（勿論隨員の中の若い者は一二ダンスに共鳴したものはあつたが）一にも品位二にも國威といふ風にシヤチコバツて居つたが、只一つ一行として衷心より情を動かさしめたのは二匹の犬であつた、そは一行がペルリの宅を訪うたときのことである、隨員柳川兼三郎の日記に曰く

五月九日　晴寅

今日暑氣甚だ強し、午の刻過より先年我國に渡來せしペロリの宅へ御出有、尤もペロリは病死して今は養子の代なり、家作美麗にして又日本の器物數多あり、日本へ先年渡來の節寫眞鏡を以所々の風景をうつし取りし額等も許多あり、惣じて家内の諸器物ともに美を盡せり、酒菓子等を出して馳走す又

二疋の狆來て衣類を嗅ぎ、日本人なるを知りて大いに悅び躍る事きはまりなく、膝に上り袂を嚙み更に側を離れず、是れ先年ペロリはじめて渡來せし時、我國に於て狆を求め歸り今猶其家に存生して、日本人を見て駈來りよろこび慕ふこと此如、亦歸るに臨んでは別れをしみ跡をしたふ其さま人の如し語らざる許也、其情人間に異る事なし、又大いに吠或はなき其樣實に不便にして我等にいたるまで落涙におよび其家を出云々

使節と犬とは意外な處で知己を見出して互ひに別れを惜んだのである、一行の日記のどれを見ても、此時程心を動かした記事は前後に無い、村垣使節も歸宿後の感想を記して曰く

六とせ先ペルリ渡來せし時は、我國の武をもてはらはんと議せし者も多くあつて、いかにやと思ふうち寛大の仁德をもて終に和親の國となり、かく使命を蒙りて此地に來りその親族に饗せらるゝも實に奇遇といふべきか、宇内の有りさま時勢のしからしむる所とひかへしてふしけり云々

としみ〳〵感想を洩らして居る、これより以後使節の意思は疏通したのである、日米國交最初の楔子となりし二疋の狆の功績もまた偉大である。

二　國際問題の犬

明治の初年各藩競うて歐米文明を採用し、各種の人材を雇聘したのは恰も近時支那各省が競爭的に我國始め諸外人を傭聘したと同樣の狀態であつた。

此時勢に際し、金澤藩主前田慶寧、鋭意治を圖り數名の外人を雇つた、其中の一人に夫人デツケンといふのがあつた、明治四年正月金澤藩士淺津渉（故貴族院議員南郷茂光）が契約して雇つて來たので鑛山學教授といふ名義であつた、北陸の田舍に洋館建ての官舍を造り、物價の安い其頃……米が

一石四五圓位の頃に……月給五百五十圓といふのだから、聞く人皆目をみはつたものであつた、ところが間も無く廢藩置縣となつたので、其雇傭を繼續する譯には行かなくなり、いろんな計畫もあつたが駄目になり歸國することゝなつた。

其引拂に際し澤山の書籍を賣らうとしたが、其頃のことであるから多分はキリシタンの本だらうと觸るゝものはなかつた、それよりも猶ほ困つたのは犬の處置であつた、デツケンは居常二疋の犬を連れて居り一疋に月六弗も費ると云つて居つたが連れ歸るには費用がかゝるからとて置いて行かうとしたが誰も引受人が無く連れ歸ることゝなつた。

明治五年三月十八日愈々出發することゝなつたが其行列が大變だ、今と異つて北陸の田舍のことだから汽車は勿論のこと何等の交通機關は無く、デツケン夫婦は長棒の駕籠に乘り犬が二疋伴いて行く、日本人では通辯と書記の外護衛として金澤藩士が三名並に藩廳係りの役人一名、何れも結髮帶刀で隨ふといふ有樣見物も群集し通行も困難な位であつたが此一行の中最も勢ひのひとが相從ふ强てあつた、沿道人の群集すると同時に駈出して來るのが所在の犬である、見慣れぬ連中の行列とて吠えると之に應戰するのがデツケンの犬である、ブルドツクでは無かつたが逞しき洋犬で之に出會ふと所在の犬は尾を卷いて逃げ出したものであつた、かくて幾く泊りの後金澤藩内を無事に通過して越前領なる

森田近くとなつた、此時も所の犬は負たがさあ所の若者らは承知しない。

單なる隣村の犬に負てさへ承知出來ない若者中のことゝて何を毛唐人の犬奴がといふ譯で寄つてたかつてデツケンの犬を打擲した、さあ今度はデツケンが承知しない只さへ一等下目に見て居る日本人が不平滿々で引上る際のことゝて我輩を侮辱したものだ、縣廳から大政府の問題として掛合ふといふ勢之には一行は困つた、外人の鼻息の荒い時のことゝてつまらぬ問題でも大袈裟にされると弱腰の政府は常に國辱的結末となるに極つて居る、ほと〳〵思案に餘つたが幸ひ出張の越前藩の役人も加賀藩に劣らぬ歐米文明の採用に熱心なる松平春岳の部下であつたから、百方奔走の末此件は無事に終局した。

デツケンの歸國後の消息は詳で無いが、之も同時に金澤藩に雇傭せられて居つた蘭人スロイスの子海軍大佐スロイスは蘭領東印度艦隊の公式訪問として昨年(大正十年)五月來航し、自ら金澤を訪うて懐しき父の遺蹟を偲んだ、況して同提督は金澤で產れたのであつた其感慨は眞に無量であつたらう、之とは異るが大問題となつたのは世人の今猶ほ記憶せる明治廿六年の長崎犬姦事件である、國民の血は沸いて對外派の義憤は逆つたのであるが事柄はあまり醜陋であるからこゝにはこれを省略する。

三　西郷南洲と犬

上野の銅像が出來て西郷南洲の概念始めて定まつた、其以前に西郷の寫眞として民間に流布して居つたものは痩身長軀の偉丈夫であつた、これは其實永山彌市の寫眞であるのを西南役前後に寫眞屋が南洲として賣出したものだ、更に滑稽なのは西郷隆盛夫人として洋裝の美人の寫眞が眞しやかに流布されて居つた。

印刷局で始めて南洲の肖像を書いたのが現今流布の底本であるが之も西洋人の手に成つたのだから、どことなく西洋臭く南洲らしくないので之を遺憾とし其他數種の肖像が出來たがどうもこれといふものは無い。

然るに何を根據としたのか上野の銅像が出來た、これで群疑始めて一掃されたが實はこれも理想化した南洲で現實の南洲を距ること遠いのである。

まづ第一にあの犬はなんといふさまだ、南洲を大きく見せる爲めといふなら聞えぬことも無いがあまりに小さ過ぎる、しかも其犬種はポインターかセッターで南洲はそんな犬は所持して居らぬ、またあの風采はどうだ狩のときの像なら犬はまあいゝとして銃が無い、尤も何處かの繪ではあの銅像で銃を背にして居る像があつたが、其方が餘つ程氣が利いて居る。

狩で無いとしたなら南洲は平素あんな風であんな犬を連れて散歩して居つたことは無い、しかし犬は澤山居つた、これは南洲ばかりでなく桐野其他も數頭の猛犬を飼つて居つた。

大久保利通を要擊した島田一郎の一派長連豪は明治七年鹿兒島に赴き桐野利秋に親炙して私學校に入つた、居ること一年餘、桐野も大に之を愛し歸國の際斑白の猛犬を與れた、喜び受けて金澤に歸り愛撫措く能はず其犬を見ること西郷桐野の如く自らも山野に狩獵して北陸の豪傑を以て任じて居つた。

明治九年再び鹿兒島に赴いた、桐野は喜んで此時政府顚覆の意圖を明かし其歸るに臨んで赤犬を贈つた、長は歸國して此犬を見ること猶ほ前の如くであつた。

十年の役西郷黨に應ぜんとして果さず其内西郷、桐野以下城山の露と消えたので悲憤措く能はず、遺愛の犬を見て西郷桐野に接する如き思ひを爲して僅かに悶を遣つたのであつたが、かくて已むべきにあらず當面の政敵大久保利通を斃すにあらずんば以て故人に見ゆるの顏なしと遂に紀尾井坂の變となつたのである。

西南の西郷黨と加州の志士との連鎖を表せし犬は遂に南洲の遺志に酬いんとする大久保要擊の發端となつたのである、銅像の犬は無意味なるも現實の犬は此の如き事變を生んだのである、西郷桐野と

犬との關係豈に無意味ならんや、銅像の犬を見るものは別に思ひを致して可なりである。

四　文明開化と犬

今は餘り使はぬ語だが以前は洋犬のことをカメと呼んだ、之は東京開化繁昌誌には一の字を宛て六かしい講釋をして居るがそれよりも東京新繁昌記に

稱洋犬曰加免蓋來之原語也

とある方が正しい卽ち外人が犬を呼ぶにカムカム（來れ來れ）といふのを聞いて犬の名とし既に此語を生じたのである。

何がさて文明開化の風の吹荒んだ明治初年のことゝて一にも西洋二にも西洋で、なんでもかでも西洋の眞似をしなければ人間ではない樣に思つた時代のことゝて來留外人の多くが犬を飼ふのを見て之れも文明國人の要素と心得て盛んに犬を飼ひ出した、勿論耳の尖つた尾の卷いた日本在來の犬は野蠻でいかぬ、カメに限るといふので洋犬の種を有難がつたお蔭で今日では純日本種の犬は僅かに東北の一隅に殘存するのみで犬界は外犬に征服され、今ではどんな山奥でも洋種のもので却つて洋服を着た人を見ては吠えて居る。

此カメ流行には先づ皇室の藩屏として四民の儀表たるべき華族が第一に實行せなくてはならぬと

て、白馬銀鞍、珊瑚難なんて東洋趣味はいかぬとてカメと妾が貴公子の必要品となつた、今でもそんな繪がよく殘つて居る、右の繁昌誌にも『大小嬌を伴れて貴族市中を逍遙の圖』を描き之に年抄若く俗に謂ふ私臭き妾を右にし何爲粧うても破瓜は過しと見ゆるばかりに春色の滿たる妾を又左にしカメ前軀して步し給ふ云々

と說明書きしてある又

鎭に怨みは數々御座る
カメに鰻は華族で御座る

との地口の流行したのも此頃である。

華族にして此の如くである以上は社會の上流として知識階級として天晴文明採用の急先鋒たる官員樣もまた之に倣ふのは當然である此頃出來た『文明開化』といふ書に

杏穿いたまゝで座敷へ上りおつたこりやちと迷惑な文明ぢやおまけにつれて來た犬も上りおつた云云

犬を連れて土足のまゝ座敷へ上る官員樣の風あたりを拂ふの狀以て想見すべしである、今時の罰當りの平民共はちと當今の役人を有難がつてよからう。

さて犬が社會上此の如く重要事項となると、之に對する取締りも無くてはならず、又勿論外國ではいろんな取締法があるからといふので犬の頸輪から犬の鑑札の規則が出來て、一方には野犬撲殺は官民の事業となつたが、此際に多く撲殺されたのが純日本種の犬であつて遂には惡い犬殺しは頸輪や鑑札があらうが無からうが殺してしまへば肉に印のないのを宜いことにして洋犬まで殺したものもあつた爲め時々問題を惹起した。

近年東京でやかましかつた犬の嵌口令や頸輪の規則が出來たり關西の某縣では犬に車を牽かせるのを禁じたりしたのは人道上の見地からではあるが、暗々裏に右の犬政策の系統を引いたものである、單なる犬でも幾度の法制上の目的となるのは他の動物に見ざる處である、犬だとてさう馬鹿にして貰ふまい。

五　銀座と犬の糞

近く祭典を行はれし銀座は五十年の記念とは今更ながら歳月の早きに驚かされる。

其始め建築せられしときの市民の驚異は今からは殆ど想像もつかぬ位であつた。

石室ハ卽チ英京ノ倫敦ヲ摸シ、街道ハ則チ佛京ノ巴黎ニ擬ス、亦タ何ゾ萬里ノ波濤ヲ逾エテ其國都ニ到ルヲ用ヒンヤ

と當時の文士服部誠一の曰つたのは必ずしも誇大の形容詞とのみ見るべきで無い、當時の市民の腦裏の感想はまた正に斯の如くであつたのである。

廢藩置縣で大名と武士といふものがやつと無くなつた許りの時で、國民は猶ほ皆髷を結うて居つたときのことであれば草鞋掛けで遠近から見物に出掛けたものであつた。

して其始めは銀座全體を『煉瓦石』または『煉火石』と呼んで居り後には『煉化廻り』または單に『京橋煉瓦』といつて居つたのを終には今の如く銀座とのみ呼ぶに至つたのである。一部の名が全體の名となるの例は往々あるも、こんな著名なことがかうなるとは妙であるが當時の市民が如何に煉瓦の概念の無かつたことが知られる、新繁昌記は說明して曰く

赤土ヲ燒ク者ヲ煉瓦石ト曰フ形チ方ニシテ而シテ長ク恰モ砥石ニ似タリ幅ハ約ネ五寸長サ一尺許リ形ち砥石に似たりとの形容は振つて居る更に

一車ノ薪ノ火モ燒ク能ハズ百轉ノ雷モ震フ能ハズ

とあつて今では何んでも無いことを無暗に感心して居る、それから

路上亦タ遍ク煉石ヲ敷キ砥ヨリモ平カニ席ヨリモ清シ、全街燦然一點ノ塵ナシ況ンヤ犬尿ヲヤ

と市民の驚異の眼は壯麗な許りでなく道路の綺麗なのにも吃驚して居るのである。今猶ほ苦情のある

如く、晴には砂塵濛々雨には泥濘汝脛を當然と心得て居つた市民は、其路上に敷かれた煉瓦を勿體がつたものである、犬屎に至つては今の青年は理解なく右はくだらない戯文に過ぎないと思ふだらうがこれが所要の問題である。

江戸の名物に『伊勢屋稲荷に犬の糞』といふ諺のある如く滿街犬糞狼藉人も犬も放尿勝手といふのが江戸以來の道路であつた、『犬の糞の敵討』とか『暗夜に犬の糞を踏ます』といふ類の成語はいくらでもある市民であるから、第一に銀座の壯觀に驚き、第二に道路の清潔に感じ、第三に路上に犬の糞や小便の無いのを稀らしがつたのである。

爰に於てか前項の補足をするの要がある、即ち日本犬の時代の江戸は其尿糞に汚されたが洋犬時代の東京となつては之れが無くなつたともいへる、犬と文明開化との關係は閑却すべき問題では無い。

さるにても時勢の進運は妙なものだ、當時の市民は犬尿の無いのを珍しがつたが現代人は却つて其事を珍しがつたことを珍しがるに至つたのである、更に現代人は當時の銀座街に吹矢や麥藁細工の見せ物があつたり街路樹の蔭に賣笑婦が行人の袂を曳いたりしたことがあつたと聞いては容易に信用はしまい。

六　英國女帝は狗犬？

明治初年の我外交界に於ける英公使パークスの勢力のすばらしかつたことは今猶ほ世人の記憶に存する所なるが、中にも帝號問題に付いての劍幕は寧ろ亂暴ともいふべきものがあつた、

事の起りは明治七年五月英人の犯罪事件のとき横濱稅關の公文書に女王陛下とあるのを領事が不當としパークスに告げたのが元である。パークスは我外務省に迫りて曰く日本で王といふは親王の次である然るに我大英國の君主に此語を以てするは不敬も極まれりと怒鳴つた。

時の首相は三條實美で外務卿は副島種臣である、(或書に此時の外務卿を澤宣嘉としてあるのは誤りである)外務卿は文字の用法に就いては得意である、答へて曰く否々我國でも勤王とか王政復古といふから王稱必ずしも帝稱の下では無い、パークス曰く然らば日本語では混同の虞があるから原語でクウヰンと稱せられたい、一體こんな事は譯語では誤解があり易いから英國ではソルダン。ザー。タイクン(大君なり諸外國も德川政府との外交文書には凡て此語を日本の主權者的意味に用ゐ居れり)など皆々其邦にて用うる名稱を其儘用うる故に、日本でも其例に倣つて英稱を用ゐらる方然るべしといつた。

そこで當局は此事件の當の横濱稅關長を呼んで聞いて見たが此時の稅關長は名にしおふ星亨であつた、勿論此時はこんな卑役であつたが生來の剛岸不屈に加ふるに洋行歸りの意氣天を衝くの時で

あつたから容易に屈せない。

どんな英語の辭書を見てもクヰーンはキングの配偶者又は王國の女性の君主とある、英國自ら其國を王國と稱し國主の男性を王即ちキングといひ女性をクヰーンといふから日本語で女王といはれても仕方があるまい、若し帝稱を欲するならば何ぞ自らエンプレスと稱せないのかといふ理由で滔々と辯じたてた、そこで二相は此意味を以てパークスの稱號論に答へた之にはパークスも稍ひるんだが併し此時の外務卿の言の中に眞面目とも冗談ともつかず、英稱を其儘用ふるときはクヰンの音は日本にては狗犬と相通ずるからそれでも宜しければ向後クヰンといふべしとの一言があつた、之を聞くや否やパークスは猛然として怒り立ち我大英國の君主に對し驚くべき言を外務卿より承はるものかな、當局の一言の過失は戰爭をも惹起することがある、今若し日本で我大英國と戰爭を起さば此コップの如く粉碎せらるゝこと必然だと大呼しながら卓上のコップを床の上に叩き付けて微塵とした。

之には外務卿は一言もなく其失言を謝した。只さへパークスには頭の上らなかつた當局のことであるから餘沫はとんだ處に飛んで、星亨は其職を免ぜられ剩へ罰金に處せられ諸外國に對しては自今公用文書には外國君主の原稱如何を問はず一體に皇帝と稱すべし。

但共和政治の國は大統領と稱すべしとの法律を公布してやつと事は納まつた。

之れが今日の用例となつたので敬稱に付いては皇帝は陛下。大統領は閣下と呼び攝政には殿下と稱することゝなつたのも此頃のことである。

それから魯國の魯は魯鈍の魯であるからとの抗議を申込まれて露國と稱することゝなつたのも此頃のことである、さて〳〵外交とは厄介なもので御座る。（了）

法曹珍話閻魔帳　終

法曹珍話閻魔帳
（定價金貳圓貳拾錢）

大正十五年六月十八日印刷
大正十五年六月十[illegible]日發行

著作者檢印

著作者　無用學博士

東京市日本橋區通四丁目五番地
發行者　和田利彦

東京市神田區松下町七番地
印刷者　佐藤磨

東京市神田區松下町七番地
印刷所　明治印刷株式會社

發行所　東京市日本橋區通四丁目五番地
（電話大手五一・四二一〇）
（振替口座東京一六一七）
春陽堂

田山花袋著 **燈影**
華なる紅燈の巷を背景に歌妓と中年の旦那と年若き情人との葛藤の情史。
新四六紙表装 壹圓五十錢 送料十二錢

島崎藤村著 **新生**（上卷）（下卷）
明治大正を通じて有數の傑作、深甚なる感動を喚ぶ人間苦を包む詩的名篇
四六判紙表装 各壹圓八十錢 各送料十二錢

長塚節著 **土**
日本文化の永遠に誇りとすべき田園文學の逸品で夏目漱石長序推奬の名作
平福百穗装 壹圓八十錢 送料十二錢

芥川龍之介 **影燈籠**
開化の良人、世之助の話、蜜柑、龍、魔術、葱、バルタザアル、春の心臟等
新四六紙装 壹圓貳十錢 送料八錢

菊池寛著 **我鬼**
藤十郎の戀、恩讐の彼方へ、奇蹟、我鬼、ある兄弟、晩年、舞臺に立つ妻
新四六紙装 金壹圓拾錢 送料八錢

谷崎潤一郎 **刺青** 外九篇
獨特の唯美主義惡魔主義神祕主義異國主義の鮮かに火花を散す傑作短篇集
新四六布装 金貳圓 送料拾貳錢

志賀直哉著 **荒絹**
我文壇第一流の名手たる著者の代表作十八編水晶の生氣と陽光の和に充つ
四六判布装 貳圓五十錢 送料拾貳錢

吉田絃二郎 **草路**
會心の作拾三篇を收む、言葉に草路の水聲を聽くべく懷しき限りである
四六判紙装 壹圓五十錢 送料拾貳錢

東京日本橋通 振替一六一七
春陽堂
電話大手 大手二四 一五一〇

525
278

終